

# 船橋市新山東遺跡

——前原団地建替事業関連埋蔵文化財調査報告書——

平成13年3月

都市基盤整備公団

財団法人 千葉県文化財センター

ふなばし しんやま ひがし  
船橋市新山東遺跡

— 前原団地建替事業関連埋蔵文化財調査報告書 —



## 序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第400集として、都市基盤整備公団（旧住宅・都市整備公団）千葉地域支社の船橋市前原団地建替事業に伴って実施した船橋市新山東遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代から縄文時代までの遺物や遺構が発見されるなど、この地域の先史・古代の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成13年3月31日

財団法人千葉県文化財センター  
理事長 中村 好成

## 凡 例

- 1 本書は、都市基盤整備公団（旧住宅・都市整備公団）による船橋市前原団地建替事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県船橋市前原西6-1ほかに所在する新山東遺跡（遺跡コード204-009）である。なお、発掘作業及び整理作業では遺跡名を新山東遺跡（2）として作業を行った。
- 3 発掘調査から報告書に至る業務は、都市基盤整備公団の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者は、本文中に記した。
- 5 本書の執筆は主席研究員 高橋博文が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、都市基盤整備公団千葉地域支社、船橋市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
  - 第4図 国土地理院発行 1/50,000地形図「東京東北部」(NI-54-25-2)  
国土地理院発行 1/50,000地形図「佐倉」(NI-54-19-14)
  - 第5図 国土地理院発行 1/25,000地形図「習志野」(N-54-19-14-4)
- 8 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 10 本文及び挿図に使用した記号とスクリーントーンの用例は、次のとおりである。

### ①記号

SI：竪穴住居跡

SK：炉穴・陥穴・土坑

### ②スクリーントーン



樹



貝ブロック



敲打痕

# 本文目次

序文

凡例

第1章 はじめに .....	1
第1節 調査の概要 .....	1
1 調査の経緯と経過 .....	1
2 調査の方法 .....	2
第2節 遺跡の位置と周辺の遺跡 .....	5
1 遺跡の位置 .....	5
2 周辺の遺跡 .....	7
第2章 検出した遺構と遺物 .....	9
第1節 旧石器時代 .....	9
1 概要 .....	9
2 遺構・遺物 .....	10
第2節 縄文時代 .....	30
1 概要 .....	30
2 遺構・遺物 .....	30
第3節 貝層サンプルの分析結果 .....	102
第3章 まとめ .....	108
第1節 旧石器時代 .....	108
第2節 縄文時代 .....	109
第3節 その他 .....	110
報告書抄録 .....	巻末

## 挿 図 目 次

第1図	調査範囲及びグリッド名称	2	第26図	002号住居跡(1)	45
第2図	上層確認トレンチ配置図	3	第27図	002号住居跡(2)	46
第3図	下層確認グリッド配置図と本調査範囲	4	第28図	003・004号住居跡	47
第4図	新山東遺跡位置図	6	第29図	005号住居跡(1)	48
第5図	新山東と周辺の遺跡	8	第30図	005号住居跡(2)	49
第6図	基本層序	9	第31図	006号住居跡	50
第7図	石器集中地点1出土状況(石材・器種別)	11	第32図	007号住居跡	51
第8図	石器集中地点1出土石器(1)	12	第33図	008号住居跡(1)	52
第9図	石器集中地点1出土石器(2)	13	第34図	008号住居跡(2)	53
第10図	石器集中地点2出土状況(石材・器種別)	18	第35図	009号住居跡	54
第11図	石器集中地点2出土石器(1)	20	第36図	010号住居跡	55
第12図	石器集中地点2出土石器(2)	21	第37図	011号住居跡(1)	56
第13図	石器集中地点3出土状況(石材・器種別)	24	第38図	011号住居跡(2)	57
第14図	石器集中地点3出土石器	25	第39図	012号住居跡(1)	58
第15図	石器単独出土状況(石材・器種別)	26	第40図	012号住居跡(2)	59
第16図	石器単独出土石器	27	第41図	012号住居跡(3)	60
第17図	接合資料(b~g)	28	第42図	012号住居跡(4)	61
第18図	縄文時代遺構配置図(B地区) (竪穴住居跡・土坑・陥穴)	31	第43図	013・014号住居跡	63
第19図	縄文時代遺構配置図(A地区) (炉穴・土坑)	32	第44図	015・016号住居跡	64
第20図	縄文時代遺構配置図(B地区) (ピット群)	33	第45図	011・012号土坑	65
第21図	001号炉穴(1)	35	第46図	013・014・015号土坑	66
第22図	001・002・005・006・007・008・ 009号炉穴, 004号土坑	36	第47図	016・017・018号土坑	68
第23図	019・020・023・089・103・118・119・ 120・121号陥穴	39	第48図	021・022・024・025・027号土坑	70
第24図	001号住居跡(1)	42	第49図	026・028・029・035・036号土坑	72
第25図	001号住居跡(2)	43	第50図	037・039・040・041・042・043・044・ 045・047・049・050・054・058・063・ 067号土坑	74
			第51図	046号土坑	76
			第52図	057・066・069号土坑	78
			第53図	070・071・072・073・074号土坑	79
			第54図	076・077・078・081・082号土坑	82
			第55図	085号土坑	84
			第56図	087・093・094・096・098・101・106・ 123号土坑	86

第57図	土器片錘 (1)	89	第62図	縄文時代石器 (3)	95
第58図	土器片錘 (2)	90	第63図	縄文時代石器 (4)	96
第59図	土製円盤	92	第64図	縄文時代石器 (5)	97
第60図	縄文時代石器 (1)	93	第65図	縄文時代石器 (6)	98
第61図	縄文時代石器 (2)	94	第66図	縄文時代石器 (7)	100

## 表 目 次

第1表	石器集中地点1出土石器観察表	14	第9表	縄文時代石器観察表(磨石類・石棒・ 軽石)	99
第2表	石器集中地点2出土石器観察表	22	第10表	縄文時代石器観察表(その他)	100
第3表	石器集中地点3出土石器観察表	23	第11表	オキアサリ殻長集計一覧	104
第4表	単独出土石器観察表	23	第12表	ハマグリ殻長集計一覧	104
第5表	石器接合表	29	第13表	マガキ殻長集計一覧	105
第6表	縄文土器観察表	87	第14表	貝種同定・頻度一覧	106
第7表	土器片錘観察表	91	第15表	近世焼物類組成表	111
第8表	縄文時代石器観察表(石鏃)	93			

## 図 版 目 次

図版1	遺跡周辺航空写真	図版15	SK-016・017・022・024・026・027・028
図版2	石器集中地点1・2・3遺物検出状況	図版16	SK-029・035・036・037・041・042・043・ 044
図版3	石器集中地点1出土石器	図版17	SK-045・046・047・048・049・050・051
図版4	石器集中地点2出土石器	図版18	SK-057・058・054・059・060・061・062・ 063・068
図版5	石器集中地点2・3・単独出土石器	図版19	SK-069・070・071・072・073・074・075・ 076
図版6	接合資料(a~g)	図版20	SK-077・078・081・084・085・096
図版7	接合資料構成石器(b~f)	図版21	SK-098・101・106・123
図版8	SI-001・002・003	図版22	SI-001・005・006・008出土土器
図版9	SI-004・005・006	図版23	SI-011・012, SK-001出土土器
図版10	SI-007・008・009	図版24	SI-001・003・004出土土器
図版11	SI-010・011・012	図版25	SI-002・009出土土器
図版12	SI-013・014, 立川ローム層断面	図版26	SI-005・007・008出土土器
図版13	SK-001・005・006・007・019・020・023・ 089・103・118	図版27	SI-011出土土器
図版14	SK-119・120・121・011・012・013・014・ 015		

- |      |                                |      |                   |
|------|--------------------------------|------|-------------------|
| 図版28 | SI-012出土土器                     | 図版35 | 土器片鏟（1）           |
| 図版29 | SK-001・002・011・012・015出土土器     | 図版36 | 土器片鏟（2）           |
| 図版30 | SK-013・014・016・017出土土器         | 図版37 | 土製円盤，石鏟・その他の石器・石斧 |
| 図版31 | SK-018・025・027・028・029・046出土土器 | 図版38 | 縄文時代石製品（1）        |
| 図版32 | SK-046・057・066・069・070・082出土土器 | 図版39 | 縄文時代石製品（2）        |
| 図版33 | SK-085出土土器                     | 図版40 | 縄文時代石製品（3）        |
| 図版34 | SK-074・076・077・087・098出土土器     |      |                   |

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の概要

### 1 調査の経緯

都市基盤整備公団（旧住宅・都市整備公団）によって、船橋市前原団地の建替が計画された。事業地内の埋蔵文化財の取り扱いについて関係機関との協議を行った結果、やむを得ず発掘調査による記録保存を行うこととなり、財団法人千葉県文化財センターが委託を受け、発掘調査を実施した。

発掘調査は調査対象面積23,000㎡のうち中央を横切る道路を挟んで面積8,000㎡の南側をA区、調査面積15,000㎡の北側をB区と呼称し分割して調査を行うこととなった。平成9年度は、上層の確認調査については建物部分を除くA区の6,150㎡とB区6,350㎡合計12,500㎡について平成9年7月1日から8月12日まで実施した。その結果、A区は総体的に上層部分の削平が激しく検出された遺構は少なく、縄文早期の炉穴等が少数確認されたのみであった。B区は縄文中期を中心として多数の遺構が確認された。その結果A区及びB区の遺構が検出された範囲合わせて8,000㎡（A区250㎡、B区7,750㎡）の上層本調査を実施した。上層の本調査終了に引き続いて下層の確認調査を実施した。なお、A区は下層確認の対象面積が1,850㎡ふえ、合計面積14,350㎡について下層の確認調査を実施することとなった。その結果、2地点合計490㎡（A区425㎡、B区65㎡）について下層の本調査を実施した。発掘調査は確認及び本調査を9年度は途中の中断を挟んで平成9年7月1日から平成9年9月30日までと平成10年3月1日から平成10年3月30日までの2回にわたり実施した。10年度は平成10年4月1日から平成10年5月29日までB区の建物部分の残り7,700㎡について上層については確認調査を行わず上層の本調査を行い、終了後引き続いて下層の確認調査を実施した。しかし平成10年度は下層の本調査には至らず予定どおり5月29日すべての発掘調査を終了した。

整理作業は、発掘調査終了に引き続いて平成10年度から実施した。発掘調査及び整理作業を行った組織と担当者は以下のとおりである。

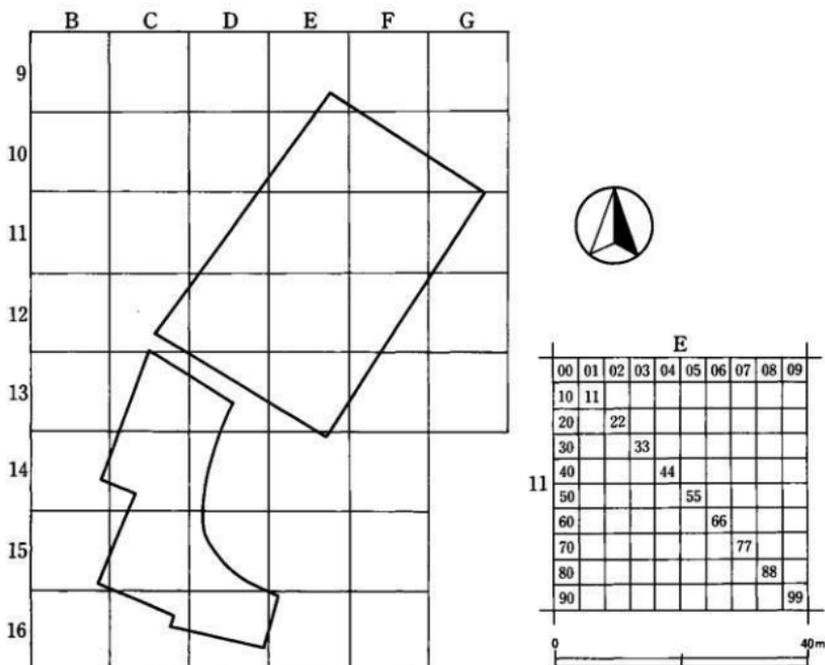
発掘調査	平成9年度	調査部長	西山太郎	所長	折原 繁
		研究員	白鳥 章	主任技師	綿貫 貴
平成10年度	調査部長	沼澤 豊	所長	折原 繁	
		主任技師	福田 誠	石田清彦	
整理作業	平成10年度	調査部長	沼澤 豊	所長	折原 繁
		主任技師	福田 誠		
平成11年度	調査部長	沼澤 豊	所長	折原 繁	
		主任研究員	高橋博文	研究員	玉井ゆかり
平成12年度	調査部長	沼澤 豊	所長	石田広美	
		主席研究員	高橋博文		

## 2 調査の方法 (第1～3図)

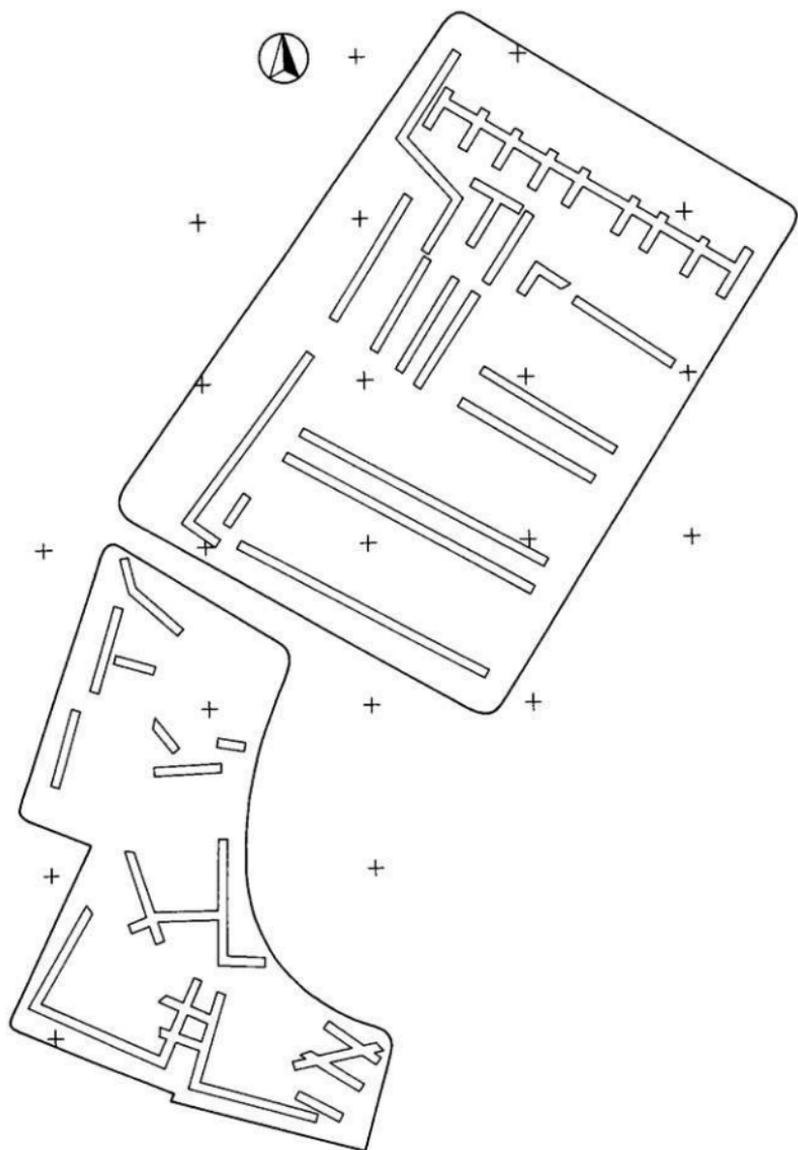
発掘調査の開始に際して、対象となる区域を包括するように国土地理院国家座標（第IX座標）を基準とした発掘区の設定を行った。一辺40mの大グリッドを設定し、さらにその大グリッドを一辺4mの小グリッドに分割し大グリッドの北西隅の小グリッドを00とし東へ向かって01, 02, 03…と、南へ向かって10, 20, 30…と命名し100の小グリッドに分割して最小区域の調査区とした。

上層の確認調査は、調査開始時に残っている建物部分を除く範囲に幅2mのトレンチを状況に合わせて対象面積の10%の割合で設定し、遺構・遺物の分布状況及び表土等の堆積状況などの把握につとめた。その結果遺構及び遺物が検出された範囲は引き続いて本調査が実施された。

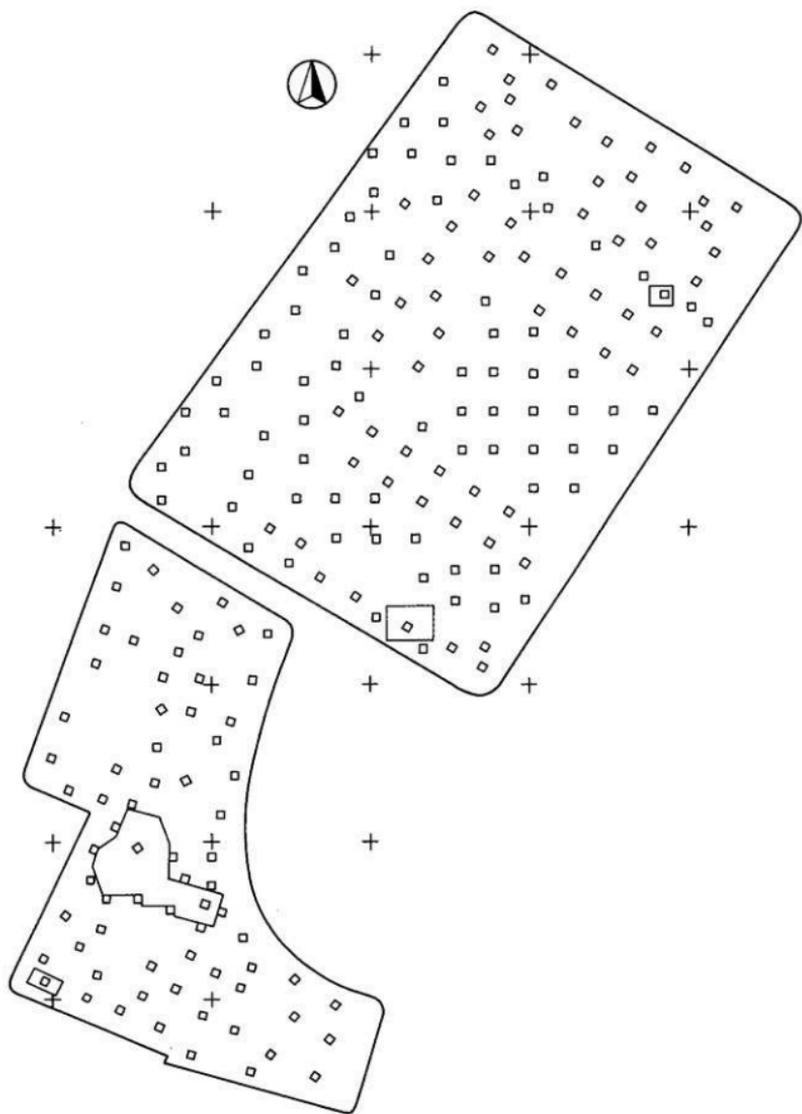
下層の確認調査は、上層の本調査に引き続き調査区に2m×2mのグリッドを対象面積の4%の割合で設定し、クラムシェルと人力を併用して実施した。遺物を検出したグリッドは、周囲を拡張し遺物の出土状況を確認し、さらに周辺に広がる様相があった地点については本調査を実施した。



第1図 調査範囲及びグリッド名称



第2図 上層確認トレンチ配置図



第3図 下層確認グリッド配置図と本調査範囲

## 第2節 遺跡の位置と周辺の遺跡

### 1 遺跡の位置（第4図，図版1）

新山東遺跡は、船橋市前原西6-1ほかに所在する。JR総武線津田沼駅の北約1kmの距離に位置する台地上に立地する。船橋市市街地中心部からでも東へ約2kmほどの距離になる。現在、本遺跡の台地周辺は近年の開発が進み学校や団地、住宅などが建ち、広く台地を切り開き古くからの景観をとどめている場所はわずかに残るのみである。

本遺跡が立地する台地は、千葉県北部を占めて広がる下総台地の南西端付近に位置し、標高が20m前後の台地である。現在この台地端から西に約1.4kmの距離に海老川が南に向かって流れ1kmほどで東京湾に注ぐ。また、本遺跡を挟むように台地の北側と南側には海老川に向かって浸食谷が形成され台地を東西に細長い舌状台地としている。新山東遺跡はこの南側の小支谷を臨むやや奥まった台地上に立地する。本遺跡が営まれていた縄文時代中期後半頃の周辺地域の自然環境はどうであったのだろうか。

縄文時代草創期、今から約1万2千年前ごろは氷期も終りに近づき海水面が最も低下した時期で現在の海水面よりも10数mほども低くなっていたと考えられている。その後早期、前期と時が下るにつれて温暖となり海水面は徐々に上昇し、海は関東平野の内陸部へ侵入していった、いわゆる海進である。その最盛期は縄文前期にあたる今から約6千年前ごろを迎え、海水面は現在より5mほど高くなっていたと考えられる。時代が進んで縄文時代中期の約5千5百年前頃からは海水面が徐々に低下するいわゆる海退が始まり、このころにはすでに海水面が2mほど低下していたと考えられている。ちょうど本遺跡が集落を営んでいた頃である。本集落周辺の自然環境も少しずつ変化し始める時期を迎えていたことにならうか。それを知る手掛かりとしては、本遺跡周辺の同時代あるいは前後する時代の遺跡、とりわけ貝塚の形成される状況や採取された自然遺物や遺体から知ることが出来るであろう。貝塚（層）を形成する貝の大きさや種類、構成の割合などが多少なりとも差異が見られる。例を上げれば、縄文前期に見られた暖かい季候に生息するハイガイが、同じく砂泥底に生息するサルボウガイの出土は見られるものハイガイは見られなくなるなど、その証と考えられまいだろうか。

また、地形的から見たらどんな時代であったのだろうか。下総台地に降り積もった水の流れは徐々に台地を浸食して大小の谷をつくり、広大な台地を狭小な樹枝状台地に変えていった。また、それぞれの小さな水の流れはやがて一つにまとまり大きな流れとなり古東京湾へ注ぐ川となった。現在の海老川はそうして出来上がった川である。本遺跡周辺で見ると谷を削った小さな水の流れは本遺跡の立地する台地を東西に細長い台地と成した。北側を西に向かって流れる前原川と南側をやはり西に向かって流れる中野木川と現在は呼ばれ今でも水の流れを絶やさないでいる。海老川が東京湾と接する河口付近には、夏見台・船橋台・海神台に囲まれた船橋北裏と呼ばれる広い低地が広がっていた。また、この付近は東京湾でも最も遠浅の地域であり、干潮時には1km～2km近くも海が後退し、広く砂浜が続く状況であったと考えられる。それを証明するかのように今回の調査では遺構から検出された貝層を構成する貝の種類を見ると、満潮時には海の底となり、干潮時には広き砂浜になっていた潮間帯に生息する貝種例えばハマグリ、オキアサリ、サルボウガイなどが多く検出されている。余談ではあるが、船橋北裏低地には、海神台寄りに古くから砂嘴が形成されていった、さらに時代が下ると砂嘴の東側に接して海岸低地との間に砂丘が形成されていった。時が経って上代にはこの砂嘴と砂丘に囲まれた船橋北裏低地に小規模な潟湖が存在していたとされる。このように海老川の河口付近は非常に長い間にわたって遠浅の海であったことがわかる。



第4図 新山東遺跡位置図

本遺跡が立地する台地の西から北側には緑豊で肥沃な下総台地が広がり山の幸を、また海老川を下り南へ2km～3kmほどの距離には浅淺の海が広がり、豊富な海の幸を育てていた。こうした豊かな生活環境を背景に、ここ新山の地に縄文人の集うムラが営まれていったのであろう。

## 2 周辺の遺跡 (第5図)

今回の発掘調査で検出された遺構や遺物はその主体が縄文時代中期後半に集中している。そこで縄文時代中期に注目して周辺の遺跡を見てみることにする。

船橋市内の縄文時代の遺跡の中で最も遺跡数の多くなる時代は中期であるようだ。分布状況を見ると市の北東部に広がる印旛沼水系、東京湾岸は船橋北裏低地を挟んで東側の海老川水系、西側の真間川水系の2つに分かれ、大きく3つの遺跡分布領域に区分されてる。これによると本新山東遺跡は海老川水系の最南端部に位置する遺跡となる。

本遺跡が立地する台地はほぼ台地全域が中野木台遺跡群として捉えられ、西端の西駿河台から東端の新山東遺跡まで7遺跡が隣接して存在することが確認されている。これらの遺跡群で本遺跡と同じ縄文時代中期後半期の遺跡は、西に中野木新山遺跡が、北西部に中野木台遺跡が隣接して存在している、これらの遺跡からは本遺跡と同様に遺構内に貝層を伴う遺構が多数検出されている。本遺跡の南側の広大な台地には縄文時代を含めて遺跡として確認されている数は非常に少ない。本遺跡と谷を挟んで縄文草創期・早期の佐倉道南遺跡、後期の宮本台遺跡が知られるのみである。北側には飯山満遺跡群を始め飯山満東遺跡や古和田台遺跡を代表とする多くの遺跡が分布する。また、北東方向約3kmの距離には海老川水系でも最奥部に位置する縄文中期の集落遺跡である高根木戸貝塚や高根木戸北貝塚が存在する。このように本遺跡が属する海老川水系の本・支流が造った谷を臨む台地には実に多くの縄文時代の遺跡が分布している。

第5図には海老川水系を中心とする縄文時代遺跡の分布状況を示した。なお、前述した縄文時代中期の代表的な遺跡及び貝塚には番号を付して示した。

1 新山東遺跡 (包蔵地/縄文中・後)    2 中野木新山遺跡 (包蔵地/縄文早・中・後)    3 中野木台遺跡 (集落跡・貝塚/縄文中)    4 東駿河台遺跡 (包蔵地/縄文中)    5 佐倉道南遺跡 (包蔵地・集落跡/縄文早・前・中)    6 宮本台貝塚 (集落跡・貝塚/縄文後)    7 飯山満東遺跡 (集落跡/縄文早～後)    8 小和田台遺跡 (集落跡/縄文前・中)    9 高根木戸貝塚 (貝塚・集落跡/縄文中)    10 高根木戸北貝塚 (貝塚・集落/縄文中)    11 唐沢台貝塚 (貝塚/縄文中)    12 上飯山満南貝塚 (貝塚・集落跡/縄文中)    13 葉園台貝塚 (貝塚/縄文中・後)    14 滝台貝塚 (貝塚/縄文中・後)    15 谷津貝塚 (習志野市菊田川水系、包蔵地・貝塚/縄文後)



第5図 新山東と周辺の遺跡

新山東と周辺の遺跡

新山東と周辺の遺跡

## 第2章 検出した遺構と遺物

### 第1節 旧石器時代

#### 1 概要

新山東遺跡周辺環境などについては既に述べたとおりである。さて、今回調査を行った場所は中野木川が流れる支谷を南に臨む標高20mほどの台地上であり、南西側には北に向かって浅い谷津が入り込んでいる。南北に長い調査地区は真ん中を東西に走る道路を挟んで北側（B区）と南側（A区）に分けられる。

旧石器時代の石器集中出土地点は3か所、北の調査区南端付近1か所と南の調査区中央付近から2か所、ちょうど西側に浅く入り込む谷津に沿って台地が緩やかに傾斜し始める付近から検出された。そのほかには単独で遺物が出土した地点がやや離れて2か所検出された。立川ローム層VII層から1か所、同じくIX層から2か所の2枚の文化層になる。

#### 基本層序（第6図、図版11）

本遺跡は、先にも述べたが、攪乱が激しく表土層からの基本層序の検出が難しかった。そこでここで基本層序の資料とした土層断面は、北側調査区の東端中央付近の下層確認グリッド12E-83区北面のものである。表土層を除去された以下の立川ローム層を中心とした層序について述べることにする。

III層 ソフトローム層、褐色を呈する軟質ロームである。なお、IV層は軟質化しIII層に取り込まれてしまったのか、その存在を確認できなかった。

V層 褐色を呈する硬質ロームであり、VI層と比較するとやや暗い色を呈する、第1黒色帯に相当する。

VI層 褐色を呈する硬質ロームである。始良丹沢パミス（AT）を含む明黄褐色のロームブロックを多く含む。

VII層 褐色を呈する硬質ロームである。VI層と比較してやや暗い。黒色スコリアがやや多くなる。第2黒色帯上部に相当する。

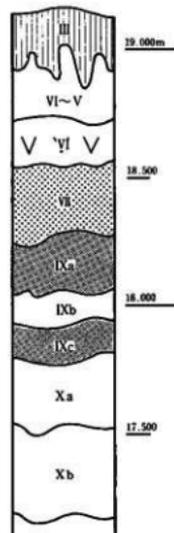
IXa層 暗褐色を呈する。赤色スコリアをやや多く含む。第2黒色帯下部上半部に相当する。

IXb層 暗褐色を呈する。褐色のロームブロックを含む。上下層のIXa・IXc層と比較して若干明るい色を呈する。第2黒色帯下部中間部に相当する。

IXc層 暗褐色を呈する。IX層の中では最も暗い。赤色スコリアを含む。第2黒色帯下部に相当する。

Xa層 褐色を呈する。すぐ上層のIXc層と比べると明るい。

Xb層 褐色を呈する。Xa層と比較して暗く、赤色スコリアを多く含む。



第6図 基本層序

## 2 遺構・遺物

旧石器時代の石器集中地点は3か所、単独出土地点は2か所検出されている。1地点を除き調査区の南側に集中的に検出されている。以下にその概要を述べることにする。

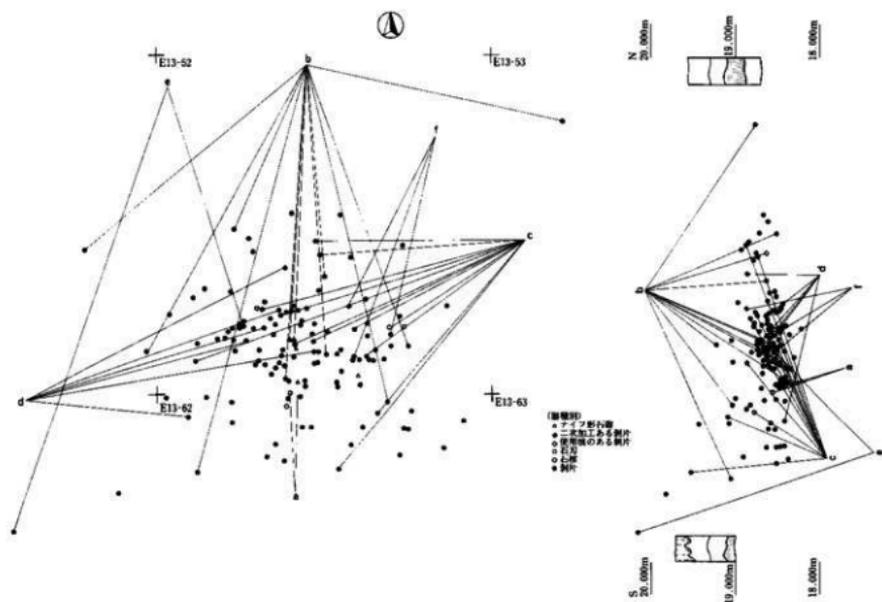
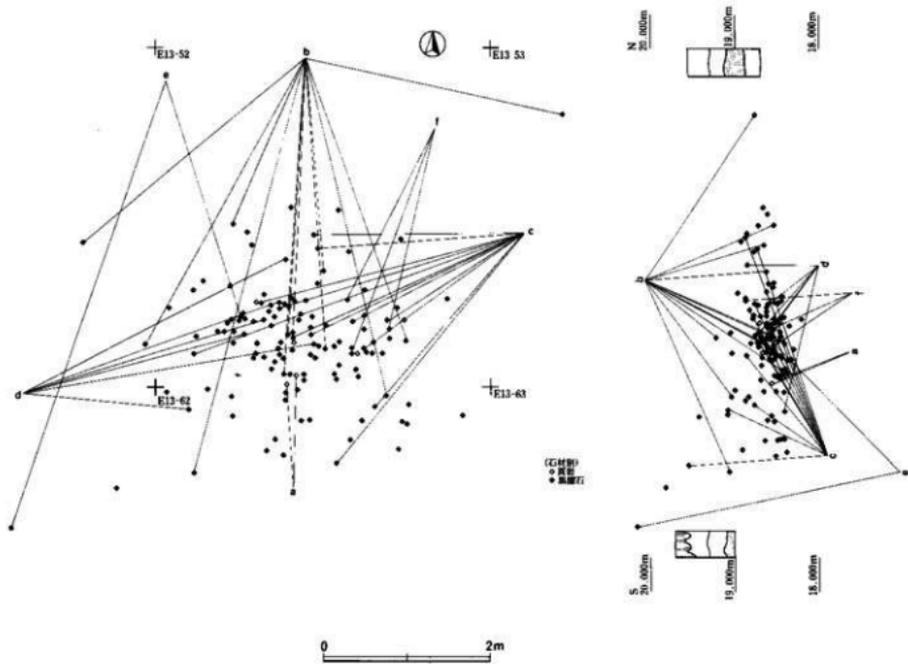
### 石器集中地点1（第7～9図，第1表，図版2・3）

本遺跡から検出された集中地点の中では遺物の数が最も多く、極めて狭い範囲にまとまって検出された石器群である。B地区の南端に近く、遺物の平面分布はグリッド12E-52を中心におよそ6m×4mの範囲に総数134点の遺物が出土している。特に中心部の2.5m×2.5mの狭い範囲に大半の遺物が集中し、実に8割近い数にのぼる。またのちに述べるが石器のほとんどが石器素材が同一個体であることから本集中地点は非常に短時間の間に形成されたものであると考えられる。次に遺物の垂直方向の分布状況を見てみると上下に多少のばらつきはあるものの中心的な分布層位は立川ローム層のIX層である。

石材 総数134点の石器が検出されているが、実に96%にあたる128点が黒燐石である。それもほとんどが同一母岩と考えられる。残り6点（4%）はチョコレート色を呈する頁岩である。黒燐石は2つの母岩に分類でき、総数128点のうちの98%にあたる125点の一つの母岩で、のちに述べるが5個体に総数35点の剥片が接合関係にある。頁岩は3つの母岩に分類され、そのうちの2点が接合関係にある。

石器 本集中地点の器種構成はナイフ形石器2点、石刃2点、使用痕がある剥片（以下略記してUFと明示）2点、二次加工がある剥片（以下略記してRFと明示）5点、石核2点および剥片・砕片が123点である。本集中地点は石材からも見られるように黒燐石を中心として剥片剥離作業が行われている、ほとんどが同一母岩からの連続的な作業であるが、その多くは剥片や砕片が多く石器として明確に捉えられるものは図示した5点のみである。残るその他の石器7点と剥片2点の合計9点は接合関係が一部に見られるものの製品又はそれに近い形で本遺跡に持ち込まれている可能性が高い。以下器種別にまとめて示す。

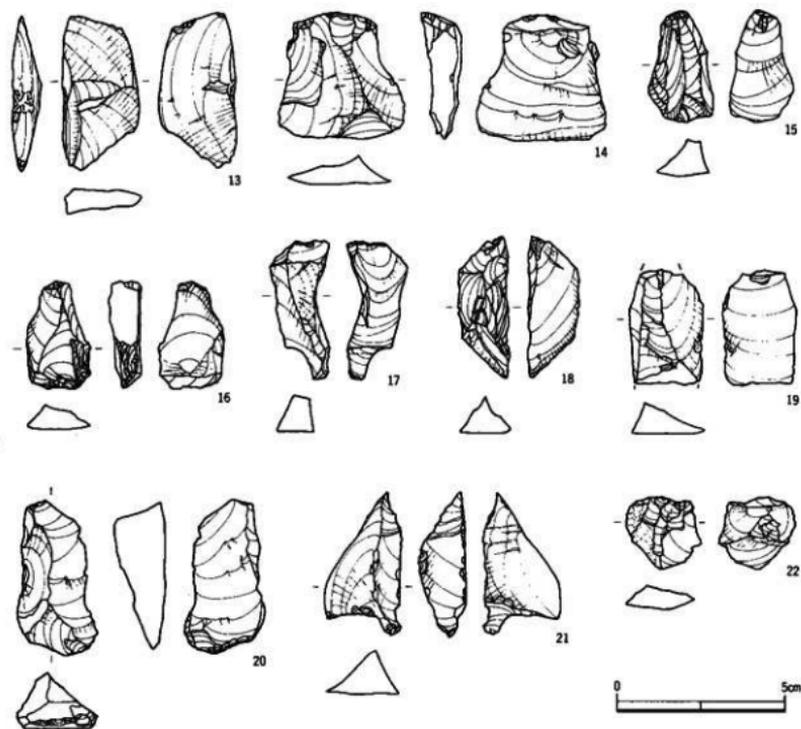
1はチョコレート色を呈する頁岩製のナイフ形石器である。石刃状剥片を用いている。剥離面打面であるが、打撃時に打点の一部を欠いている。両側縁に背面と腹面それぞれから打面、打点を損することなく調整を行い基部を作っている。やや肥厚する先端部にも細部調整を行っている。2は、1と同様なチョコレート色を呈する頁岩製の剥片である。打面側のおおよそ半分を欠いている。1のナイフ形石器の作成時に剥離したものと考えられる。1のナイフ形石器と基部付近で接合する（接合資料a）。3はチョコレート色を呈する頁岩製のナイフ形石器である。残る打面の打点の反対側に残る二辺に調整を加え基部を作り出している。左側縁に腹面からの打撃によるノッチ様の調整が見られる。先端は折れ欠損しているが、右側縁に背潰しと考えられる調整が加えられている。4はチョコレート色を呈する頁岩製の石刃である。後縁はほぼ平行して3本走る。中央部から基端部へかけてほぼ半分と先端部付近にも若干の欠損がある。5は黒燐石製の二次加工を有するやや寸詰まりな横長剥片である。二次加工は打点近くに広く加えられており、形状からは台形様石器に類似する。6は黒燐石の二次加工を有する剥片（表記では「RF」と略記号で表す）である。長さに対してかなり厚い剥片である。打面は剥離面打面で、本来は寸詰まりではあるが縦長剥片であったと考えられる。両側縁に階段状剥離痕が見られる。7は黒燐石の二次加工を有する剥片である。



第7図 石器集中地点1出土状況(石材・器種別)



第8圖 石器集中地点1出土石器(1)



第9図 石器集中地点1出土石器(2)

打面は欠損している。一辺に調整が行われている。8は黒曜石の二次加工を有する剥片である。打面は欠損しているが、寸詰まりの三角形を呈するやや大きい横長剥片である。細部調整は打点付近と先端部縁辺に加えられている。9は黒曜石の石核である。腹面が残る背面側で剥片剥離を行っている。10は黒曜石の石核である。原面（原石の表面ではないが、長期間放置されていた様子を示すように表面が風化している）を一部に残す。主要剥離面は剥離作業により失われている。しかし9と10の両石核からは、思うような剥片は得られなかったのではないかとと思われる。11は頁岩の二次加工を有する剥片である。剥離面打面の付近が残るのみである。右縁辺に腹部側からの打撃による細部調整が加えられている。1と2の頁岩と同一母岩である。12は黒曜石の二次加工を有する縦長剥片である。細部調整は打面付近を中心に行われている。打面は失われ、また先端部付近は折れにより欠損している。13は黒曜石の寸詰まりな横長剥片である。打面を含む基端部から中央付近にかけては折れて欠損し、先端部付近の約半分ほどが残る。右縁辺は背面からの打撃、左縁辺は腹面からの打撃により細かな剥離痕連続して認められる。また、右縁辺の折れ部分

第1表 石器集中地点1出土石器観察表

No	出土位置	遺物 番号	種 類	石 材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	図版 番号	備 考
1	13E-51	0001	剝片	黒耀石	21.00	18.35	5.50	1.4		接合資料 b
2	-	0002	UF	黒耀石	38.10	38.95	9.90	12.37	14	接合資料 b
3	13E-52	0001	剝片	黒耀石	6.00	13.20	2.70	0.16		
4	-	0003	剝片	黒耀石	13.60	11.70	3.00	0.35		
5	-	0004	剝片	黒耀石	10.75	12.00	1.75	0.11		
6	-	0005	剝片	黒耀石	10.85	11.05	2.95	0.29		
7	-	0007	剝片	黒耀石	25.25	12.75	4.75	0.67		接合資料 c
8	-	0008	剝片	黒耀石	13.65	6.90	3.20	0.15		
9	-	0009	剝片	黒耀石	4.85	7.40	0.65	0.02		
10	-	0010	剝片	黒耀石	31.7	19.45	9.75	5.23	16	接合資料 c
11	-	0011	剝片	黒耀石	41.75	17.85	13.45	6.73	17	接合資料 c
12	-	0012	剝片	黒耀石	3.70	3.60	1.15	0.1		
13	-	0013	剝片	黒耀石	14.45	11.15	3.65	0.69		
14	-	0014	RF	黒耀石	33.00	32.90	18.20	15.55	6	接合資料 c
15	-	0015	剝片	黒耀石	21.00	24.00	6.10	2.1	22	接合資料 d
16	-	0016	剝片	黒耀石	11.95	11.5	3.65	0.15		
17	-	0017	剝片	黒耀石	7.25	4.15	0.35	0.01		
18	-	0018	剝片	頁岩	9.45	9.40	3.40	0.43		
19	-	0019	剝片	黒耀石	3.95	3.00	0.50	0.01		
20	-	0020	剝片	黒耀石	38.00	39.80	17.40	20.09	9	接合資料 b
21	-	0021	石刃	頁岩	27.20	16.60	3.40	1.48	4	
22	-	0022	剝片	黒耀石	6.45	6.80	2.35	0.06		
23	-	0023	剝片	黒耀石	25.65	32.05	13.70	10.21	7	接合資料 c
24	-	0024	RF	黒耀石	20.40	12.85	5.00	0.82		接合資料 f
25	-	0025	剝片	黒耀石	9.90	6.65	0.80	0.03		
26	-	0026	剝片	黒耀石	11.55	15.45	1.90	0.38		接合資料 c
27	-	0027	剝片	黒耀石	11.80	19.90	3.40	0.48		接合資料 c
28	-	0028	剝片	黒耀石	41.20	24.20	7.10	6.45	5	接合資料 d
29	-	0029	剝片	黒耀石	6.89	6.35	1.35	0.03		
30	-	0030	剝片	黒耀石	9.30	9.85	2.10	0.11		
31	-	0031	剝片	黒耀石	11.85	8.70	2.25	0.17		
32	-	0032	剝片	黒耀石	6.00	5.35	1.45	0.02		
33	-	0033	剝片	黒耀石	40.75	15.35	15.05	6.33	18	接合資料 c
34	-	0034	剝片	黒耀石	7.65	9.00	1.80	0.12		
35	-	0035	剝片	黒耀石	12.45	11.75	4.35	0.42		接合資料 f
36	-	0036	剝片	黒耀石	13.00	14.35	5.75	0.67		
37	-	0037	剝片	黒耀石	10.25	18.35	3.05	0.17		接合資料 f
38	-	0038	剝片	黒耀石	9.45	5.05	1.35	0.04		
39	-	0039	剝片	黒耀石	11.45	9.95	1.07	0.13		
40	-	0040	剝片	黒耀石	15.45	13.15	2.25	0.26		
41	-	0041	剝片	黒耀石	6.90	8.80	1.35	0.03		
42	-	0042	剝片	黒耀石	7.85	10.05	1.50	0.08		
43	-	0043	剝片	黒耀石	22.50	8.35	5.35	0.65		接合資料 d
44	-	0044	剝片	黒耀石	2.70	3.05	1.60	0.01		
45	-	0046	剝片	黒耀石	4.45	4.45	1.15	0.01		

No.	出土位置	遺物 番号	種 類	石 材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	図版 番号	備 考
46	13E-52	0047	剥片	黒耀石	14.90	15.80	3.05	0.57		
47	-	0048	剥片	黒耀石	20.00	16.85	5.65	1.25		
48	-	0049	剥片	黒耀石	34.00	12.00	5.15	0.85		接合資料 d
49	-	0050	剥片	黒耀石	12.50	14.25	1.60	0.2		接合資料 b
50	-	0051	剥片	黒耀石	8.25	13.00	2.40	0.17		
51	-	0052	剥片	黒耀石	6.60	10.20	2.95	0.08		
52	-	0053	石刃	頁岩	16.30	17.50	2.75	0.52	2	接合資料 a
53	-	0054	剥片	黒耀石	15.30	7.85	3.15	0.27		
54	-	0055	剥片	黒耀石	4.70	3.70	1.35	0.01		
55	-	0056	剥片	黒耀石	5.75	8.10	1.20	0.01		
56	-	0057	剥片	黒耀石	21.75	7.55	5.85	0.53		
57	-	0058	石核	黒耀石	37.00	35.65	17.85	18.91	10	接合資料 c
58	-	0059	剥片	黒耀石	8.65	15.90	3.00	0.21		
59	-	0060	剥片	黒耀石	43.85	25.00	14.50	9.03	21	接合資料 b
60	-	0061	剥片	黒耀石	7.80	15.35	1.80	0.18		
61	-	0062	剥片	黒耀石	13.25	11.10	1.55	0.24		
62	-	0063	剥片	黒耀石	26.85	31.90	7.55	5.86		接合資料 b
63	-	0064	剥片	黒耀石	9.90	17.55	1.95	0.11		
64	-	0065	剥片	黒耀石	12.15	6.25	2.40	0.13		
65	-	0066	剥片	黒耀石	22.25	17.70	4.45	1.53		
66	-	0067	剥片	黒耀石	8.75	7.25	1.45	0.07		
67	-	0068	剥片	黒耀石	14.85	21.70	4.70	1.06		接合資料 e
68	-	0069	剥片	黒耀石	5.65	7.5	0.35	0.01		
69	-	0070	剥片	黒耀石	3.40	6.35	1.20	0.01		
70	-	0071	剥片	黒耀石	3.25	7.15	0.80	0.03		
71	-	0072	剥片	黒耀石	7.20	6.55	6.35	0.63		
72	-	0073	R F	黒耀石	36.50	26.35	6.45	4.93	12	
73	-	0074	剥片	黒耀石	10.60	10.20	12.45	0.12		
74	-	0075	石刃	頁岩	21.95	20.85	5.10	2.46	11	
75	-	0076	剥片	黒耀石	4.45	7.10	0.90	0.03		
76	-	0077	剥片	黒耀石	12.9	6.80	3.15	0.16		
77	-	0078	剥片	黒耀石	8.80	22.80	5.10	0.58		接合資料 b
78	-	0079	剥片	黒耀石	11.35	11.80	1.80	0.19		
79	-	0080	剥片	黒耀石	4.10	6.95	0.75	0.01		
80	-	0081	剥片	黒耀石	44.95	65.40	11.90	21.76	8	接合資料 b
81	-	0082	ナイフ形石器	頁岩	53.90	23.58	9.90	10.88	3	
82	-	0083	剥片	黒耀石	7.00	5.30	1.80	0.05		
83	-	0084	剥片	黒耀石	2.25	5.70	1.65	0.01		
84	-	0085	剥片	黒耀石	3.95	5.80	1.15	0.02		
85	-	0086	剥片	黒耀石	11.50	6.90	3.10	0.17		
86	-	0087	ナイフ形石器	頁岩	74.75	30.00	13.00	18.51	1	接合資料 a
87	-	0088	剥片	黒耀石	33.20	21.25	13.00	6.29	15	接合資料 c
88	-	0089	剥片	黒耀石	21.45	12.45	2.90	0.48		
89	-	0090	剥片	黒耀石	8.35	9.85	1.75	0.12		
90	-	0091	剥片	黒耀石	12.65	11.20	2.00	0.13		
91	-	0092	剥片	黒耀石	45.10	23.85	15.60	12.12	20	接合資料 d

No	出土位置	遺物 番号	種 類	石 材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	図版 番号	備 考
92	13E-52	0093	剥片	黒耀石	14.65	15.50	1.35	0.12		
93	-	0094	剥片	黒耀石	17.15	13.75	6.70	0.74		
94	-	0095	剥片	黒耀石	3.25	4.95	0.95	0.01		
95	-	0096	剥片	黒耀石	1.85	5.25	1.95	0.01		
96	-	0097	剥片	黒耀石	13.00	9.40	2.60	0.17		
97	-	0098	剥片	黒耀石	9.00	2.10	1.40	0.02		
98	-	0099	剥片	黒耀石	7.20	10.40	26.50	0.15		
99	-	0103	剥片	黒耀石	4.75	9.40	1.80	0.05		
100	-	0104	剥片	黒耀石	3.00	0.30	0.85	0.02		
101	-	0105	剥片	黒耀石	13.50	9.55	5.95	0.38		
102	-	0106	剥片	黒耀石	12.50	14.90	1.35	0.12		
103	-	0107	剥片	黒耀石	14.00	9.10	3.00	0.25		
104	-	0108	剥片	黒耀石	19.15	17.00	6.90	1.04		
105	-	0109	剥片	黒耀石	9.30	5.70	1.03	0.05		
106	-	0110	剥片	黒耀石	7.30	10.80	3.25	0.16		接合資料 b
107	13E-53	0001	剥片	黒耀石	17.55	24.15	3.00	0.5		接合資料 b
108	13E-61	0001	剥片	黒耀石	11.25	13.15	2.10	0.21		
109	-	0002	剥片	黒耀石	10.20	18.00	4.45	0.67		接合資料 e
110	13E-62	0001	剥片	黒耀石	12.45	13.95	2.15	0.32		
111	-	0002	剥片	黒耀石	12.4	19.70	3.20	0.61		接合資料 c
112	-	0003	剥片	黒耀石	24.70	17.10	7.10	2.34		接合資料 b
113	-	0004	剥片	黒耀石	12.50	11.20	2.70	0.21		
114	-	0005	剥片	黒耀石	7.10	13.45	3.30	0.18		
115	-	0006	剥片	黒耀石	6.00	6.45	2.20	0.13		接合資料 c
	-	0006	剥片	黒耀石	20.15	27.75	7.35	3.6		接合資料 c
116	-	0007	剥片	黒耀石	24.40	26.60	3.90	1.69		
117	-	0008	剥片	黒耀石	19.00	15.40	3.80	0.8		接合資料 b
118	-	0009	UF	黒耀石	22.85	46.70	8.65	7.84	13	
119	-	0010	剥片	黒耀石	15.00	13.30	8.30	1.71		
120	-	0012	剥片	黒耀石	18.65	20.10	5.40	1.33		
121	-	0014	剥片	黒耀石	17.20	9.20	3.10	0.29		
123	-	0015	剥片	黒耀石	8.30	8.00	1.30	0.06		
124	-	0016	剥片	黒耀石	8.10	1.00	1.70	0.11		
125	-	0017	剥片	黒耀石	3.50	7.25	2.10	0.04		
126	-	0018	剥片	黒耀石	11.00	10.85	2.60	0.36		
127	-	0019	剥片	黒耀石	8.20	17.55	4.85	0.49		
128	-	0020	剥片	黒耀石	5.20	4.75	0.90	0.01		
129	-	0021	剥片	黒耀石	6.30	9.30	3.95	0.25		
130	-	0022	剥片	黒耀石	9.30	5.80	1.35	0.01		
131	-	0023	剥片	黒耀石	15.00	29.00	6.30	1.72		接合資料 d
132	-	0024	剥片	黒耀石	10.15	13.45	2.20	0.22		
133	-	0025	剥片	黒耀石	12.15	8.45	1.85	0.06		
134	-	0026	剥片	黒耀石	33.50	21.90	8.60	6.42	19	

はノッチ様の細部調整も見られる。14は黒耀石の使用痕を有する剥片である。剥離面打面を残す寸詰まりな（横長）剥片である。両縁辺に細かな剥離痕を残す。また、打面の背面側の縁にも打面側からの細かな剥離痕が見られる。15は黒耀石の断面形状が台形を呈する寸詰まりな縦長剥片である。打面は残すものの打点は欠損する。16は黒耀石の縦長剥片である。剥離面打面と打点は残すが、先端部は欠損している。原因は不明。本剥片に残る打面の打点の反対側には連続する調整が行われている。17は黒耀石の厚手の縦長剥片である。剥離面打面を残すが、打点は付近の調整により欠損している。18は黒耀石の厚手の剥片であるが縦長か横長かは判然としない。打面及び打点は共に欠損している。19は黒耀石の寸詰まりの縦長剥片である。打面は欠損している。先端部には主要剥離面側からのみの調整が直線的に横断して加えられている。基部付近の欠損の原因が不明であるので使用痕を有する剥片（表記では「UF」と略記号で表す。）とした。20は黒耀石の断面三角形を呈する厚手の縦長剥片である。打面は欠損している。先端部付近には調整が加えられている。21は黒耀石の断面三角形を呈する厚手の横長剥片である。打面は欠損している。22は黒耀石の横長剥片である。打面は剥離面打面である。

#### 石器集中地点2（第10～12図，第2表，図版2・4・5）

本石器群はA区のほぼ中央付近，グリッド15C-05を中心にして半径約4mの範囲の中に大きく4群に集中し，所が分かれ，ほぼ円を描くような形で総数57点の遺物が出土している。分布状況は石器集中地点1と比較すると散逸的である。遺物の上下の分布状況を見てみると立川ローム層のⅦ層からⅨ層にかけて出土が見られるが，中心的な層位は立川ローム層のⅨ層である。

石材 石器総数の数は57点とそれほど多くはなく石器集中地点1の半分ほどの数である。しかし，石材は多岐にわたり出土点数の多い方から安山岩（37点-65.0%），頁岩（14点-25.0%），黒耀石（4点-7.0%），チャート（1点-1.5%），泥岩（1点-1.5%）の5種類に分類できる。

石器 本集中地点の器種構成は削器2点，石核2点，楔形石器2点，使用痕のある剥片（UF）1点，小礫1点及び剥片が49点である。本石器集中地点から検出された石器の実に2/3が安山岩であるが，集中地点1と比較すると多くの母岩に分類される。また多くは剥片・碎片であり石器として明確に捉えられるものはほとんど見られなかった。また，接合関係については安山岩の剥片3点が接合するのみであった。以下器種別にまとめて示す。

1は安山岩製の削器である。剥離面打面の厚みのある横長剥片を用いている，背面には礫原面を多く残す。右側縁に腹面からの打撃により連続する刃部を直線的に作っている。2はチャート製の使用痕を有する剥片である。剥離面打面を残し，側縁に平行な稜線を一本有する断面三角形の石刃であるが，先端部は欠損している。両側縁に細かな調整がおもに腹面側からの打撃により加えられている。3は安山岩製の削器である。背面に礫原面を残す厚みのある縦長剥片であるが，打面及び先端部側が欠損している。両側縁に腹面側からの打撃により鋸歯状を呈する粗い調整が加えられている。4は安山岩製の楔形石器である。縦長剥片であろうが主要剥離面及び打面はすでに失われている。一部側縁が欠損しているが階段状剥離の刃部が少なくとも平行して2対あると考える。一部にわずかであるが礫原面を残す。5は安山岩の剥片で



ある。縦長剥片であろうが、打面及び先端側を半分以上が失われている。6は安山岩の厚みのある縦長剥片である。打面は剥離面打面であるが打点は欠損し、先端側も半分近くが失われている。背面に礫原面を一部に残す。7は安山岩製の寸詰まりの横長剥片である。剥離面打面である。8は頁岩製の厚みのある縦長剥片である。剥離面打面である。原石は小礫と思われ所々に原面が残る。9は頁岩製の厚みのある横長剥片である。剥離面打面を有し、背面は礫原面である。本集中地点で唯一の接合資料(g)で剥片2点と接合する。10は安山岩製の縦長剥片である。打面及び打点は欠損している。11は頁岩製の厚みのある剥片である。打面及び打点は欠損している。12は安山岩製の寸詰まりの横長剥片である。剥離面打面である。背面の一部に礫原面を残す。13は頁岩製の厚みのある剥片である。礫原面を残し、楔理面での剥離があり、主要剥離面お呼び打面は不明である。接合はしないが9の剥片と同一母岩である。14は安山岩製の横長剥片である。打面は剥離面打面である。背面先端近くには礫原面を残す。15は安山岩製の縦長剥片である。打面及び打点は欠損している。背面左側には礫原面を残す。16は安山岩製の寸詰まりな横長剥片である。打面及び打点は失われている。17は安山岩製の楔形石器である。寸詰まりな厚い横長剥片を用いているが縦方向に約1/2ほど折れている。折れ面の一方の縁と平行する縁に階段状剥離の刃部が平行して1対見られる。一部に礫原面が残る。18は安山岩製のやや厚みのある剥片である。19は安山岩製の寸詰まりの横長剥片である。打面は点状打面である。20は頁岩製の横長剥片である。打面は剥離面打面である。21は安山岩製の石核である。打面を頻繁に転移しながら剥片を作ったと考えられる。一部に礫原面を残す。22は一部に礫原面を残す厚みのある剥片である。打面及び打点は失われている。23は安山岩製の石核である。礫原面を多く残しており、本来の大きさが大人の握り拳大であることがわかる。剥離作業は交互に打撃を繰り返して剥片を得ていたようである。ただし、今回の調査地点からは本石核に接合する又は同一個体の石器・剥片は検出されていない。このことから本石器はこの状態で素材として搬入されたものとも考えられる。

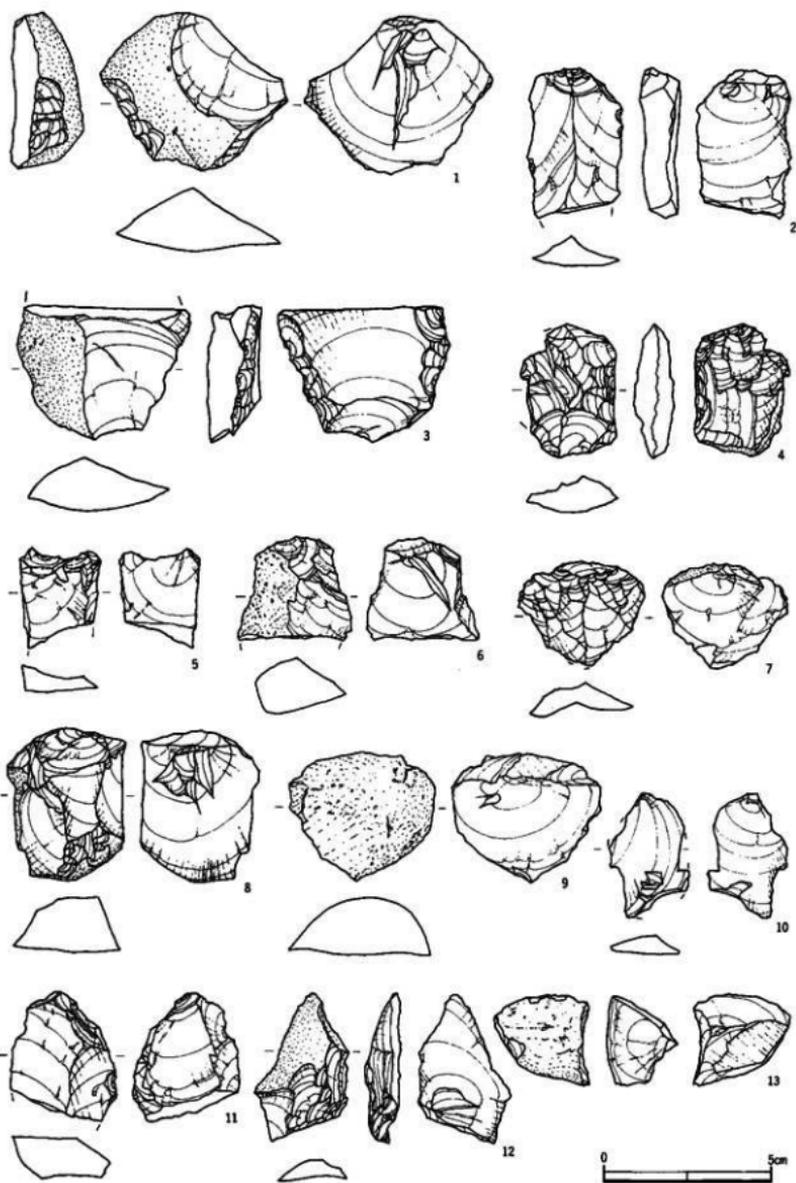
#### 石器集中地点3（第13・14図，第3表，図版2・5）

本石器集中地点は集中地点2の南東側へ8mほど離れたグリッド15C-38・39に散在して出土した。石器総数は5点である。うち1点是小礫片で、残る4点が石器である。層位的には立川ローム層のⅦ層に相当する。

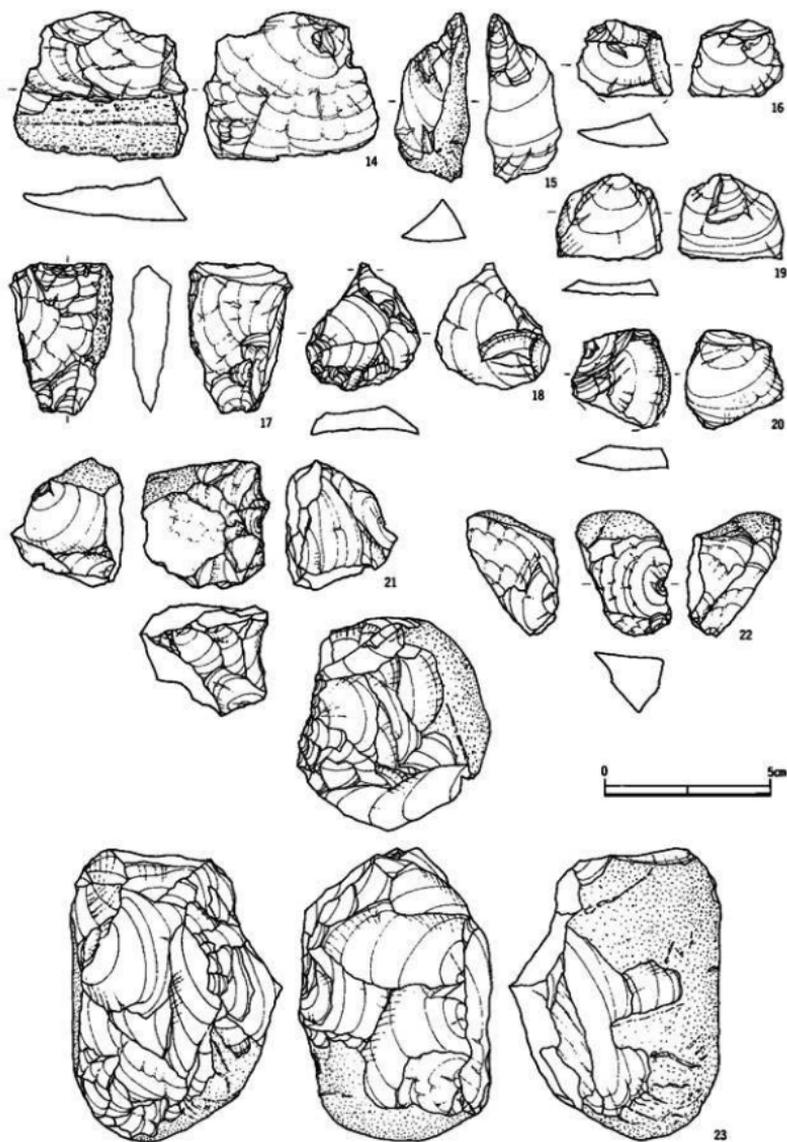
石材 頻岩の小礫片を除く4点はいずれも安山岩である。集中地点2で出土している安山岩に類似しているものもあり石器集中地点2と同一の石器群として捉えられる可能性は十分にある。

石器 礫片のほか石器4点すべてが剥片であり、製品は出土していない。以下に石器4点についてまとめる。

1は安山岩製のやや大きく厚めの縦長剥片である。打面は剥離面打面である。背面の一部と先端部付近に礫原面を残す。2は安山岩製の厚めの剥片である。打面及び打点は欠損しており礫原面が残る先端付近の断面三角形の剥片である。3は安山岩製の厚みのある縦長剥片である。打面及び先端部は欠損しており、背面には礫原面を残す。5は安山岩製の厚みのある縦長剥片である。打面及び先端部は欠損しており、背面には礫原面を残す。



第11图 石器集中地点2出土石器(1)



第12图 石器集中地点2出土石器(2)

第2表 石器集中地点2 出土石器観察表

No	出土位置	遺物番号	種類	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	図版番号	備考
1	14C-95	0001	剝片	安山岩	30.75	24.10	8.90	6.25	5	
2	-	0002	剝片	安山岩	30.75	18.30	18.09	18.09	6	
3	-	0003	剝片	安山岩	20.55	11.10	2.80	0.52		
4	-	0004	剝片	安山岩	15.30	8.40	2.70	0.31		
5	-	0005	剝片	安山岩	23.90	13.15	5.40	0.76		
6	-	0006	剝片	安山岩	9.20	12.00	2.85	0.25		
7	-	0007	UF	チャート	43.60	20.00	10.95	13.38	2	
8	-	0008	剝片	頁岩	46.35	36.10	18.80	31.6	8	
9	14C-96	0001	剝片	安山岩	30.50	39.55	16.10	12.59	7	
10	-	0002	剝片	安山岩	10.00	27.05	2.95	0.87		
11	-	0003	剝片	安山岩	25.30	19.40	7.10	3.22		
12	-	0004	石器	泥岩	39.75	54.00	17.45	35.76	3	
13	15C-03	0001	楔形石器	安山岩	38.40	29.30	11.40	12.38	4	
14	-	0002	剝片	安山岩	10.00	27.05	2.95	0.87		
15	-	0003	剝片	安山岩	25.30	19.40	7.10	3.22		小礫破片
16	15C-04	0001	剝片	頁岩	39.35	44.65	18.2	30.5	9	接合資料 g
17	-	0002	剝片	安山岩	38.80	31.85	11.65	17.06	11	
18	-	0003	剝片	安山岩	23.65	18.10	7.55	2.62		
19	-	0004	剝片	頁岩	15.00	16.05	6.70	1.09		
20	-	0005	剝片	安山岩	8.30	8.80	2.11	0.13		
21	-	0006	剝片	安山岩	36.90	23.25	6.65	3.98	10	
22	-	0007	剝片	頁岩	18.75	15.20	8.15	1.38		
23	-	0008	剝片	頁岩	10.20	16.55	3.25	0.6		
24	-	0009	剝片	頁岩	9.45	32.60	7.60	2.86		接合資料 g
25	-	0010	剝片	頁岩	28.85	28.75	21.35	15.08	13	
26	-	0011	剝片	安山岩	35.10	40.55	10.60	9.92	12	
27	-	0012	剝片	頁岩	30.05	20.60	6.95	3.53		接合資料 g
28	-	0013	剝片	頁岩	19.15	24.95	5.30	1.65		
29	-	0014	剝片	頁岩	9.20	19.30	2.55	0.64		
30	15C-05	0001	楔形石器	安山岩	45.90	32.30	13.10	18.09	17	
31	-	0002	剝片	頁岩	27.20	22.55	10.65	5.24		
32	-	0003	剝片	安山岩	51.45	23.25	12.25	10.74	15	
33	-	0004	剝片	安山岩	12.1	19.85	5.25	8.93		
34	15C-06	0001	剝片	頁岩	11.95	11.00	3.45	0.37		
35	-	0002	剝片	頁岩	16.25	22.75	6.50	1.29		
36	-	0003	剝片	安山岩	7.50	8.65	3.05	0.16		
37	-	0004	剝片	黒耀石	3.95	6.50	1.25	0.03		
38	-	0005	剝片	安山岩	23.9	28.70	10.2	6.95	16	
39	-	0006	剝片	安山岩	11.10	17.85	2.60	0.37		
40	-	0007	剝片	安山岩	44.25	55.25	14.00	29.46	14	
41	-	0008	剝片	黒耀石	11.60	25.70	4.30	0.76		
42	-	0009	剝片	黒耀石	19.55	14.85	6.60	1.28		
43	-	0010	剝片	安山岩	15.60	12.20	2.85	0.67		
44	-	0011	剝片	安山岩	9.30	11.35	2.55	0.21		
45	-	0012	剝片	黒耀石	4.25	9.90	2.40	0.06		

No	出土位置	遺物番号	種類	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	図版番号	備考
46	15C-13	0001	剥片	安山岩	18.3	13.95	4.40	0.98		
47	15C-15	0001	剥片	安山岩	26.30	31.70	5.15	4.36	19	
48	-	0003	剥片	安山岩	15.00	20.85	13.15	3.68		
49	15C-15	0004	石核	安山岩	88.70	62.30	61.45	406.35	23	
50	-	0005	刮器	安山岩	47.45	50.83	21.1	47.24	1	
51	-	0006	石核	安山岩	39.00	38.85	33.4	46.51	21	
52	-	0007	剥片	安山岩	42.50	26.80	23.90	24.57	22	
53	-	0009	剥片	安山岩	12.00	13.60	4.80	0.44		
54	-	0010	剥片	安山岩	34.95	37.10	10.70	13.27	18	
55	-	0011	剥片	安山岩	9.40	9.95	5.95	0.55		
56	-	0012	剥片	安山岩	20.05	14.05	3.40	0.88		
57	15C-25	0001	剥片	頁岩	30.05	29.55	6.95	6.32	20	

第3表 石器集地点3出土石器観察表

No	出土位置	遺物番号	種類	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	図版番号	備考
1	15C-38	0001	剥片	凝岩	48.55	15.45	12.65	12.61		
2	-	0002	剥片	安山岩	32.70	36.90	17.95	23.15	3	
3	-	0003	剥片	安山岩	38.00	33.50	16.00	19.57	2	
4	15C-39	0001	剥片	安山岩	67.20	64.20	23.50	83.26	1	
5	-	0002	剥片	安山岩	53.80	31.00	17.05	30.26	4	

第4表 単独出土石器観察表

No	出土位置	遺物番号	種類	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	図版番号	備考
1	15B-89	0001	剥片	黒耀石	21.30	27.80	11.10	3.39	2	
2	11F-58	0001	石刃	瑪瑙	46.85	20.00	4.70	4.57	1	

単独出土石器 (第15・16図, 第4表, 図版5)

15B-89区出土石器

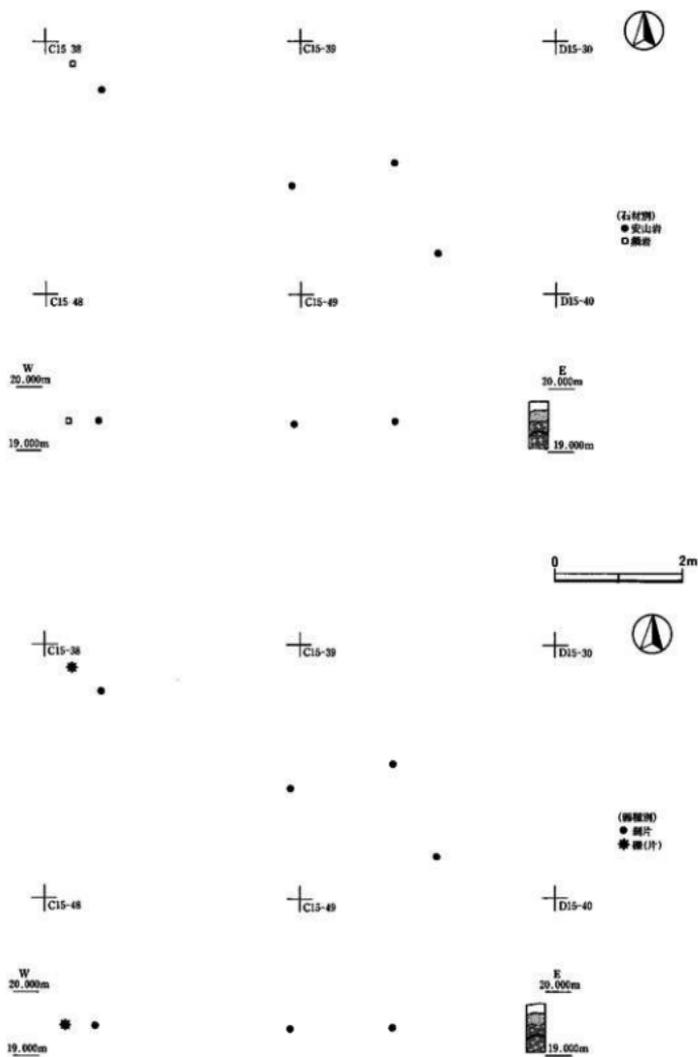
黒耀石製の剥片である。打面及び打点は欠損し先端部の一部のみが残っている。出土層位は立川ローム層のV層である。

11F-58区出土石器

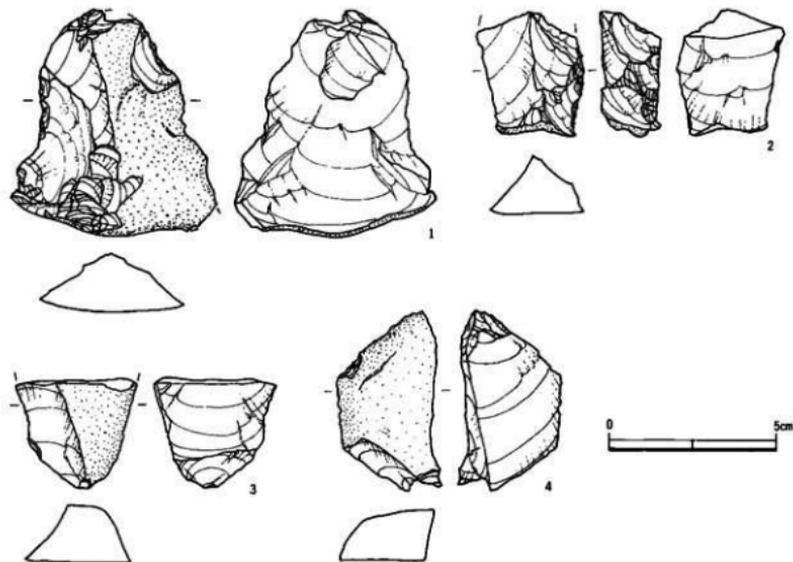
瑪瑙製の石刃である。打面は失われている。左側縁に微細な調整が連続して見られる。これが使用痕なのか二次加工なのかは判断はつかない。出土層位は立川ローム層のVII~IX層である。

接合資料 (第8・17図, 第5表, 図版6・7)

本遺跡で検出された集中地点は1~3の3か所である。そのうちの石器集中地点1からは合計で6個, 石器集中地点2からは1個の合わせて7個の接合資料が確認された。石器集中地点1では, 頁岩の接合資料を除く5個は全て同一母岩の黒耀石であるが, 接合した個体同士での接合は見られなかった。また, 原石については, その他の破片や碎片などの数などからも分かるが, かなりの大きさであったと考えられる。



第13図 石器集中地点3 出土状況（石材・器種別）



第14図 石器集中地点3出土石器

以下に資料の概要を述べることにする。

#### 接合資料 a

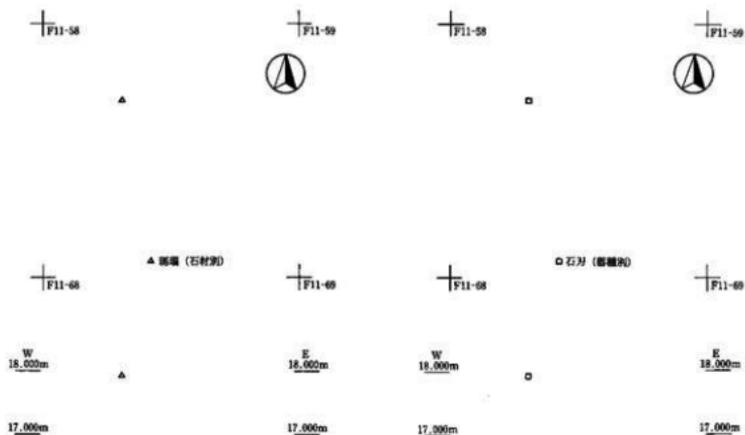
本資料はチョコレート色を呈する頁岩のナイフ形石器と剥片の合わせて2点の接合である。剥片は打点側半分ほどを失っている。ナイフ形石器の方は剥片剥離時の打撃の力が上手に抜けているが、剥片の方は十分には抜けきらずやや寸詰まりの状況にある。従ってナイフ形石器の基部調整を行っていたときに、つまり接合する剥片が母岩から剥離されたのち剥離されたものであろうと考える。

#### 接合資料 b

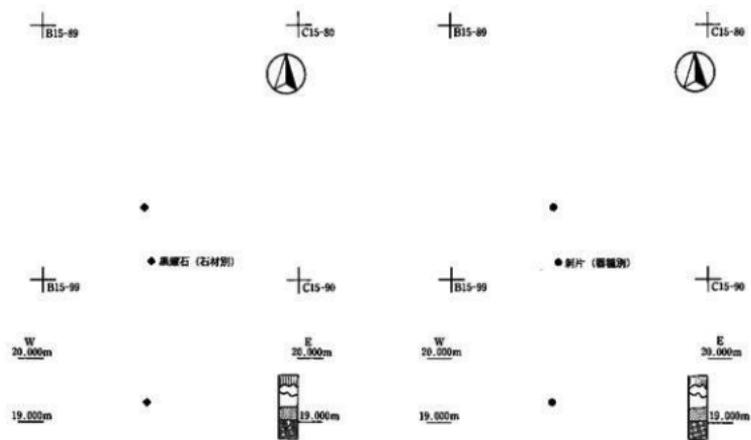
本資料は黒耀石の剥片12点からなる接合資料である。原石から剥離されたやや大きめの剥片を母岩としている。石の接合はなく碎片や厚みのある剥片が多く、製品との接合はない。

#### 接合資料 c

本資料は黒耀石の剥片13点からなる接合資料である。原石から剥離されたやや大きめの剥片を母岩としている。b同様に打面調整と思われる碎片が多く、製品との接合はない。

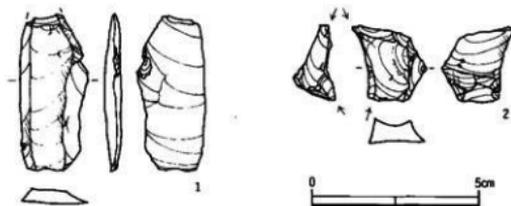


石器单独出土 1 (石材別・器種別)



石器单独出土 2 (石材別・器種別)

第15図 石器单独出土状況 (石材・器種別)



第16図 石器単独出土石器

接合資料 d

本資料は黒耀石の剥片6点からなる接合資料である。原石から剥離された剥片を母岩としている。b・cと同様に打面調整と思われる碎片や厚みのある剥片が多く、製品との接合はない。

接合資料 e

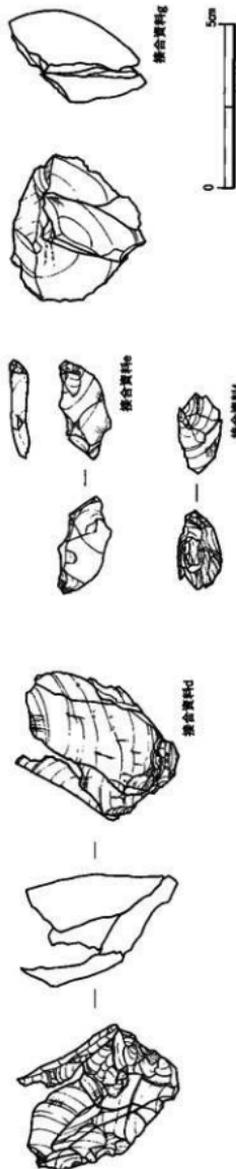
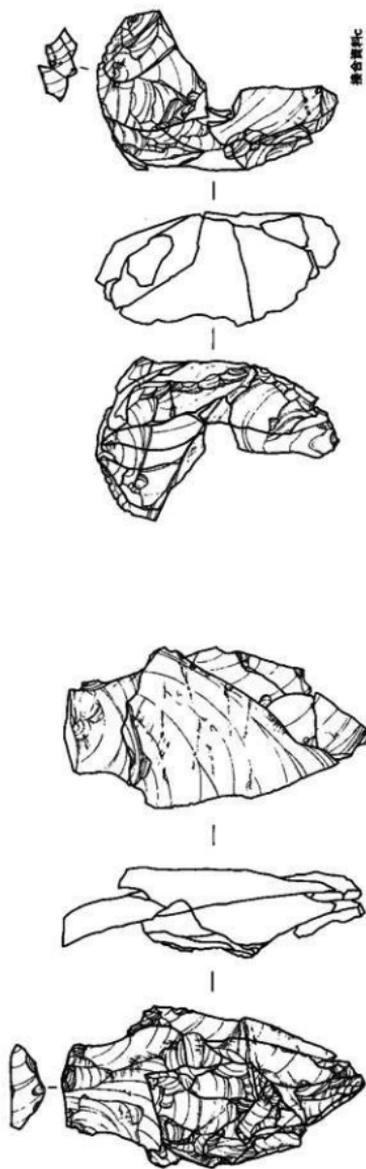
本資料は黒耀石の剥片2点からなる接合資料である。いずれの剥片も小さく、剥片剥離の作業工程途中できる碎片同士の接合である。

接合資料 f

本資料は黒耀石の剥片3点からなる接合資料である。いずれの剥片も小さく、剥片剥離の作業工程途中できる碎片同士の接合である。

接合資料 g

本資料は安山岩の剥片3点からなる接合資料である。稜原面を持つやや大きめの剥片に連続して剥離された剥片2点の接合である。本資料が石器集中地点2からの出土である。



第17図 接合資料 (b~g)

第5表 石器接合表

接合グループ	出土位置	遺物番号	石 材
--------	------	------	-----

接合資料 a

a-01	13E-52	0053	頁岩
a-02	13E-52	0085	頁岩

接合資料 b

b-01	13E-51	0001	黒耀石
b-02	13E-51	0002	黒耀石
b-03	13E-52	0020	黒耀石
b-04	13E-52	0050	黒耀石
b-05	13E-52	0060	黒耀石
b-06	13E-52	0063	黒耀石
b-07	13E-52	0078	黒耀石
b-08	13E-52	0081	黒耀石
b-09	13E-52	0110	黒耀石
b-10	13E-53	0001	黒耀石
b-11	13E-62	0003	黒耀石
b-12	13E-62	0008	黒耀石

接合資料 c

c-01	13E-52	0007	黒耀石
c-02	13E-52	0010	黒耀石
c-03	13E-52	0011	黒耀石
c-04	13E-52	0014	黒耀石
c-05	13E-52	0023	黒耀石
c-06	13E-52	0026	黒耀石
c-07	13E-52	0027	黒耀石

接合グループ	出土位置	遺物番号	石 材
--------	------	------	-----

c-08	13E-52	0033	黒耀石
c-09	13E-52	0058	黒耀石
c-10	13E-52	0088	黒耀石
c-11	13E-62	0002	黒耀石
c-12	13E-62	0006	黒耀石
c-13	13E-62	0006	黒耀石

接合資料 d

d-01	13E-52	0015	黒耀石
d-02	13E-52	0028	黒耀石
d-03	13E-52	0043	黒耀石
d-04	13E-52	0049	黒耀石
d-05	13E-52	0092	黒耀石
d-06	13E-62	0023	黒耀石

接合資料 e

e-01	13E-52	0068	黒耀石
e-02	13E-61	0002	黒耀石

接合資料 f

f-01	13E-52	0024	黒耀石
f-02	13E-52	0035	黒耀石
f-03	13E-52	0037	黒耀石

接合資料 g

g-01	15C-04	0001	安山岩
g-02	15C-04	0009	安山岩
g-03	15C-04	0012	安山岩

## 第2節 縄文時代

### 1 概要

中野木台遺跡群の東側に位置する新山東遺跡は、縄文時代中期及び後期の遺跡として古くから知られ、過去に行われた本遺跡及び周辺遺跡の発掘調査からは当該期の遺構・遺物が多数検出・出土している。また今回調査を行った調査区に隣り合う西側の畑などでは地表面に同時代の遺物が多く見られた。

今回発掘調査を実施した地域は新山東遺跡の東側にあたる地域で南西側は規模の小さな谷津と接する。ほぼ半年にわたる発掘調査の成果は縄文早期の炉穴12基・陥穴9基・土坑1基、中期後葉の竪穴住居跡16軒・土坑53基・ピット群など多数の遺構・遺物が検出・出土した。ただし、縄文早期の遺構は偏って一箇所にとまるとともに検出され数も相対的に僅かであり、遺構のほとんどは縄文中期後半の時期、後期に近い土器型式で言えば加曽利E式期後半の加曽利EⅢ・Ⅳ式期にあたり、中期末から後期初頭に掛けて比較的短期間の時代に集落が営まれたと考えられる。以下では今回の発掘調査で検出・出土した遺構・遺物についての概要を述べることにする。

### 2 遺構・遺物

#### (1) 早期の遺構・遺物

##### 1) 炉 穴

南側の調査区(A区)の中央付近から南端にかけて北側の5基と約60mほど南側の2基の大きく2つの炉穴群合計12基が接近して検出された。いずれも本遺跡が立地する台地が南西側の小規模な谷に向かって緩やかに傾斜し始めるちょうど台地の肩口付近にまとまって検出されたことになる。

#### SK-001 (第21・22図、図版13)

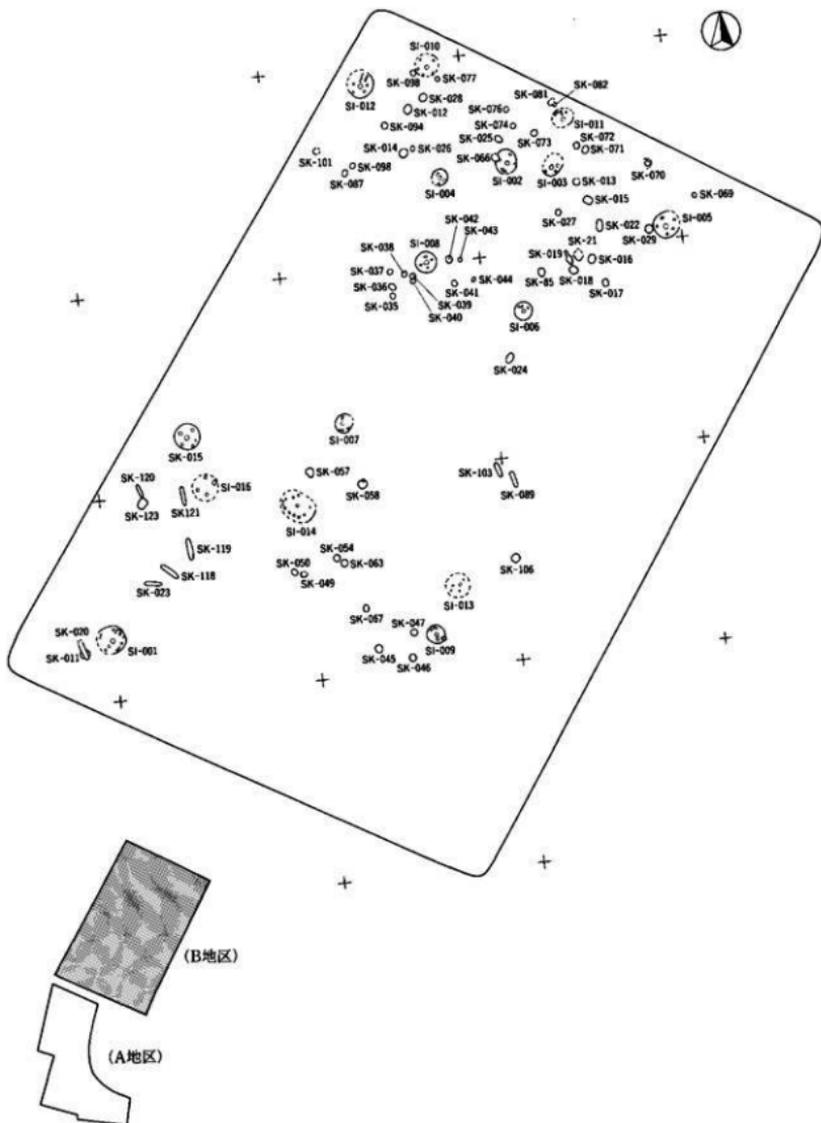
調査区南端近く、15C-91・92区に位置する。規模でも今回検出された炉穴の中で一番に大きい。直径3.5mほどの不整形の中央付近を軸としてほぼ放射状に合計5基の炉穴がそれぞれ炉床を残しながら重複して検出されている。以下概要説明をしやすいために便宜的にこれら5基の炉穴を炉床を中心に炉A、炉B、炉C、炉D、炉Eと呼称して進めることにする。

炉A：北東隅に炉床を持つ。確認面での平面形状は楕円形を呈し、長さは長軸上で2.5m～3m、幅は1mほどではないかと考えられる。確認面から炉床部までの掘り込みは0.8mを測る。炉床付近と壁と思われるところから土器がまとまって出土している。

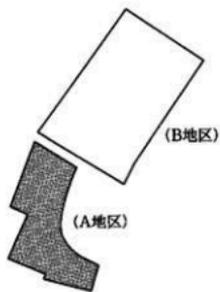
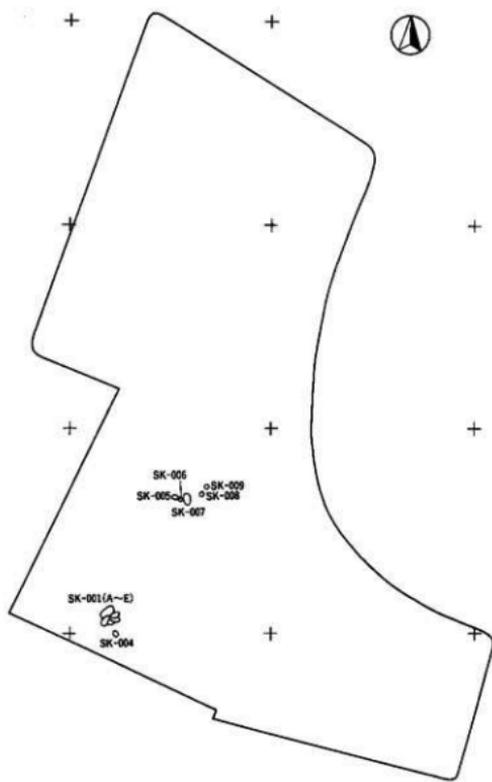
炉B：南東隅に炉床を持つ。平面形状は楕円形を呈し、長さは長軸上で2.5m～3m、幅は1mほどではないかと考えられる。確認面からの炉床部までの掘り込みは0.6mを測る。炉床付近を中心に土器が少量出土している。

炉C：南端に炉床を持つ。炉床付近のみの検出で規模等の詳細は不明だが、平面形状は径1.5m前後の円形に近いものと考えられる。確認面から炉床部までの掘り込みは0.5mを測る。本炉穴の覆土と思われる位置から若干の土器が出土している。

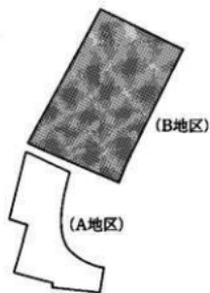
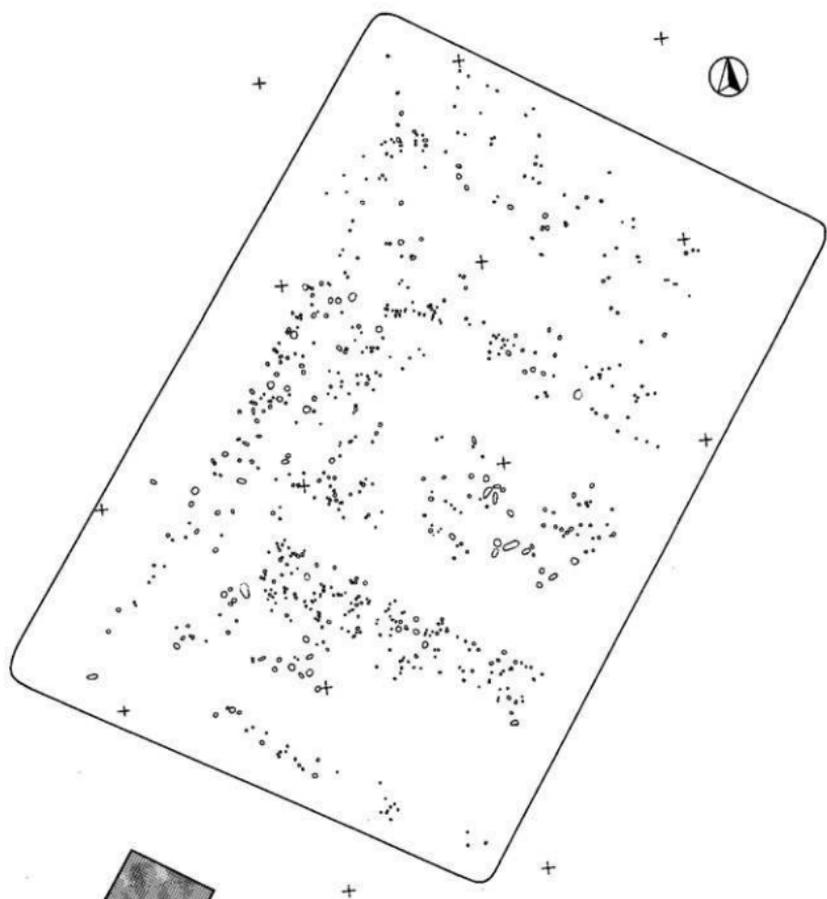
炉D：南西隅に炉床を持つ。平面形状は楕円形を呈し、長さは長軸上で3.5m、幅は1.2mほどではないかと考える。確認面からの炉床部までの掘り込みは0.7mを測る。炉床を中心に土器がややまとまって出土している。



第18図 縄文時代遺構配置図 (B地区)  
(竪穴住居跡・土坑・陥穴)



第19図 縄文時代遺構配置図 (A地区)  
(炉穴・土坑)



第20図 縄文時代遺構配置図 (B地区)  
(ピット群)

炉E：北端に炉床を持つ。平面形状は楕円形を呈し、長さは長軸上で2.5m～3m、幅は最大で1.5mほどではないかと考える。本炉穴群の中でも最大級である。確認面から炉床部までの掘り込みは0.6mを測る。本炉穴の覆土と思われる位置から若干の土器が出土している。

これら5基の炉穴の新旧関係であるが、土層断面の観察や遺構の掘り込み、遺物の分布状況・時期などから考えると炉Cが最も古く、続いて炉E→炉D→炉B→炉Aの順に使用されていったと考えられる。

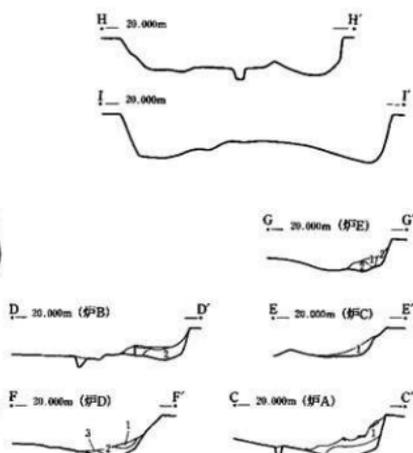
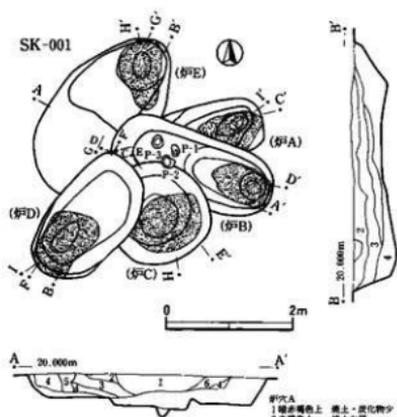
遺物は早期末の土器胎土に繊維質を含む条痕文系土器を中心に出土している。状況を見たとおむね炉A・炉Dの2基の遺構と考えられる範囲から最も多くとまって、続いて炉Bが多く、炉E・炉Cは数も少なく散漫的な出土をしている。1は大型の深鉢形土器である。底部からほぼ直線的に開く、頸部と胴部中ほどに稜を2段持つ。口唇部は平坦で内側直下には棒様工具の先端による連続の刺突が施されている。外面は口唇部直下から下段の稜まで縄文が地文で施文され、その上からへら様工具による浅い沈線が3本一単位となって縦方向に一定間隔をおいて加えられている。下位の稜以下底部までは貝殻の腹縁を用いた条痕が施されている。2は深鉢形土器の口縁部付近である。底部から直線的に開口する。口唇部は1のように平坦ではなく内側から外に向かって薄くなり最上部では線状になる。内外面ともに貝殻の腹縁による条痕を斜め方向に施している。3は大型の深鉢形土器の口縁部付近である。口唇部は狭いが平坦で、へら様工具による刻みが連続して施されている。頸部付近に稜を持つが直線的に開口する。器面内外は貝殻腹縁による横方向の条痕が一面に施されている。4は深鉢形土器の口縁部である。口唇部は1のように平坦ではなく内側から外に向かって薄くなり最上部では線状になる。内外面ともに貝殻の腹縁による条痕を横方向に施している。ただし、内側は外側と比べるとやや雑ではある。5は4と同一個体と考えられる。6は胴部である。内外面ともに貝殻の腹縁による条痕を斜め方向に施している。7は深鉢形土器の口縁部である。ほぼ垂直方向に直線的に開口する。頸部下部に稜を持つと考えられる。口唇部は平坦で内側直下には棒様工具の先端による連続の刺突が施されている。外面は口唇部直下から稜まで縄文が地文で施文され、その上からへら様工具による浅い沈線が縦方向及び斜め方向に加えられている。1と同様な作りであるが同一個体ではないようである。8は内外面ともに貝殻の腹縁による条痕を斜め方向に施している。9は口縁部である。胎土に繊維質は含まない。へら様工具による察痕が斜め方向に施されている。10は口縁部である。胎土に繊維質は含まない。無文である。11は口縁部である。胎土に繊維質は含まない。単軸絡條体の撚り糸が縦方向に施されている。12は胎土に繊維質を含む土器の平底を呈する底部である。底部を含め内外面ともに貝殻の腹縁による条痕を斜め方向に施している。ただし、内側は外側と比べるとやや雑ではある。

#### SK-002 (第22図)

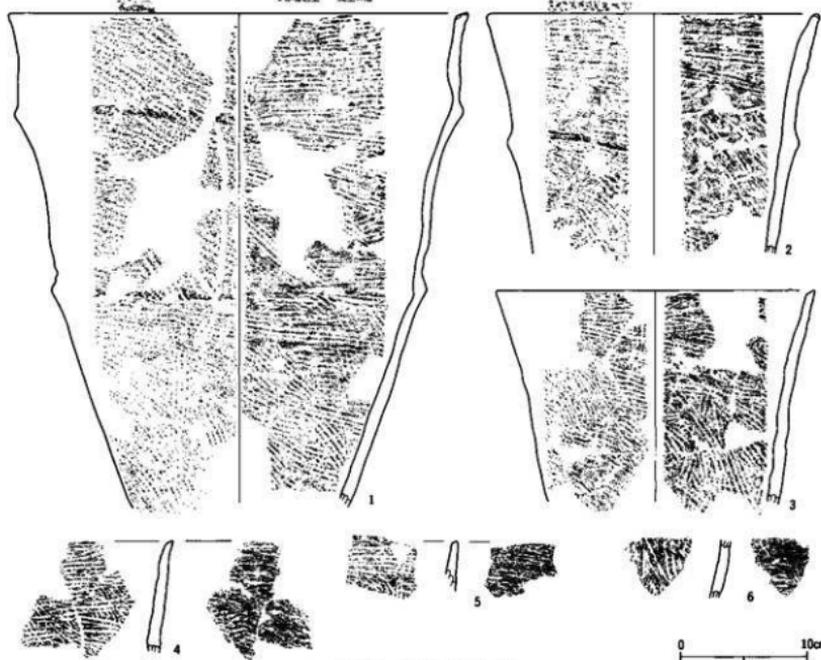
15C-92区、炉穴SK-001の南東側に位置する。2基の炉穴が重複する。上層の攪乱が激しく炉床付近しか残ってない。平面形状は東西方向に長軸2.4mの不整形な楕円形を呈する。掘り込みは最大で0.2mを測る。便宜的に炉A、炉Bと呼称する。

炉A：西側の炉穴である。北西-南東方向に長軸を持ち、長さ1.3m、幅は1mほどの楕円形を呈する。確認面からの掘り込みは浅く0.2mである。

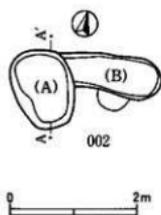
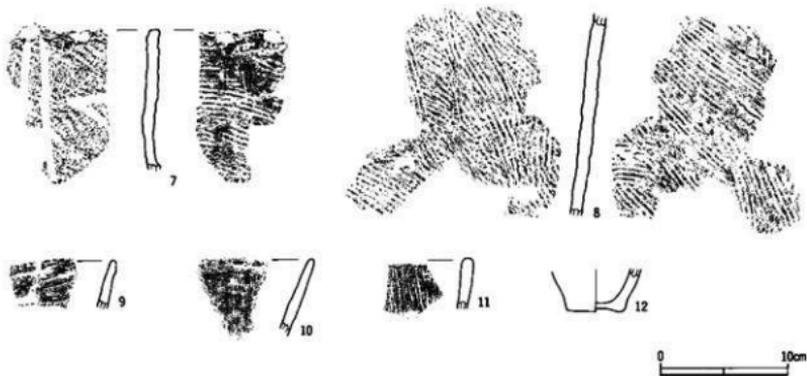
炉B：東側の炉穴である。ほぼ東西方向に長軸を持ち、長さ1.5m～2m、幅0.6mほどの長楕円形を呈する。確認面からの深さは0.2mと炉Aとほぼ同じである。



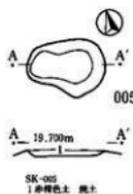
- 伊穴A  
1 赤褐色土 粘土・炭化物少  
2 赤褐色土 粘土の層  
伊穴B  
1 赤褐色土 粘土の層  
2 赤褐色土 粘土の層  
伊穴C  
1 赤褐色土 粘土の層  
伊穴D  
1 赤褐色土 粘土・炭化物少  
2 赤褐色土 粘土の層  
3 赤褐色土 粘土の層  
伊穴E  
1 暗赤褐色土 粘土・炭化物少  
2 赤褐色土 粘土の層
- 伊穴  
SK-001  
1 赤褐色土 ローム質・粘土多  
2 赤褐色土 ローム質少  
3 赤褐色土 ローム質  
4 赤褐色土  
5 暗褐色土 ローム質・粘土少  
6 赤褐色土  
7 赤褐色土 粘土多



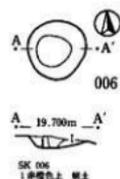
第21図 001号伊穴(1)



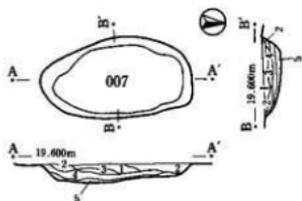
SK-002  
 1 黑褐色土  
 2 黄褐色土 粘土较少  
 3 黄褐色土



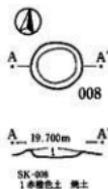
SK-005  
 1 赤褐色土 粘土



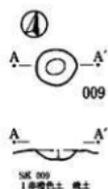
SK-006  
 1 赤褐色土 粘土



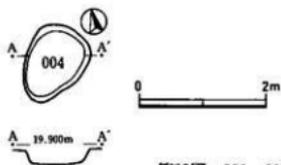
SK-007  
 1 黑褐色土 ○—△ 粘·黄土较少  
 2 黄赤褐色土 粘土胶合  
 3 赤褐色土 ○—△ 粘多  
 4 赤褐色土 粘土多  
 5 褐色土 ○—△ 粘·炭化粘少



SK-008  
 1 赤褐色土 粘土



SK-009  
 1 赤褐色土 粘土



第22图 001·002·005·006·007·008·009号炉穴、004号土坑

掘り込みが浅く覆土の土層断面の状況も悪く、さらに遺物の出土もなく両者の新旧関係等詳細は不明である。遺物の出土は極めて少ない。1は口縁部である。胎土に繊維質は含まない。単軸絡條体の縄文が縦方向に施されている。

#### SK-005 (第22図, 図版13)

15C-35区西, 炉穴SK-001・002の北約60mほど北に位置する。平面形状はほぼ東西方向に長軸を持つ1.2m×0.8m不整楕円形の炉穴である。上部の大半は削られ検出範囲すべて炉床と考えられるが詳細は不明である。遺物の出土はなかった。

#### SK-006 (第22図, 図版13)

15C-35区中ほど, 炉穴SK-005の東側に位置する。平面形状は直径が0.9mのほぼ円形を呈する。上部の大半は削られ検出範囲すべて炉床と考えられるが詳細は不明である。遺物の出土はなかった。

#### SK-007 (第22図, 図版13)

15C-35区東, 炉穴SK-006の東側に位置する。平面形状は南北に長軸を持つ長径2.4m, 短径1.3mの楕円形を呈する。上部の大半は削られ検出範囲すべて炉床と考えられ、一面に焼土が検出されているが詳細は不明である。遺物の出土はなかった。

#### SK-008 (第22図, 図版13)

15C-36区北, 炉穴SK-007の東にやや離れて位置する。平面形状は直径が0.8mのほぼ円形を呈する。上部の大半は削られ検出範囲すべて炉床と考えられるが詳細は不明である。遺物の出土はなかった。

#### SK-009 (第22図)

15C-26区東, 炉穴SK-008の北東に位置する。平面形状は直径が0.6mのほぼ円形を呈する。上部の大半は削られ検出範囲すべて炉床と考えられるが詳細は不明である。遺物の出土はなかった。

## 2) 陥 穴

北側の調査区に散在して9基検出された。いずれも確認面では長楕円形の平面形を呈し、掘り込みは一般的に深い。長軸方向はおおむね南-北方向のものが多く8基を数え、東-西方向のものは1基であった。また、これらの陥穴は地面への掘り込みが深く、短径での遺構断面形状が開口部(確認面)では広く、底部に向かってゆくほど狭くなりじょうご状を示し、ちょうどアルファベットの「T」字形を示す土坑である。いわゆるTピットと呼ばれる一群である。

#### SK-019 (第23図, 図版13)

11F-04区に位置する。長軸を北西-南東方向に持ち平面形状は長径3.2m, 短径0.6mの長楕円形を呈する。確認面からの深さは最大で0.7mを測る。北側でピットと重複するが、土層断面から見ると本陥穴の方が古い。遺物の出土はなかった。

SK-020 (第23図, 図版13)

12C-78区に位置する。北端部で一部調査不可能な箇所があったり、南側で土坑SK-011と重複する。また、後世の攪乱を多く受け本来の形状を知り得ないが長軸を北西-南東方向に持つ長径およそ4m、短径1mほどの長楕円形の平面形状を呈すると考えられる。短軸の断面形状はじょうご状を呈し、確認面からの深さは最大で1.4mを測り深い。遺物の出土はなかった。

SK-023 (第23図, 図版13)

12D-42区に位置する。長軸をほぼ東-西方向に持ち平面形状は長径3.4m、短径0.6mの長楕円形を呈する。短軸の断面形状はじょうご状を呈し、確認面からの深さは最大で1.1mを測る。遺物の出土はなかった。

SK-089 (第23図, 図版13)

12F-10区, 陥穴SK-103の南東に位置する。長軸をほぼ南-北方向に持ち平面形状は長径3m、短径0.6mの長楕円形を呈する。短軸の断面形状はじょうご状を呈し、確認面からの深さは最大で0.8mを測る。遺物の出土はなかった。

SK-103 (第23図, 図版13)

12E-09区, 陥穴SK-089の北西に位置する。長軸をほぼ南北方向に持ち平面形状は長径2.9m、短径0.7mの長楕円形を呈する。短軸の断面形状はじょうご状を呈し、確認面からの深さは最大で0.9mを測る。遺物の出土はなかった。

SK-118 (第23図, 図版13)

12D-32区, 陥穴SK-023の北東に位置する。長軸を北西-南東方向に持ち平面形状は長径4.3m、短径0.7mの長楕円形を呈する。短軸の断面形状はじょうご状を呈し、確認面からの深さは最大で1.1mを測る。遺物の出土はなかった。

SK-119 (第23図, 図版14)

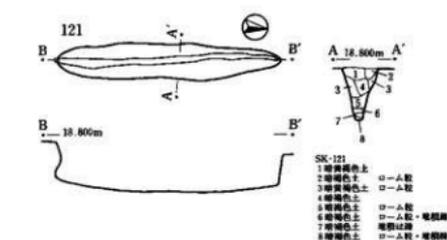
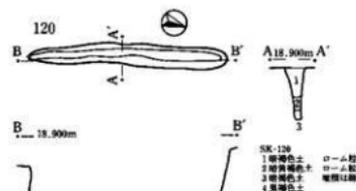
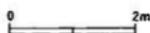
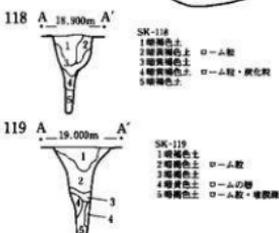
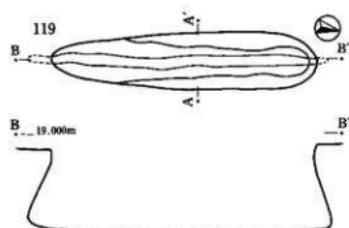
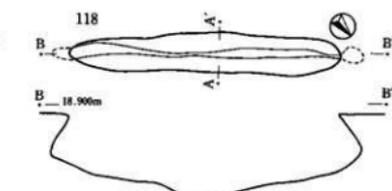
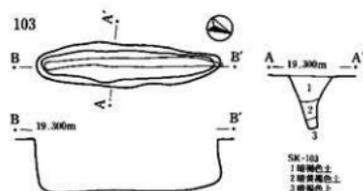
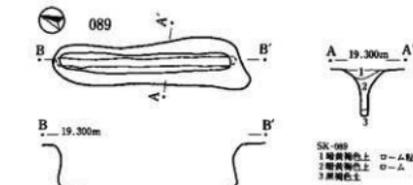
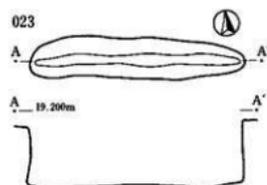
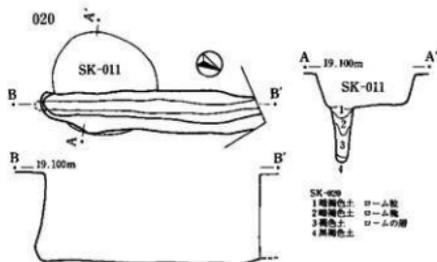
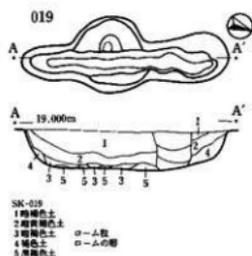
12D-24区, 陥穴SK-118の北東側やや離れて位置する。長軸をほぼ南-北方向に持ち平面形状は長径4.3m、短径1mの長楕円形を呈する。短軸の断面形状はじょうご状を呈し、確認面からの深さは最大で1.5mを測る。遺物の出土はなかった。

SK-120 (第23図, 図版14)

11D-91区に位置する。長軸をほぼ南-北方向に持ち平面形状は長径3.2m、短径0.4mの長楕円形を呈する。短軸の断面形状はじょうご状を呈し、確認面からの深さは最大で1.2mを測る。遺物の出土はなかった。

SK-121 (第23図, 図版14)

12D-04区, 陥穴SK-119の北やや離れて位置する。長軸をほぼ南-北方向に持ち平面形状は長径3.7m、短径0.6mの長楕円形を呈する。短軸の断面形状はじょうご状を呈し、確認面からの深さは最大で0.8mを



第23図 019・020・023・089・103・118・119・120・121号陥穴

測る。遺物は破片のみだが少量の出土がある。

### 3) 土 坑

南側調査区（B区）から検出された南端近くの炉穴群の東側に隣接して1基が検出された。

#### SK-004号（第22図）

長径1.3m、短径0.9mの卵形の平面形状を呈する土坑である。深さは確認面から0.3mを測り比較的浅い。遺物は磨石が1点出土したのみである。時代の特定は難しいが周辺の遺構と位置の関係などから縄文時代早期の所産と考えてよさそうである。

#### （2）中期の遺構・遺物

今回の発掘調査で本遺跡から最も多く検出された遺構・遺物群である。遺構検出面である立川ルーム層のソフトルーム面より深く旧団地建設工事での削平や掘削が行われており、検出された竪穴住居跡や土坑などの遺構はその影響を受けているものが多く、規模・形状等明確に把握できないものもある。中には遺構としての判断ができないものも数多くあった。このように竪穴住居跡など掘り込みの浅い遺構は土坑など掘り込みが深いものと比べると削平や攪乱の影響を受けやすいため確認するのがより難しく、実際としてはもう少し多くの竪穴住居跡が存在したものと考えられる。

以下には、掘り込みがしっかりしているもの、又は炉の存在や柱穴がはっきり遺構であると判断できるもの、加えて当該期の遺物を伴うものなど、竪穴住居跡や土坑として把握できたものについて述べることにする。

#### 1) 竪穴住居跡

総計16軒の竪穴住居跡が確認された。すべて平坦な台地が広く続く北側の調査区（B区）での検出であった。中には後世の攪乱により遺構の本来の形状を止めていないものも多く見られた。したがって竪穴住居跡の施設や規模についても明確には把握できなかった遺構も多い。

遺物について見ると、遺構同様後世攪乱等の影響からかはっきり遺構に伴う遺物の出土も全体的に少なく完形品又はそれに近い土器はほとんどない、総体的に土器破片ばかりが目立った。そうした中、検出された数の半数近い7軒の竪穴住居跡からはその規模の違いがあるものの貝層を伴っているものがあつた。これらの貝層も後世の攪乱等の影響を受け、破壊された当時本来の形状を止めていないものが多くあつた。

#### SI-001（第24・25図、図版8・22・24）

南西側が攪乱により欠損しているものの、平面形状は直径5.6mのほぼ円形を呈すると考えられる。確認面からの掘り込みは0.2mと浅く、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は硬くしまっている。炉は地床炉で、住居のほぼ中央に作られている。主柱穴は壁際近くに深さ0.7m以上に掘られている5本と考えられる。周溝は深さが0.1mと浅い溝が北東壁に沿って4mほど検出されている。また、この周溝に接して北東壁際には平行する2対の柱穴をもつ幅が1.1mほどの浅い窪みが検出されている。これは柱穴のあり方や位置的關係から本住居の出入り口と考えられる。遺物の出土は住居跡としてみればそれほど多くはない。多くが破

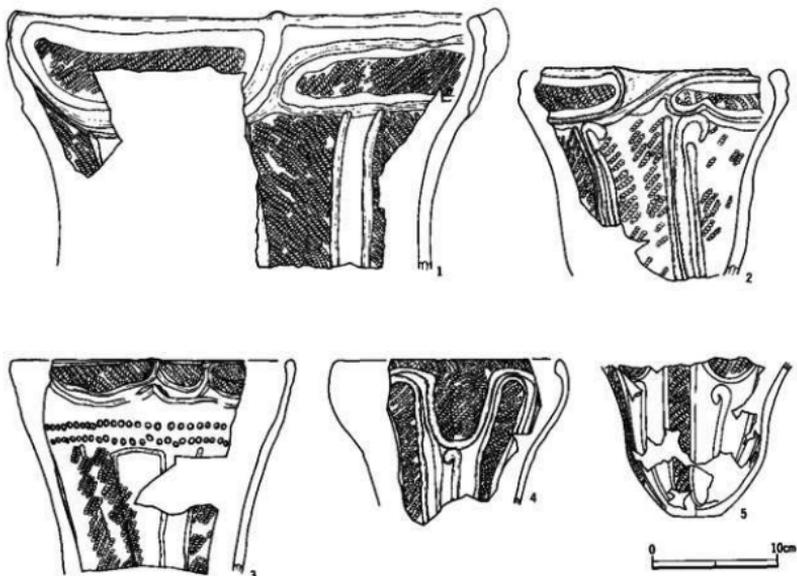
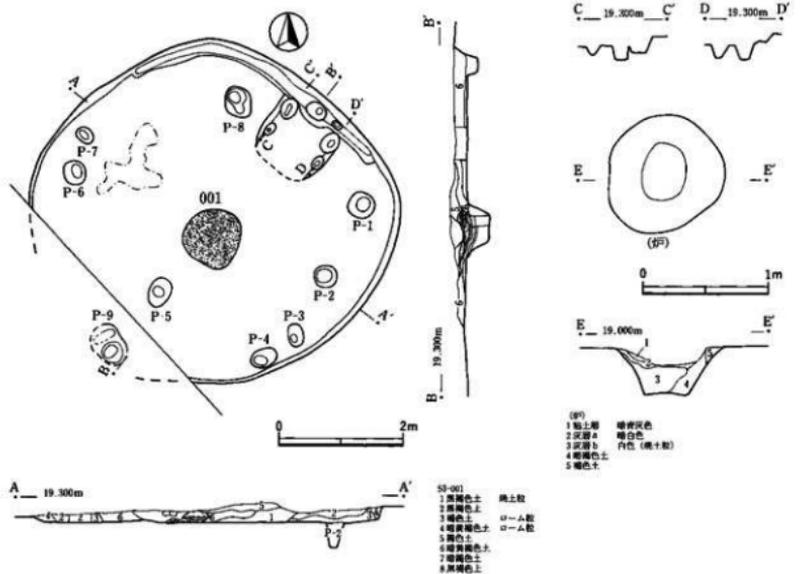
片であり、復元・接合して本来の形状が分かるものは少ない。1は大形の深鉢形土器の上半部である。頸部から緩やかに内湾しながら開口する。口縁部は粘土紐を貼り付けた隆帯と太い沈線により楕円状に区画されている。区画の単位は四単位であると考えられる。そのうち向かい合う2か所については口唇部にわずかであるが突起状に飛び出る。区画の内側は縄文のみが施文されている。胴部は縄文を施文した後平行する太く浅い沈線に挟まれた幅のある磨消帯が直線的に垂下する。2は深鉢形土器の上半部である。器形はほぼ1と同様な傾向を示す。口縁部は粘土紐を貼り付け区画されている。単位はおそらく1と同様に四単位であると考えられる。区画の内側は縄文のみが施文されている。胴部は縄文を施文した後3本一単位の沈線が直線的に垂下している。そのうち真ん中の一本は口縁部付近で隣接する沈線の上側を覆うように蕨手様になる。3は深鉢形土器である。頸部からわずかに内湾するもののほぼ直線的に開口する。口縁部は一本の沈線により楕円形状に区画され内側は縄文のみが施文されている。また区画文の下側には区画線に沿うように沈線が横走する。頸部は無文帯を作り棒様工具の先端を用い円形の刺突を口縁部に平行して二列施文している。胴部は無文の上に沈線を縦方向に走らせ、その上から縄文を施文している。しかし縄文の施文範囲や位置には統一性が無く、また沈線も何単位でどのような意匠を持って施文しているか残存するこれだけの破片では不明である。4及び5は同一個体であるが接合しなかったため別々の部位として実測を行った。器形は胴部がやや膨らみながら広がり、口縁付近で内湾する。4は小型の深鉢形土器である。口縁部はキャリバー状に緩やかな湾曲を示し、口唇部はやや肥厚し内側に有段となる。器面外側は全体に縄文を施文し、その上から沈線による波形式を口縁部に描いている、その波頂部に接するようにして以下胴部にかけて沈線による「冂」状の区画を作りその間は縄文を残す。また、波形式の波底部に接する胴部以下は磨消帯とし、上端に蕨手状を持つ太く浅い沈線を垂下させている。5は小型の深鉢形土器の下半部である。文様は4の胴部以下の文様構成・方法と全く同じである。器高は19cmほどであろう。6～36は土器破片の拓影図である。6～14は口縁部の破片の拓影図である。6～8は口唇部まで縄文が施文されているものである。ともに口縁部又は直下以下に太く浅い沈線で文様を加えている。9～12は口縁部に無文帯を有する土器であり、以下には縄文が施文されている。無文帯下部には縄文と区画をするように沈線が一条横走する。15～35までは胴部の破片である。15～30は器面に縄文を施文した後磨消又は沈線で文様を描いている。31～35は器面を櫛歯様工具による条線を施文している。36～38は底部である。36は大型の37・38は小型の深鉢形土器の底部である。

また、本住居が破壊されたのちまだ完全に埋まらず凹みが残っている時期に、住居中央付近にはハマグリ、オキアサリを主体とする貝殻が小規模であるが投棄され堆積していた。厚さは最大で0.4mほどになる。この貝の堆積は途中で薄い灰層を挟みながら堆積し肉眼観察では6層に分割される。

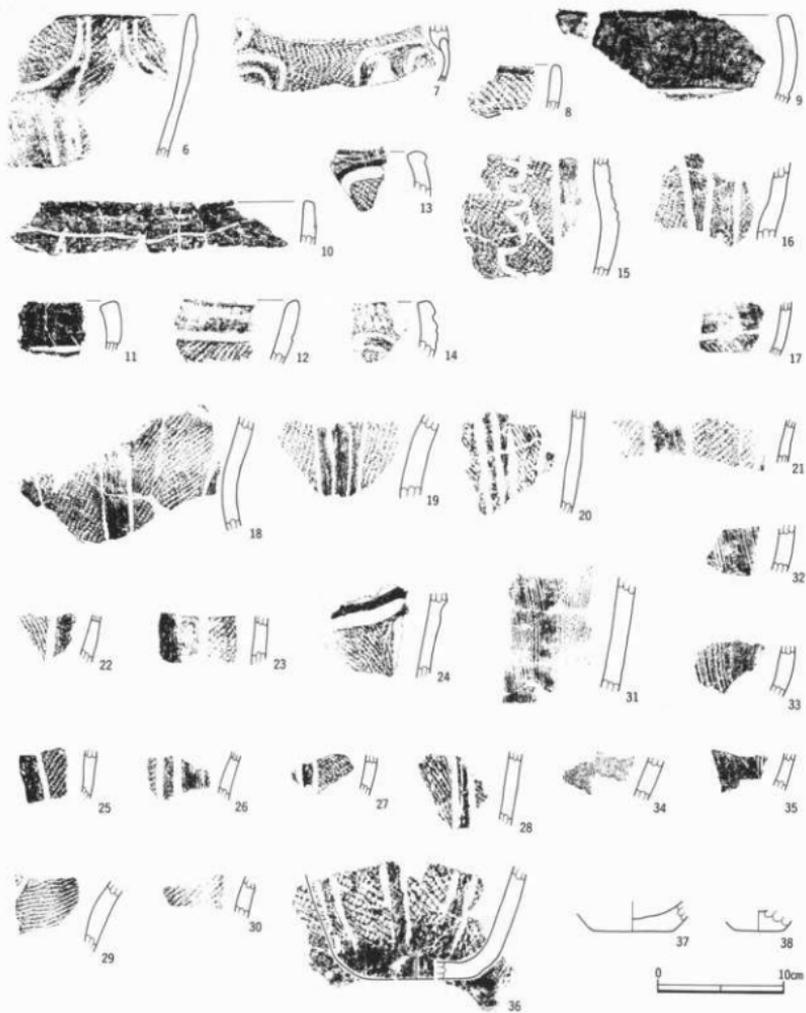
#### SI-002 (第26・27図, 図版8・25)

北西側を攪乱と土坑SK-066との重複により欠損しているものの、平面形状は直径4.2mのほぼ円形と考えられる。確認面からの掘り込みは0.2mと浅く、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は炉の周辺が硬くしまっているが周辺はそれほどでもない。炉は地床炉で、住居のほぼ中央やや南東寄りに作られている。支柱穴は炉の中央部からほぼ等距離の位置に掘られている4本と考えられる。周溝は検出されていない。なお、重複する土坑SK-066との新旧関係は本住居跡が古い。

遺物の出土はあったが、住居跡としてみればそれほど多くはない。ほとんどが小破片であり、復元・接



第24图 001号住居跡(1)



第25图 001号住居跡 (2)

合して本来の形状が分かるものは少ない。1～14は口縁部の破片の拓影図である。1は深鉢形土器の口縁部である。口縁部には沈線による区画が行われ、内側には縄文を施文している。以下胴部にも同様な文様が見られる。口唇部には上部に凹みを持つ小突起が付けられている。しかし破片であるので何単位付けられているかは不明である。2は口縁部から胴部にかけての大型の深鉢形土器の破片である。口縁部は沈線による区画が行われ内側には縄文を施文している。以下胴部にかけては沈線に挟まれた磨消帯が垂下する。3も2と同様な文様構成である。4は口縁部以下に粘土紐の貼り付ける隆帯によって文様を描いている。5～13は口唇直下に無文帯を有し以下の縄文との間には区画を分けるように沈線が1条横走する。14は1と同様な文様構成を持つと考える。15～34は口縁部から胴部にかけての破片である。15～23は磨消と沈線との組み合わせによる2と同様な文様である。24・25は隆線による文様が描かれている。26～34は胴部には歯櫛様工具による条線文が施文されている。26～28は条線文の文様上部には太く浅い沈線が横走する口縁部付近、29以下は胴部の破片である。35・36は底部付近の破片である。

また、住居が使用されなくなった直後、まだ埋没しないうちにハマグリを主体としてほかにマガキ、シオフキガイ、オキアサリなどの貝殻が住居跡の中央付近に最大で0.3mほどの厚さで堆積している。

#### SI-003 (第28図, 図版8・24)

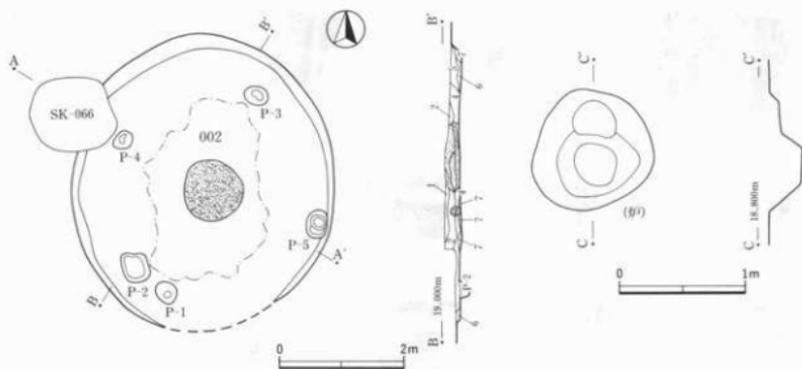
後世の攪乱を受け住居跡の南西側のおおよそ半分が検出されただけである。攪乱により床面および壁の残存状況は悪く壁は南側の一部が確認されたのみである。床も攪乱の影響を受け本来の床面がどこであるのか判然としない状況である。炉は地床炉で住居跡の中央付近と思われる位置に検出されたが、やはり攪乱を受け詳細は不明である、なお火床部はかなりの熱を受けたのか硬化している。柱穴は比較良好な状況で3か所検出されているが、いずれもそれほど深くはない。全てが主柱穴であるとの判断は難しい。本住居跡の規模・平面形状については残存する一部の壁及び炉や柱穴等の位置から見ると直径が4mほどの円形を呈すると考えられる。

遺物の出土は本遺構の検出状況からも分かるように攪乱を受けた影響なのか非常に少ない。出土したもののそのほとんどが小破片であり、復元できるものはなかった。1は口縁部付近の破片である。口唇部直下には無文帯を有し、以下胴部の縄文との間には区画を分けるように沈線が横走する。2～4は胴部の破片である。3は微隆起線によって区画された磨消帯を持つ。

#### SI-004 (第28図, 図版9・25)

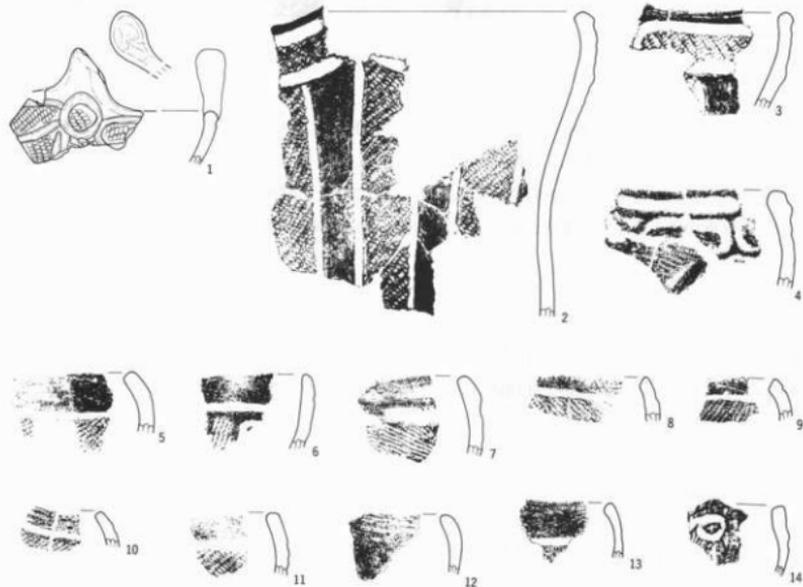
南西部と中央を横切って床の一部を攪乱により欠損し、おおよそ半分の床面を検出した。確認面からの掘り込みは0.1mと非常に浅く壁の一部は検出できなかった。床面は判然としない。炉は地床炉で住居跡のほぼ中央付近に作られている。柱穴は南東部と東の壁際に2か所検出されたがいずれも浅く主柱穴とは考えられない。また周溝は検出されなかった。本住居跡の規模及び平面形状は、炉および柱穴などの位置から判断すると、直径3mほどの円形を呈すると考えられる。

遺物の出土は攪乱等の影響もあり少なかった。そのほとんどが小破片であり、上半部がやっと復元できた土器が1個体のみであった。1は小型の深鉢形土器の口縁部から胴部にかけてのやや大きい破片である。口唇部直下には無文帯を持つ、以下の胴部には縄文が施文されている。なお、無文帯を区画するように縄文との間には太く浅い沈線が描かれている。口縁部の沈線の位置に横方向の橋状突起を持つ。この突起の

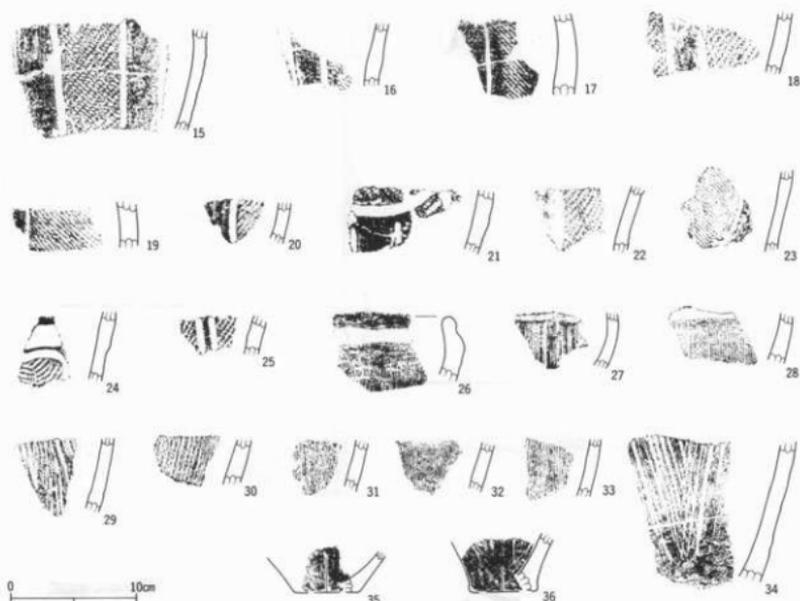


SK-002  
 1 灰褐色土  
 2 暗褐色土 U-A 粒  
 3 暗褐色土  
 4 暗褐色土 粘土粒、炭化物  
 5 暗褐色土 U-A 粒少量  
 6 褐色土 U-A 粒打平后  
 7 暗青褐色土

(B)  
 1 暗褐色土 暗褐色、粘土粒  
 2 暗褐色土 暗褐色、粘土粒  
 3 暗青褐色土 暗褐色、粘土粒



第26图 002号住居跡(1)



第27図 002号住居跡(2)

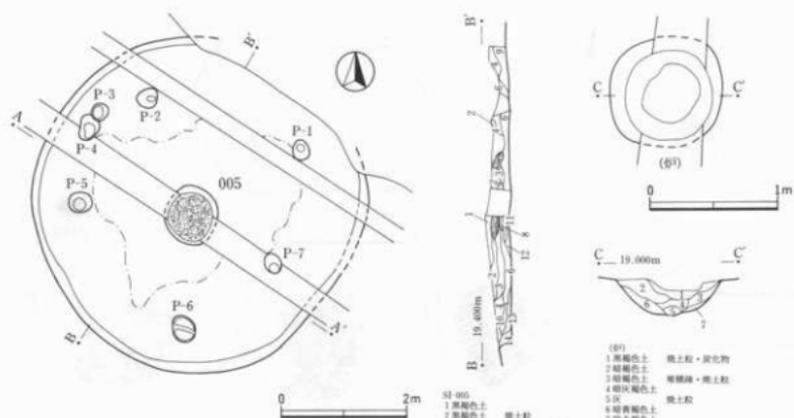
孔に連続するように両側を隆起線で区画された無文帯が垂下する。橋状突起と無文帯の単位は不明である。2は深鉢形土器の口縁部である。口唇部直下には無文帯が巡り併走する隆帯を隔てて頸部以下には縄文が施文されている。3は深鉢形土器の口縁部である。口唇部直下には無文帯が巡り併走する沈線を隔てて頸部以下には櫛歯様工具による条線が垂下する。4は深鉢形土器の胴部である。

SI-005 (第29・30図, 図版9・22・26)

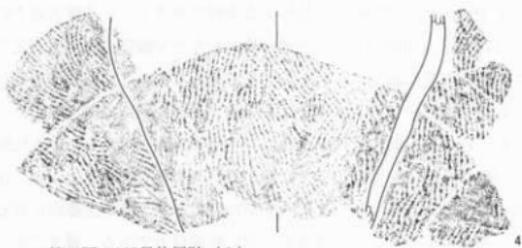
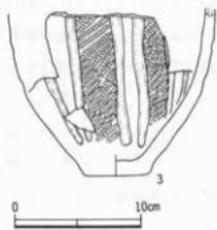
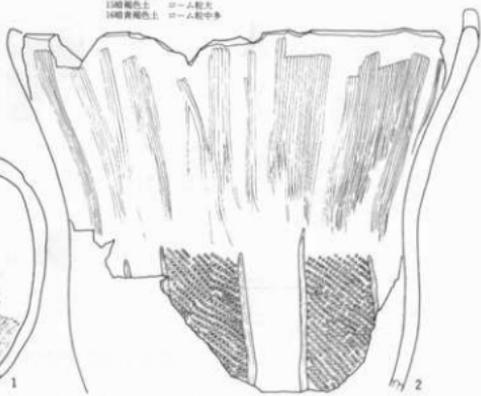
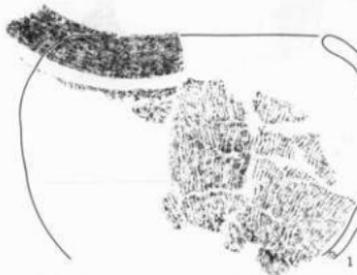
北東部と床の一部を攪乱により欠損している。平面形状は直径5mほどの円形を呈すると考えられる。確認面からの掘り込みは最大で0.2mを測る。床面は全面的に硬化しており、炉の周辺はほかと比べて特に硬く締まっている。炉は地床炉で住居跡ほぼ中央に作られている。柱穴は8か所で検出されたが、炉を中心にしてほぼ等距離にあり、深さも0.5mを越える5か所が支柱穴であると考えられる。北西壁際に隣接して検出された2本の柱穴は、壁や近接する2本の支柱からの距離などから出入り口に関する施設のものと考えられる。周溝は検出されていない。

遺物の出土はそれほど多くはなかった。そのほとんどが破片であり、本来の形状に復元できた土器は僅かであった。1は浅鉢形土器の大型破片である。口縁は大きく内湾する。外面口唇部直下には無文帯が巡り下方で併走する深く浅い沈線を隔てて頸部以下には櫛歯様工具による条線が一面に施文されるのみである。2は深鉢形土器の上半部である。頸部から緩やかに広がりながら開口し、口唇部付近でわずかに内湾

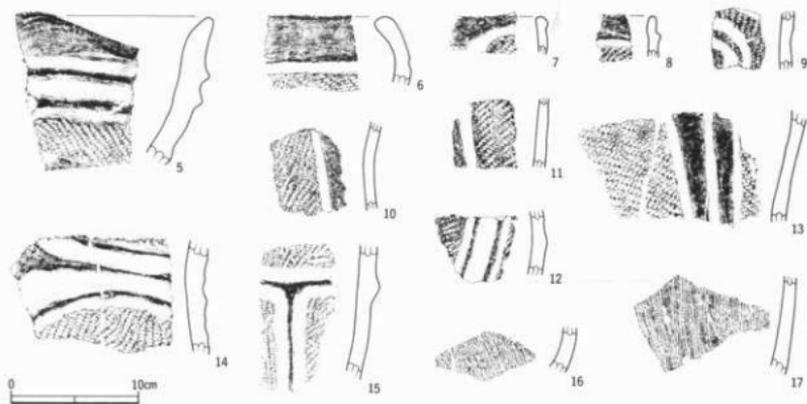




- 54-005
- 1 黑褐色土
  - 2 黑褐色土
  - 3 黑褐色土
  - 4 黑褐色土
  - 5 黑褐色土
  - 6 黑褐色土
  - 7 黑褐色土
  - 8 黑褐色土
  - 9 黑褐色土
  - 10 黑褐色土
  - 11 黑褐色土
  - 12 黑褐色土
  - 13 黑褐色土
  - 14 黑褐色土
- 1 黄土粒
  - 2 黄土粒 + 炭化物
  - 3 黄土粒 + 炭化物
  - 4 黄土粒 + 炭化物
  - 5 黄土粒 + 炭化物
  - 6 黄土粒 + 炭化物
  - 7 黄土粒 + 炭化物
  - 8 黄土粒 + 炭化物
  - 9 黄土粒 + 炭化物
  - 10 黄土粒 + 炭化物
  - 11 黄土粒 + 炭化物
  - 12 黄土粒 + 炭化物
  - 13 黄土粒 + 炭化物
  - 14 黄土粒 + 炭化物



第29图 005号住居迹 (1)



第30図 005号住居跡(2)

されている。4は深鉢形土器の口縁部付近から胴部にかけての大型破片である。器面には縄文のみが施文されている。5～17は土器破片の拓影図である。5～8は口縁部付近である。5は大型の深鉢形土器の口縁部である。口縁部以下は隆起線による文様を描いている。地文は縄文である。6は浅鉢形土器の口縁部である。口唇部直下には無文帯が巡り、下部の太く浅い沈線を隔てて以下胴部には縄文を施文している。7は小型の深鉢形土器の口縁部である。口唇部直下に狭い無文帯が巡り以下には沈線による区画がなされ縄文が充填されている。また磨消帯が垂下するようである。8は口唇部直下には無文帯が巡り、隆起線文を隔てて以下には縄文が施文されている。9以下は胴部の破片である。9・12・14・15は地文の縄文に隆起線文による文様を加えられている。10・11・13は地文の縄文及び沈線と磨消帯の組み合わせによる文様が施されている。16・17は条線文が施文されている深鉢形土器の胴部破片である。

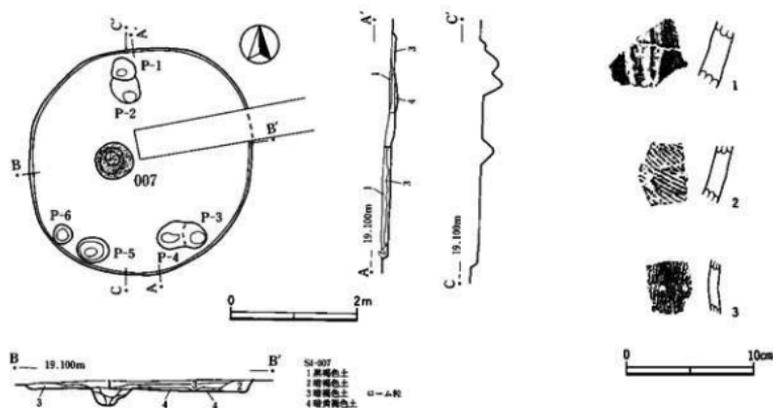
また、住居跡が破棄されしばらく経ってまだ凹みが残っている時期に、住居の中央付近を中心にしてブロック状に広がりながらオキアサリ・ハマグリを主体とする貝殻が投棄されている。貝層の厚さは最も厚いところで0.3mほどである。

SI-006 (第31図, 図版9・22)

上部や周辺が攪乱により欠損している部分がある。平面形状は直径が3.4mほどの円形を呈する。確認面からの掘り込みは最大で0.2mを測る。床面は全面で検出された。とくに炉周辺が硬化の程度が強く、周辺に向かっては比較的軟弱である。炉は地床炉で住居跡のほぼ中央に作られている。住居の規模に比較してやや大きめである。柱穴は住居の北側に偏って検出されている。掘り込みはいずれも床面からの深さが0.2m前後と比較的浅い。したがってこれら検出されたもの全てが柱穴かどうかは不明である。周溝は検出されていない。

遺物の出土は少なかった。ほとんどが破片であり、ほぼ復元できた土器が小型の1個体のみであった。1は小型の深鉢形土器である。底部は口径に比して小さく安定性に欠ける。底部は若干干上げ底気味である。





第32図 007号住居跡

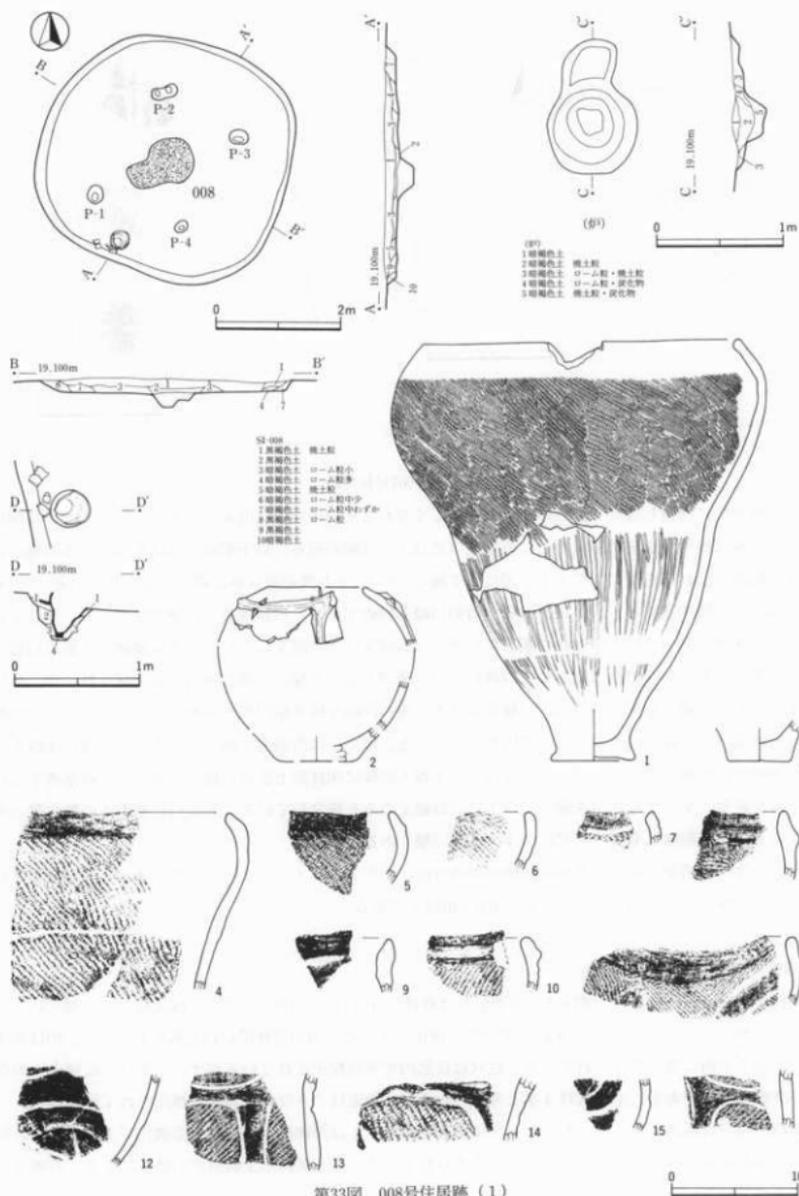
胴部は緩やかに内湾しながら膨らみ中ほどで少くびれるその後口縁に向かって大きく内湾しながら開口する。口縁は緩やかな波状を呈す。口唇部直下には太い沈線が巡る。以下胴部には隆起線による渦巻きの文様を胴部の拵れ部を境にして上下2段にして施している。また隆起線以外は縄文を施文している。2～6は土器は刃の拓影図である。2は深鉢形土器の口縁部付近である。口唇部直下に無文帯が巡り、平行する太く浅い沈線を隔てて以下頸部から胴部にかけては斜縄文のみを施文している。3は深鉢形土器の口唇部付近である。頸部から口縁に向かって内湾しながら開口する。平縁の一部に半円状の突起を持つが、単位は不明である。縄文を施文した後、口縁部には太く浅い沈線を描き楕円形の区画を行っている。また突起部分には弧状の沈線を描き見た目に楕円形としている。以下には磨消帯を挟んで二本の太く浅い沈線を一定の間隔を持ち垂下させている。4・5は2の土器と同様に深鉢形土器の口縁部である。口唇部直下には無文帯が巡り、平行する沈線を隔てて以下には斜縄文のみを施文している。6は口唇部直下の無文帯と平行するものが隆起線に変わっただけで4・5と同様である。

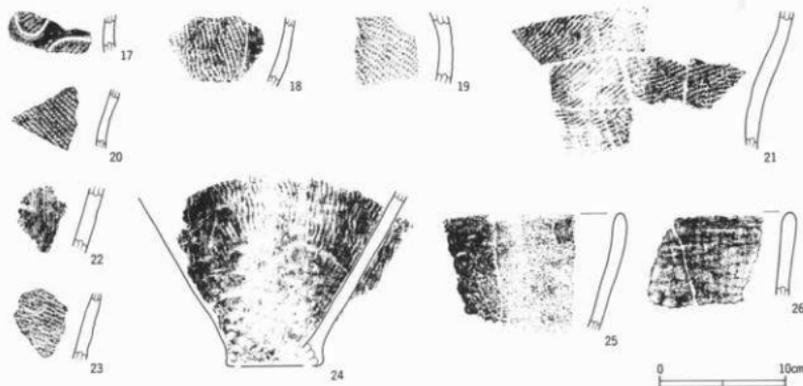
また、住居が破棄された直後から住居の中央付近にオキアサリ・ハマグリを主体とする貝殻が投棄されている。貝層の厚さは最も厚いところで0.2mほどである。

#### SI-007 (第32図、図版10・26)

東側の一部を攪乱により欠損する。平面形状は直径3.5mほどの円形を呈する。確認面からの掘り込みは最大で0.1mほどと非常に浅い。床面は部分的に硬化しているものの全体的には比較的軟らかい。炉は地床炉で中央やや西に寄って作られている。柱穴は住居内で多数検出されているがすべて本住居に伴うものなのか詳細は不明である。主柱穴は4本と考えられるが、特定はできない。周溝は検出されていない。

遺物の出土は極めて少なかった。すべて小破片である。1は深鉢形土器の胴部の破片である。二本の平行する隆起線による文様が描かれていると考えられる。2・3も深鉢形土器胴部の破片である。斜縄文が施文されている。





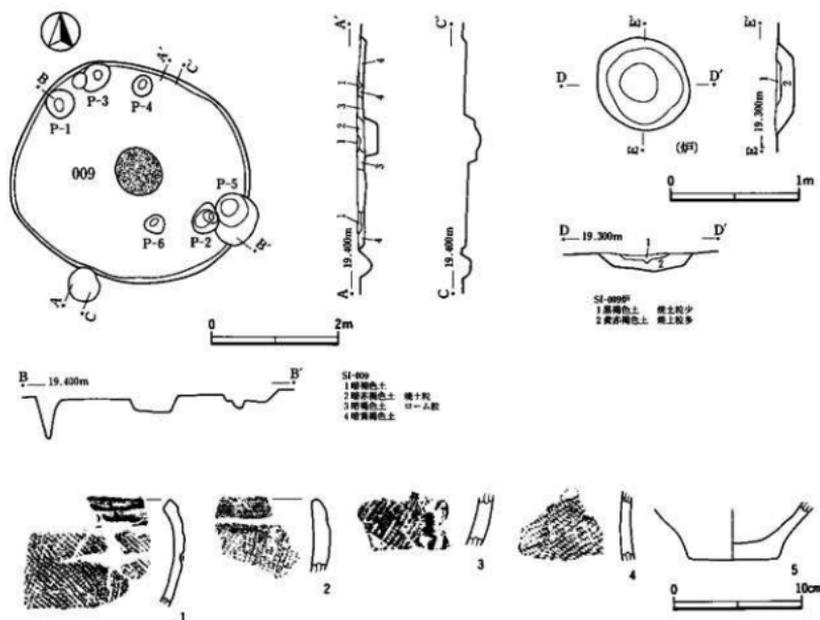
第34図 008号住居跡(2)

SI-008 (第33・34図, 図版10・22・26)

壁際の一部に攪乱を受けているが、平面形状は直径3.8mほどの円形を呈すると考えられる。確認面からの掘り込みは0.1mほどと非常に浅い。床面は全体にそれほど硬化はしていない。炉は地床炉で住居跡ほぼ中央に作られている。柱穴は4本が炉からほぼ同じ距離で検出されており、深さもあることからこの4本が主柱穴であると考え。周溝は検出されていない。

また、住居南側の壁際には床面を掘りくぼめて深鉢形の縄文土器がほぼ完全な形で口を床面上に少し出すように、そして口を住居の内側に向くように斜めに埋められていた。残念ながら口縁の一部を欠いている。

遺物の出土はそれほど多くはない。ほとんどが破片であり、完形品に近い土器は埋塞だけである。1は床面に埋設されていた深鉢形土器である。小さな底部から緩やかに内湾しながら立ち上がり、胴部中ほどで若干括れその後はやや内湾傾向を強めて開口する。口唇部直下は無文帯が巡り以下胴部の括れ部付近までは斜縄文のみを施文する。無文帯と縄文の接点付近は弱い稜線状に膨らんでいる。括れ部以下底部付近までは半截竹管様工具による縦方向の条線を多数施文している。この土器、埋設される以前にかなり熱を受けていたようである。2は有孔罅付土器である。口縁付近を中心にして一応底部まで接合はしないが形状を復元できる部位の破片が出土した。地は無文である。隆起線により文様を描いているようだが、肝心の胴部の破片はほとんど出土せず不明である。ただ、口縁部付近の様子から隆起線で文様を施していたようで、無文の口縁部直下には口縁に平行して粘土紐の張り付けによる隆起線が罅状に走り、所々で下方へ垂下する。この口縁に沿って走る隆起線には、ある間隔をおいて縦方向の小さな孔が穿けられている。3は深鉢形土器の底部である。4～26は土器破片の拓影図である。4～11は深鉢形土器の口縁部である。口唇部直下は無文帯が巡り以下に縄文を施文している。11は磨消帯の文様が描かれている。12～21は深鉢形土器の胴部の破片である。地文に縄文を施文し磨消帯による文様が描かれているものや縄文のみの土器である。22～は条線文が施文されている土器である。22は地文の縄文の上から条線を施文している、条線は底部付近だけかも知れない。



第35図 009号住居跡

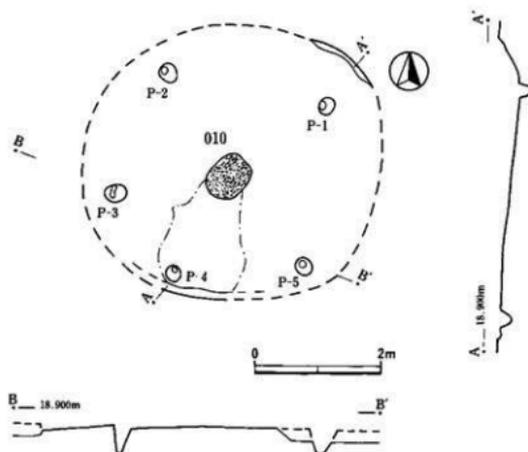
SI-009 (第35図, 図版10・25)

床面の一部を攪乱により欠損している。平面形状は長径3.7m, 短径3.3mのやや楕円形を呈すると考えられる。確認面からの掘り込みは最大でも8cmと極めて浅い。床面は特に硬化しているところは認められなかった。炉は地床炉で住居跡のほぼ中央に作られている。柱穴は住居跡の内外や壁に接して多数検出されているが、本住居跡の主柱穴がどれかの特定は出来ない。周溝は検出されていない。

遺物の出土は少なかった。ほとんどが破片である。1・2は深鉢形土器の口縁部である。ともに口唇部直下に無文帯を巡らし以下には縄文を施文している。3・4は深鉢形土器の胴部の破片である。3は縄文と隆起線との組み合わせによる文様, 4は縄文のみが施文されている。5は深鉢形土器の底部である。

SI-010 (第36図, 図版11)

激しく攪乱を受け、壁・床・柱穴の一部と炉跡が検出されたのみである。柱穴は主柱穴と思われる5本が炉跡からほぼ同じ距離・間隔をおいて検出されている。この主柱穴と炉跡・残っている壁の位置から考えると本住居跡の規模及び平面形状は直径が4.6mほどの円形を呈すると考えられる。周溝もなかったと考える。遺物の出土はほとんどなく、土器破片がわずかに出土したのみであり、図示できるものはなかった。

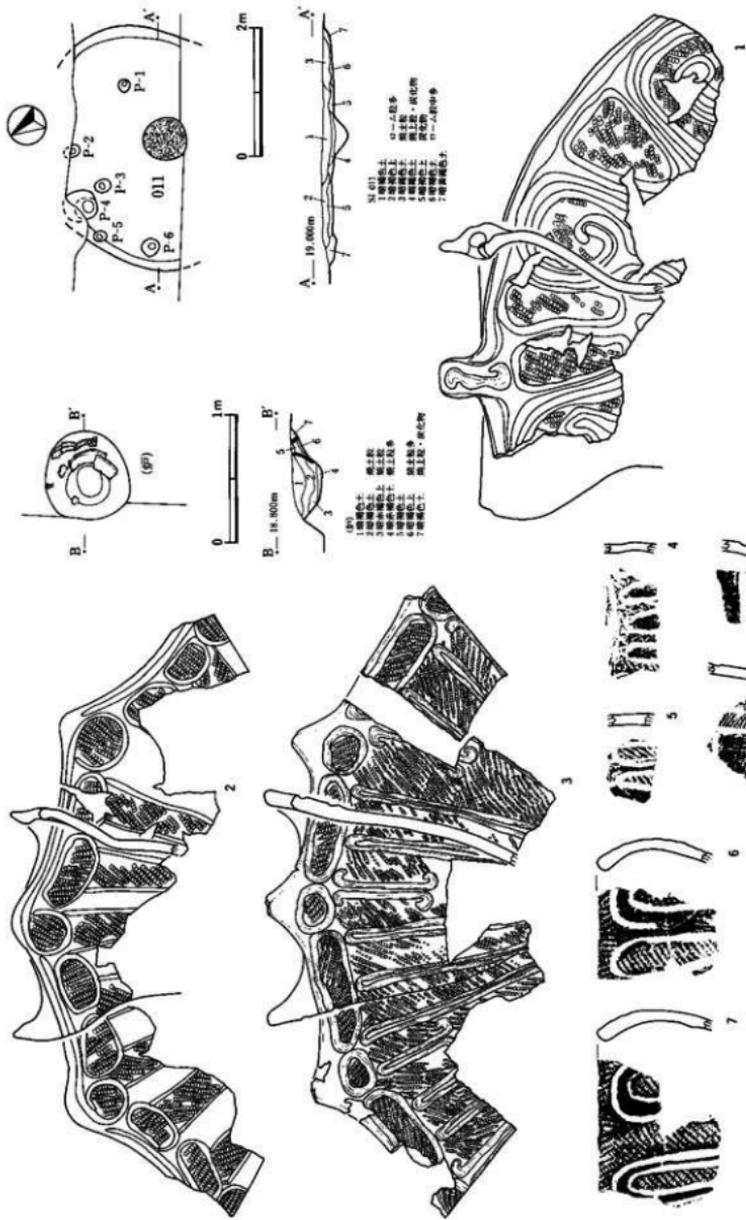


第36図 010号住居跡

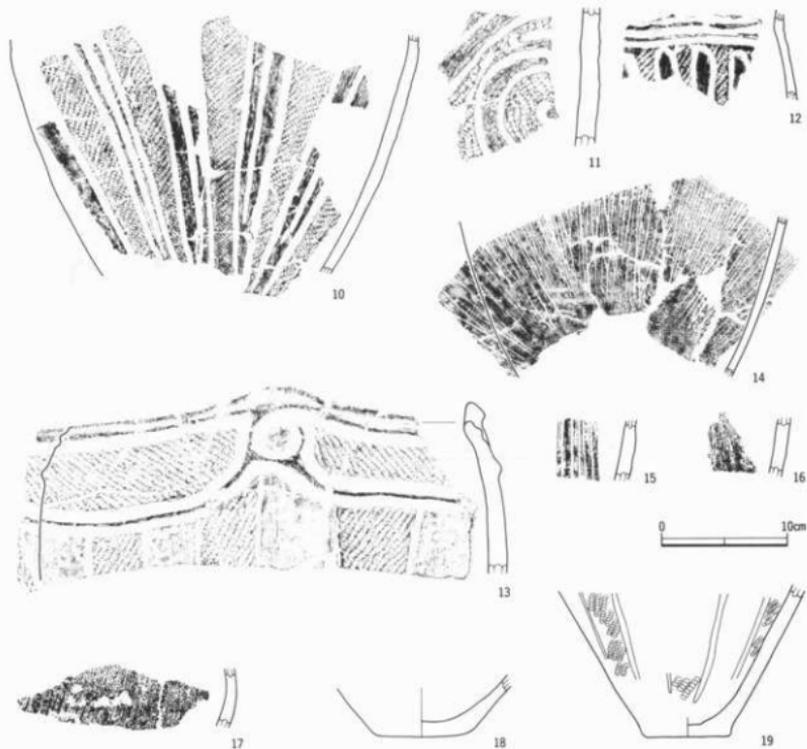
SI-011 (第37・38図, 図版11・23・27)

北東側と南西側に攪乱を受け壁と床面の半分ほどを欠損している。平面形状は直径3.9mほどの円形を呈すると考えられる。確認面からの掘り込みは最大で8cmと極めて浅い。床面は残存する範囲では硬く締まっている。炉は北側に2列平行に土器片を並べた状態で検出されており、土器片囲い炉の様相を呈する。柱穴は床面の残る範囲から6本検出されているのみで主柱穴の特定など詳細は不明である。周溝は検出されていない。

遺物の出土は攪乱されている割には多く出土している。ほとんどが破片であり、復元・接合できたものは僅かであった。1は小型の深鉢形土器の上半部である。口縁は平縁であるが、橋状突起を1か所に有する。頸部の括れから口縁に向かっては内湾しながらやや広がって開口する。口縁部には太い沈線による区画が行われ、沈線に囲まれた内側には斜縄文が施文されている。2は小型の深鉢形土器の上半部である。口縁は4単位の波状を呈し、括れた頸部から口縁に向かって内湾しながらやや広がりがながら開口する。口唇部直下には沈線を口縁に沿って走らせ、接して以下には沈線による楕円形の区画を12個並べている。いずれの区画の内側には斜縄文が施文されている。また、区画直下から底部に向かって細い沈線に挟まれた磨消帯がほぼ一定の間隔をおいて9本垂下させている。3は小型の深鉢形の土器である。口縁は4単位の波状を呈し、底部から胴部がやや膨らむもののほぼ直線的に広がりながら開口する。口唇直下には沈線による楕円形と円形による区画が4組施されている。また、区画帯に以下には底部に向かって近接して平行する2本の沈線を間隔をおいて垂下させている。さらにその間には沈線による蕨手状の文様を2本一組として描いている。そのほかの器面には斜縄文が施文されている。4・5は深鉢形土器の口縁部である。地文である縄文の上から沈線により挟まれた磨消帯で「∩」状に文様を描く。6・7は頸部付近の土器である。10は大型の深鉢形土器の胴部である。地文である斜縄文の上を磨消帯を挟んで平行する3本の太く浅い沈線を垂下させている。11は大型の深鉢形土器の胴部である。地文である斜縄文の上を沈線に挟まれ



第37圖 011号住居跡 (1)

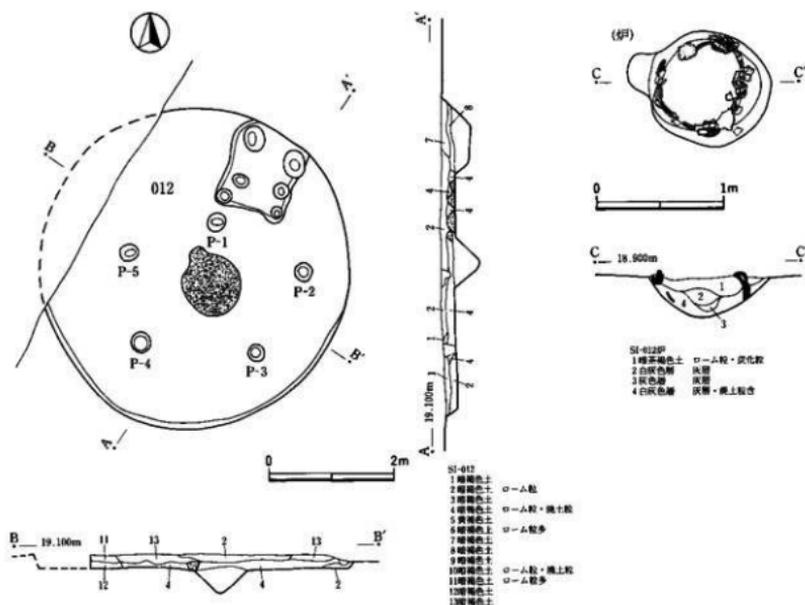


第38図 011号住居跡(2)

た磨消帯により文様を描いている。12は深鉢形土器の頸部である。6・7は同一個体である。13は大型の深鉢形土器の口縁部である。平縁の口唇部には半月形の突起が付く、単位は不明である。口縁は隆線により区画が作られ、内側には斜縄文を施文している。区画以下の胴部には直下から太く浅い沈線で挟まれた幅広の磨消帯が一定の間隔を持って垂下している。14~17は深鉢形土器の胴部である。いずれも半截竹管又は櫛齒様工具による条線が縦方向に施されている。18・19は深鉢形土器の底部である。19は地文で斜縄文の上を沈線で挟まれた磨消帯が底部近くまで施されている。

SI-012 (第39~42図, 図版11・23・28)

攪乱と土坑との重複により北側の一部を欠損、北西部が事業地外に広がるため未調査である。確認面からの掘り込みは最大で0.2mと非常に浅い。床面は炉の周辺が特に硬く締まっているがそれ以外は比較的軟らかい。炉は住居跡のほぼ中央に作られ、土器破片で縁を囲いゆる土器片囲い炉である。火床部は高

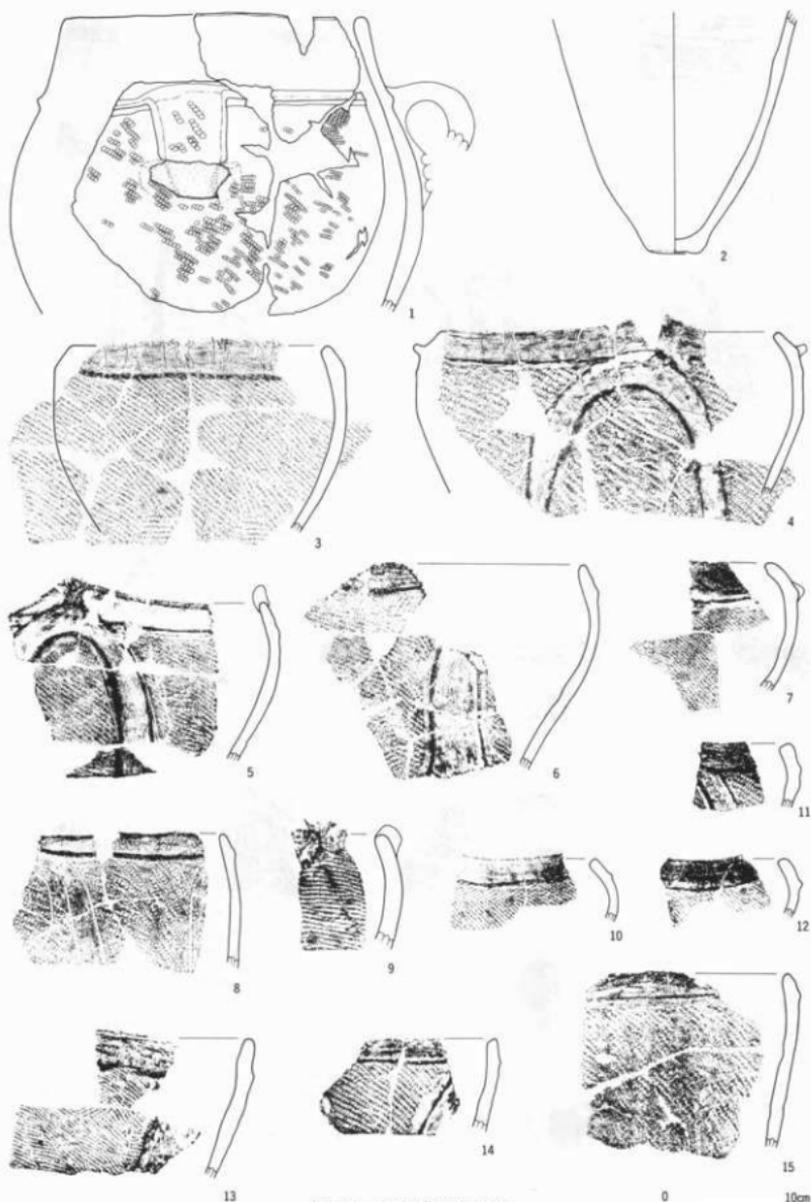


第39図 012号住居跡 (1)

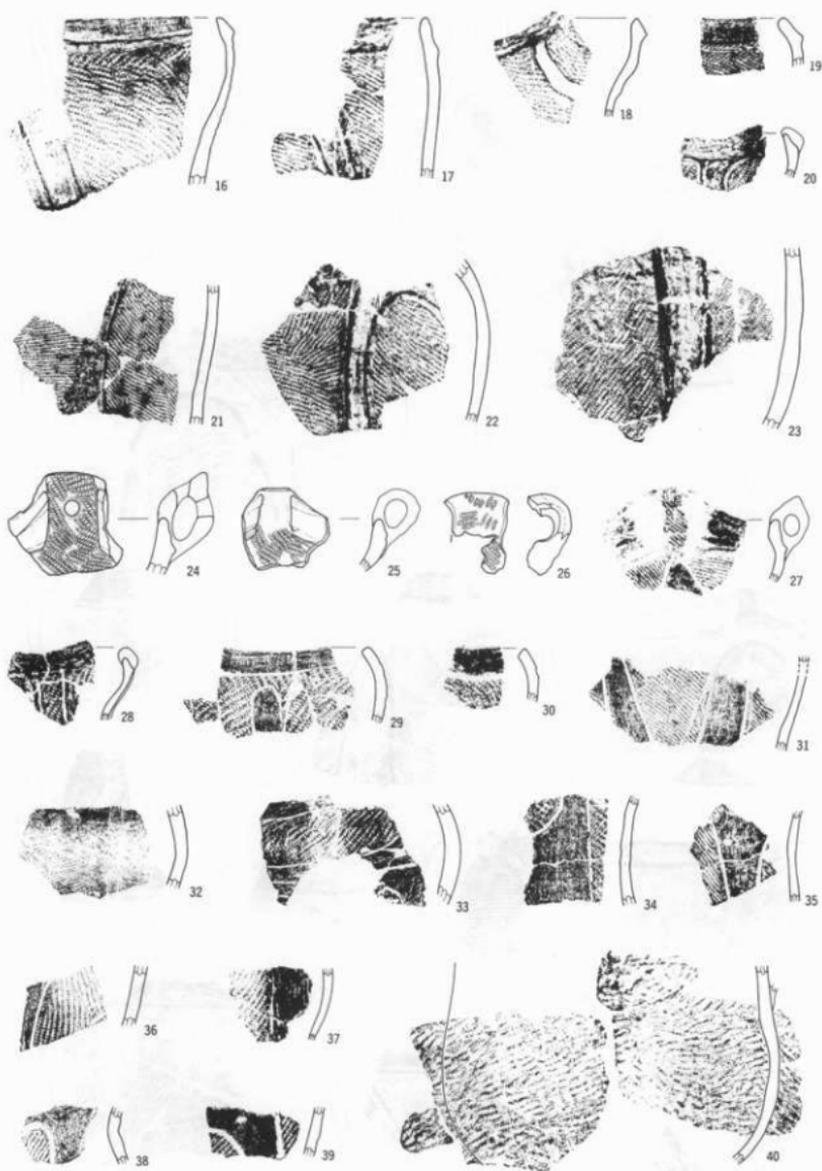
熱を受け硬化し赤色に変色している。柱穴は多数検出されているが、一部未調査の地区があり、主柱穴の特定は出来ない。周溝は検出されていない。

住居跡の北側には非常に浅い掘り込みと、平行する柱穴列が検出された。これはSI-001号住居跡の状況と酷似しており、本住居跡の出入り口施設であると考えても良さそうである。このことから先に特定できなかった主柱穴は位置はともかくSI-001号住居跡と同様5本が妥当ではないかと考えられる。また、平面形状は、SI-001号住居跡と同様に掘り込みの内側に取り組みと考えると直径5mの円形を呈すると考える。

遺物の出土は今回検出された竪穴住居跡の中では最も多く出土している。しかし多くは破片であり、復元・接合できたものは僅かであった。1は大型の深鉢形土器である。口唇部直下には幅広の無文帯が口縁に沿って巡る。下部には無文帯に沿って走る稜線を境に胴部には縄文のみが施文されている。また、稜線部から胴部にかけて大きな橋状突起が付けられている。2は深鉢形土器の下半部である。底部から上方へほぼ直線的に広がりながら立ち上がる。土器外面は無文で、縦方向の磨きが施されている。ただし、底部付近には沈線に挟まれた磨消帯の残存が見られることから、当初本土器は縄文と磨消帯の文様が交互に施文されていたことが考えられる。また、外面の一部には被熱し器面が焼けただれている部分が見られる。次の3～4は土器破片の拓影図である。3～20は口唇部直下に無文帯が巡り、下部に断面三角形の隆線が巡り以下の文様と区画している土器である。3は深鉢形土器の口縁部付近である。口唇部直下には無文帯が口縁に沿って巡る。以下胴部には無文帯に沿って走る稜線を境に縄文のみが施文されている。4は深鉢形土器の口縁部付近である。口唇部直下には3同様の無文帯が口縁に沿って巡り下部には断面三角形の

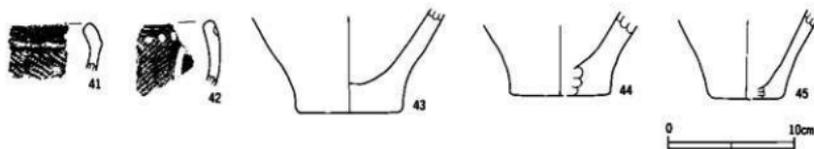


第40图 012号住居跡(2)



第41图 012号住居跡(3)





第42図 012号住居跡(4)

隆線が走る。以下胴部には2本の隆線に挟まれた磨消帯が上部を無文帯に接して「Π」字状に文様が施されている。また稜線が接するか所には突起が付けられている。5は深鉢形土器の口縁部である。文様の特徴は4と同様の土器である。ただ、口縁部の突起の形状が本土器では隆線上に止まらず口縁部にまでおおよび波状口縁としていることである。6は5と同一個体である。7は深鉢形土器の口縁部付近である。文様の特徴は3と同様である。8は深鉢形土器の口縁部付近である。口縁部の無文帯以下は細い沈線に挟まれた磨消帯及び沈線により文様が施されている。どのような文様になるのかは不明。9は深鉢形土器の口縁部付近である。口縁部の無文帯は連続せず突起部で中断するようだ。10・11・15は深鉢形土器の口縁部付近である。文様の特徴は3と同様である。13・14・16~18・20は深鉢形土器の口縁部付近である。文様の特徴は6と同様と考える。18は波状口縁を呈し、波頂部の口縁部側に突起が付けられていたようである。19も同様と考えられるが、破片が小さく磨消帯が確認が出来ない、また無文帯直下に施文された縄文は羽状を呈し隆線の上まで施されている。21~23は大型の深鉢形土器胴部の破片である。器面には斜縄文とともに断面三角形の隆線に挟まれた磨消帯が施されている。24~27は橋状突起を口縁部に持つ土器の破片である。いずれも突起の上面まで縄文が施されている。24は突起の中ほどに孔が穿たれている。28深鉢形土器の口縁部である。口縁部文様帯の特徴は20と同様であるが、以下の隆線に挟まれた部分が磨消になっておらず縄文が施されている。29は深鉢形土器の口縁部である。口唇部直下には無文帯が廻り、下部には細い沈線が横走る。以下には斜縄文が施され、沈線に囲まれた磨消帯が垂下している。単位は不明。30は口縁部の文様は29と同様の口縁部付近の土器片である。31~40は深鉢形土器の胴部の破片である。31~36・38・39は沈線と磨消帯の組み合わせによる文様が施されている。37は隆線と磨消帯との組み合わせによる。40は斜縄文のみが施されている。42は深鉢形土器の口縁部である。口唇直下まで斜縄文が施され、その上から棒状工具による円形の刺突痕が横走る。以下には沈線と磨消帯の組み合わせによる文様が施されている。43~45は深鉢形土器の底部である。底部より垂直に立ち上がりすぐに大きく広がる様相を示す。また、内側底部は平坦ではなく弧状を呈し、当該期の特徴を示している。

本住居が破壊され、まだ時間を経ない時期に住居の中央付近を中心にオキアサリ・ハマグリを主体とする貝殻がやや広がりを持って投棄されている。貝層の堆積は最も厚くても0.2mほどである。

#### SI-013 (第43図, 図版12)

攪乱が激しく壁と床面は削平され、炉と柱穴の一部が検出されたにとどまる。炉は地床炉と考えられるが火床部の底部付近がろうじて残っている程度である。柱穴も偏って検出され、主柱穴が何本であるのかの特定も難しい。本住居に伴うと思われる遺物は出土していない。

#### SI-014 (第43図, 図版12)

竪穴住居跡SI-013と同様に攪乱が激しく床面と南東側の壁の一部がかろうじて検出された。確認面からの掘り込みは最大で0.1mと極めて浅い。床面はその多くが攪乱の影響を受け状況を把握することは困難であった。炉は地床炉で住居跡の中央付近に作られている。柱穴は住居跡の南側に偏って楕円形にほぼ等間隔に並び多数検出された。これらは大きさや深さも大差がなく壁柱穴と考えられる。この壁柱穴の並び方から本住居跡の平面形状は長径6.8m, 短径6.1mほどの隅丸方形に近い楕円形を呈していたと考えられる。遺物の出土はあったが極めて少量であった。しかし土器は小破片ばかりであり、図示できるものはなかった。

#### SI-015 (第44図)

上部に攪乱を受けてはいるが、壁が一周する。平面形状は長径5.2m, 短径4.9mの円に近い楕円形を呈する。確認面からの掘り込みは最大で0.3mを測り本遺跡では深い方である。床面はそれほどの硬化は認められなかった。炉は地床炉で住居跡のほぼ中央に作られている。柱穴は5本検出されている、いずれも床面からの深さが0.6mを越える。このうち炉からほぼ同じ距離をもって存在する4本が主柱穴であると考えられる。周溝は検出されていない。

また、本住居跡の北側の壁をやや張り出すように柱穴が並んで2本検出されている。規模・形態は竪穴住居跡SI-001などとは異なるが入り口施設と考えても良さそうである。

遺物の出土はあったが少量であった。しかし土器は小破片ばかりで図示できるものはなかった。

#### SI-016 (第44図)

攪乱が激しく主柱穴と考えられる4本の柱穴が検出されたのみである。時期や規模・形態の詳細は不明である。また、炉も検出されなかった。本住居に伴うと思われる遺物は出土していない。

## 2) 土 坑

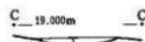
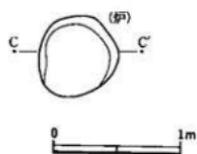
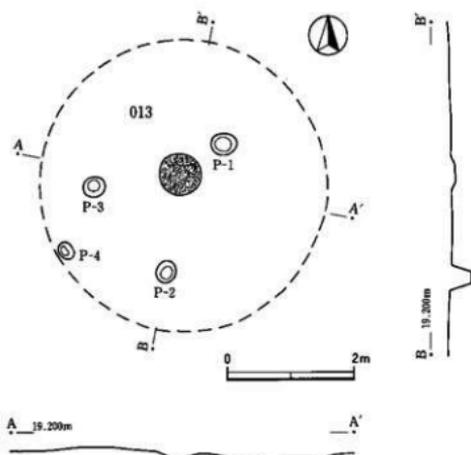
縄文中期の土坑は北側(B区)の調査区から総計53基が確認されている。これらのなかには住居跡等土坑以外の遺構と重複したり後世の攪乱を受けていたりしている土坑も多く、明確に土坑と判断できなかったものもあったと考えられ実数はもう少し多いも考える。

これら検出された53基の土坑のなかには土器や石器など遺物を伴うものもかなりあった。しかし、その遺物の出土量や形状は攪乱等の影響を受けていると思われ、それぞれまちまちであった。それらの土坑のなかにも住居跡でも見られた様にSK-011・016・076・085の4基からは、その量や堆積の状況に違いはあるものの貝の堆積が認められている。

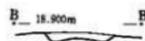
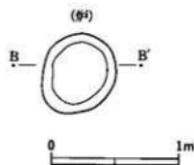
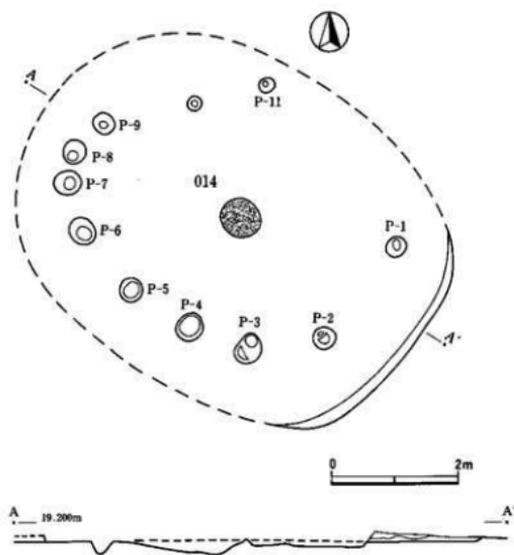
以下にこれら土坑についてその概要を述べることにする。

#### SK-011 (第45図, 図版14・29)

12C-78区に位置し、陥穴SK-020と重複する。残っている形状から平面形状は直径1.8mの円形を呈すると考えられる。確認面からの掘り込みは最大で0.6mを測る。底部は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上る。断面形状は円筒状を示す。また、本土坑が破棄された直後のまだ窪地が残っていた時期にマガキを主体とする貝殻がかなり厚く堆積している。厚さは0.3mほどである。

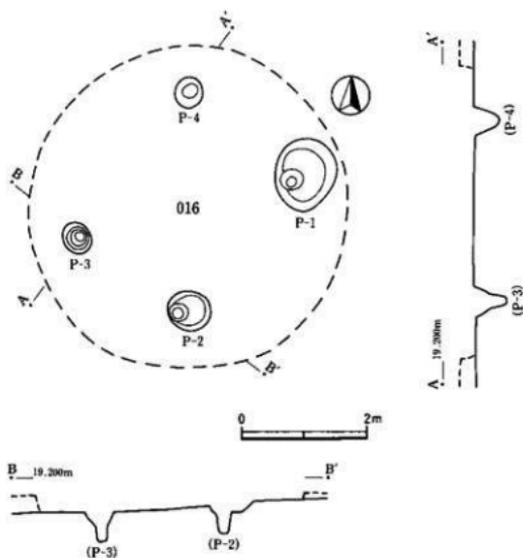
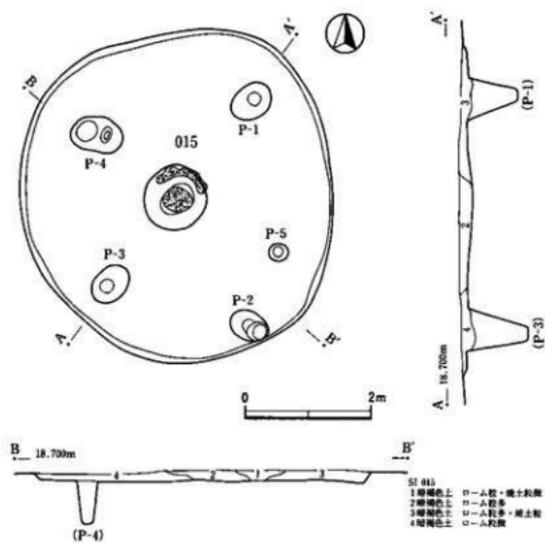


SI-013P1  
1 磁赤褐色土 黄土層部



SI-014P1  
1 磁赤褐色土 黄土層部

第43图 013・014号住居跡



第44図 015・016号住居跡

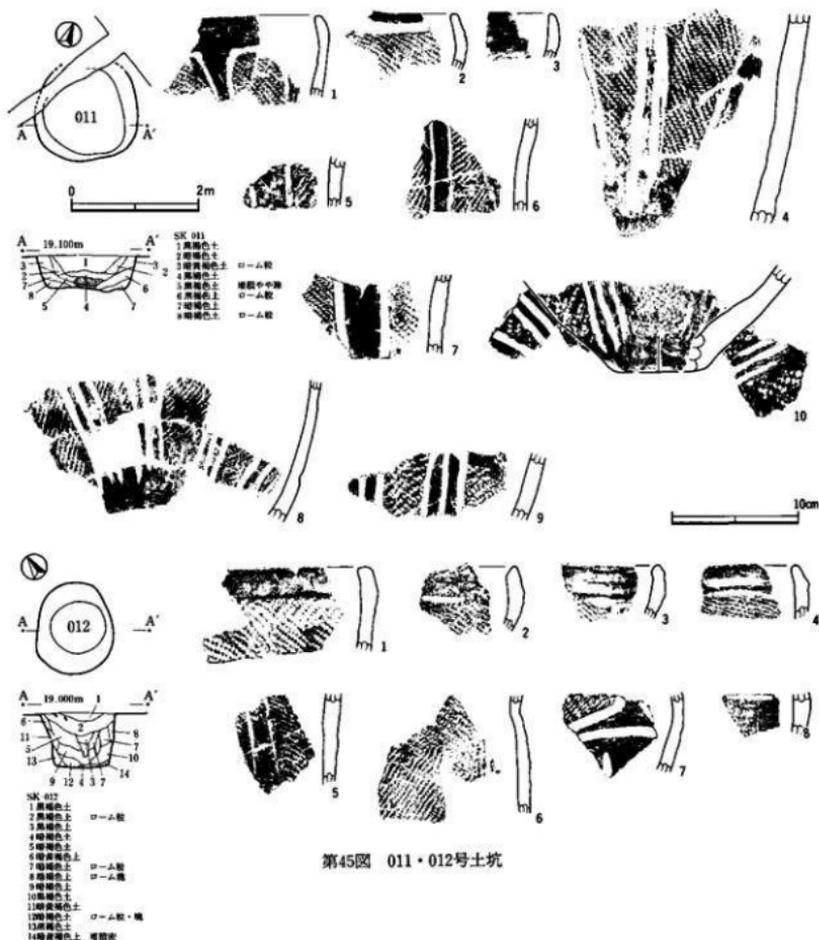
なお、重複する陥穴SK-020は本土坑より古い。

遺物は覆土上層からの出土が多く、そのほとんどは土器破片であった。1～3は土器の口縁部の土器拓影図である。いずれも口唇部直下に無文帯が巡る。1は無文帯から下方に向かって沈線で挟まれた磨消帯が垂下している。磨消帯と磨消帯との間は縄文が施文されている。2は無文帯以下の斜縄文との境に浅く太い沈線を巡らせている。4～10は深鉢形土器の胴部から底部付近にかけての土器拓影図である。地文の縄文と平行する2～3本を単位とする沈線が間隔を持って垂下する。5～7は沈線に挟まれて幅広の磨消帯が垂下する。

SK-012 (第45図, 図版14・29)

10E-27区に位置する。平面形状は直径1.2mほどの円形を呈すると考えられる。確認面からの掘り込みは0.9mを測り深い。底部は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上る。検出時土坑上部は外へ大きく広がる形状を示しているが本来の断面形状は円筒状を呈していたと考える。上部の広がりは崩落によるものと考えられる。底部中央やや南寄りに深さ4cmほどの凹みがある。柱穴ほど深くはなく性格は不明である。

遺物は覆土上層からの出土で

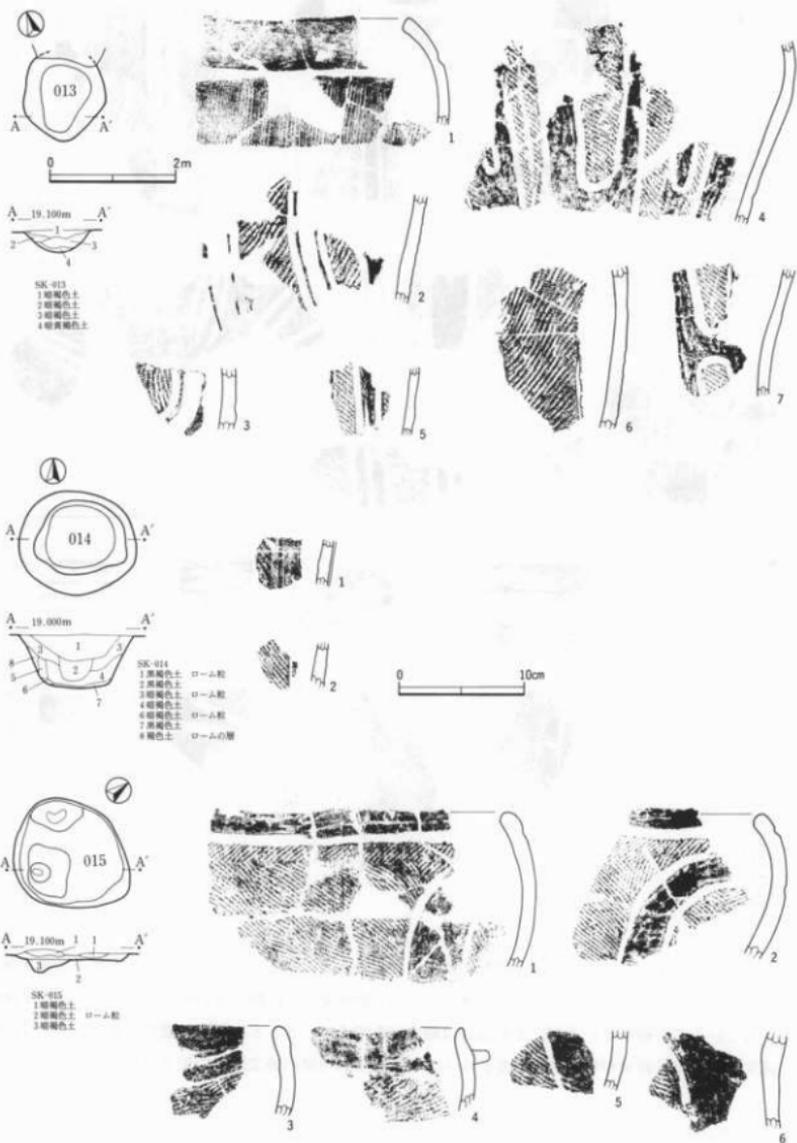


第45図 011・012号土坑

すべて土器破片であった。1～4は深鉢形土器の口縁部の拓影図である。いずれも口唇部直下に無文帯が巡り、下部には隆線が横走り、以下胴部に施されている斜縄文とを区画している。3には無文帯以下沈線が施されているのが観察されるが、それ以外は縄文のみである。5～8は胴部の破片である。5～7は地に縄文が、8は条線文が施されている。5・7は沈線と磨消帯が縄文以外に加えられている。

SK-013 (第46図, 図版14・30)

10F-65区に位置する。北側に攪乱を受けて上半部を欠損する。平面形状は直径1.3mほどの不整形であるが本来は円形を呈すると考えられる。確認面からの掘り込みは0.4mを測り、それほど深くない。底面



第46图 013·014·015号土坑

は平坦であるが、全体の断面形状は鍋底状を呈する。

遺物の出土は少量である。すべて土器破片であった。1は深鉢形土器の口縁付近である。口唇部直下にはやや幅の広い無文帯が巡る。下部の沈線を区画として以下には篩齒様工具による条線文が施されている。磨消や沈線の垂下は見られない。2～7は深鉢形土器の胴部の土器拓影図である。2・3は隆線に挟まれた磨消帯によって文様が施されている。4～7は沈線に挟まれた磨消帯により文様が施されている。4は地文である縄文の上に口縁部から胴部下半に掛けて沈線で挟まれた磨消帯で「H」字状の文様のある間隔を持って連続的に施している。7は接合しないが4と同一個体である。

#### SK-014 (第46図, 図版14・30)

10E-46区に位置する。平面形状は長径1.9m, 短径1.6mを測る円に近い楕円形を呈する。やや大きめの土坑である。確認面からの掘り込みは0.9mを測りかなり深い。底部は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上る。断面形状は土坑上部が崩落により外へ広がってはいるが本来は円筒状を呈していたと考える。

遺物の出土は少量ですべて破片であった。1は深鉢形土器の胴部破片である。稜線で挟まれた磨消帯と地文の縄文が見られる。2も同じく深鉢形土器の胴部破片である。沈線で挟まれた磨消帯と地文の縄文が見られる。

#### SK-015 (第46図, 図版14・29)

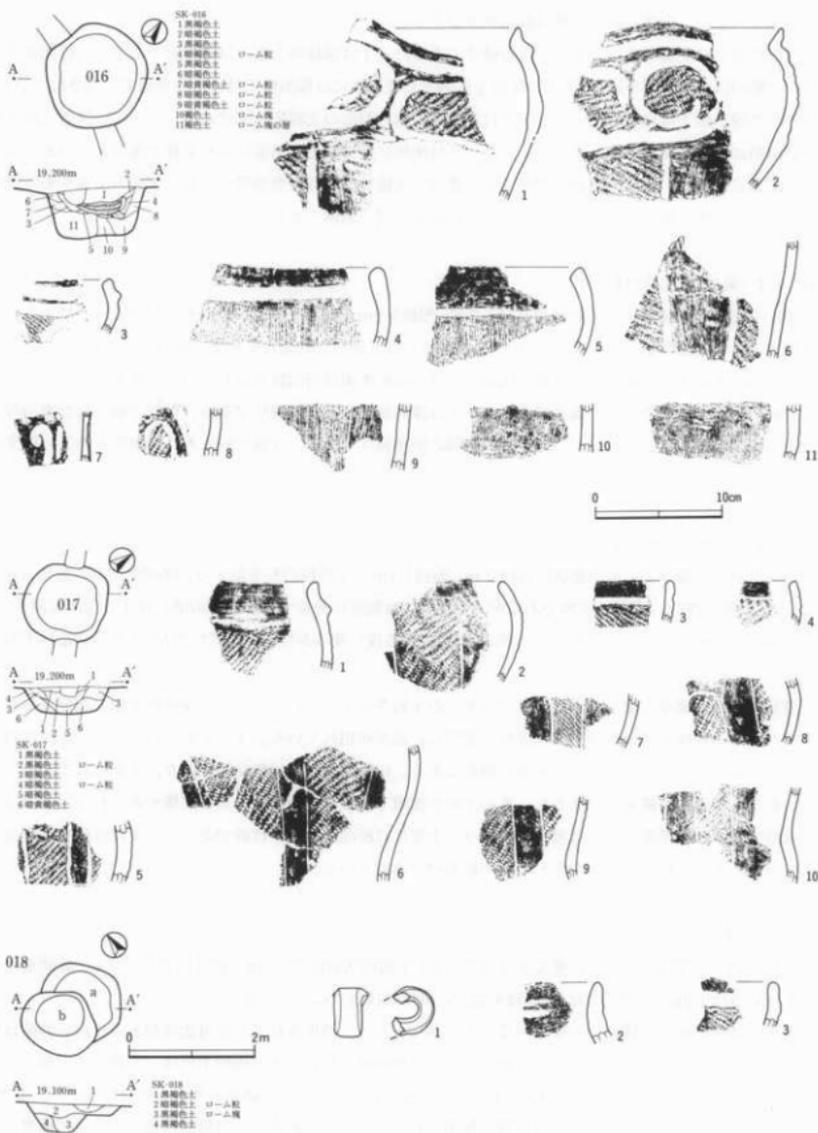
10F-75区に位置する。平面形状は長径2m, 短径1.7mの不整楕円形を呈する。確認面からの掘り込みは0.1mと非常に浅い。底部は平坦であるが、全体的には鍋底状を呈する。西側の壁に接する箇所に深さ0.4mを測る柱穴様の窪みと南側壁近くに深さ0.2mを測る浅い窪みが検出されているが、性格等詳細は不明である。

攪乱を受け上部を欠損する土坑としては多くの土器を出土している。すべて深鉢形土器の部分である。いずれも二次焼成を受け淡黄色又は赤色に変色し、器面が粗れている。1～6のうち4を除く5片は同一個体である。1～3は口縁部、5・6は胴部である。口唇部直下には無文帯が巡り、下部には太く浅い沈線が走る。胴部には縄文が施文され、その上から沈線で挟まれた磨消帯による文様が施されている。4は口縁部である。口唇部直下には無文帯が巡り、下部には断面三角形の稜線が走る。以下には縄文が施文されている。また、稜線上には三角形の小突起が付けられている。

#### SK-016 (第47図, 図版15・30)

11F-05区に位置する。一部に攪乱を受けている。平面形状は直径1.7mを測り円形を呈する。確認面からの掘り込みは0.8mとやや深い。底部は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

本土坑は土層断面の観察から深さを変えて二回にわたって使用されていた可能性がある。古い時期は深い方で、破棄後直ちに立川ロームを主体とする土で埋め戻された。その後約半分ほどの深さまで掘り下げて再び(新しく)使用したことが考えられる。なぜなら、新しい土坑の底部と考えられる位置からマガキ・オキアサリ・ハマグリを主体とする貝層が検出されているからである。この貝殻は新しい土坑が破棄されてまもなく投棄され始めたと考えられる、このことは覆土の断面観察及び貝層の堆積状況から伺うことが出来る。



第47图 016·017·018号土坑

遺物はそれほど多くはなくすべて破片で本来の形状が復元できるものはなかった。出土層位は覆土上層及び貝層中からほとんどであった。1～5は口縁部、6～11は胴部の破片の拓影図である。1・2は同一個体で大型の深鉢形土器である。口唇部直下には太く浅い沈線が巡る。口縁部は隆帯により楕円形の区画を作り内側は縄文を施している。胴部は沈線に挟まれた幅の広い磨消帯が垂下する。3は深鉢形土器の口縁部である。小破片であるが文様の特徴は1・2と同様であると考えられる。4・5は大型の深鉢形土器の口縁部である。口唇部直下に無文帯が巡り、下部に沈線が走る。以下胴部には櫛歯状工具による条線文が施されている。磨消等の垂下は見られない。6は1・2と同一個体の胴部破片である。沈線に挟まれた幅の広い磨消帯が見られる。7は胴部の小破片である。蕨手状に施された沈線が見られる。8は胴部の小破片である。沈線と磨消帯による文様と縄文が見られる。9～11は胴部の破片で、4・5と同様に櫛歯状工具による条線のみが施文されている。

#### SK-017 (第47図, 図版15・30)

11F-16区に位置する。上部の一部に攪乱を受けている。平面形状は直径1.4mほどの円形を呈する。確認面からの掘り込みは0.4mとそれほど深くはない。底部は平坦で壁は外へ向かってやや開き気味に立ち上がる。

遺物はそれほど多くはないが出土している。土器はすべて小破片であった。1～4は口縁部、5～10は胴部の破片である。1は口唇部直下に無文帯が巡り、下部に断面三角形の隆線が横走する。以下は縄文が施されている。2～4はも口唇部直下に無文帯が巡るのは1と同様であるが下部には隆線ではなく沈線が横走する。3・4は無文帯以下は縄文のみであるが2は細い沈線に囲まれた磨消帯が垂下する。5～6は地文である縄文の上から沈線に挟まれた磨消帯が垂下している。

#### SK-018 (第47図, 図版31)

11F-14区に位置する。2基の土坑が重複しておりここではa・bと呼称し区別する。

a：平面形状は直径1.3mの円形を呈すると考えられる。確認面からの掘り込みは0.2mと比較的浅い。底部は平坦で壁はやや外側に開き気味に立ち上がる。

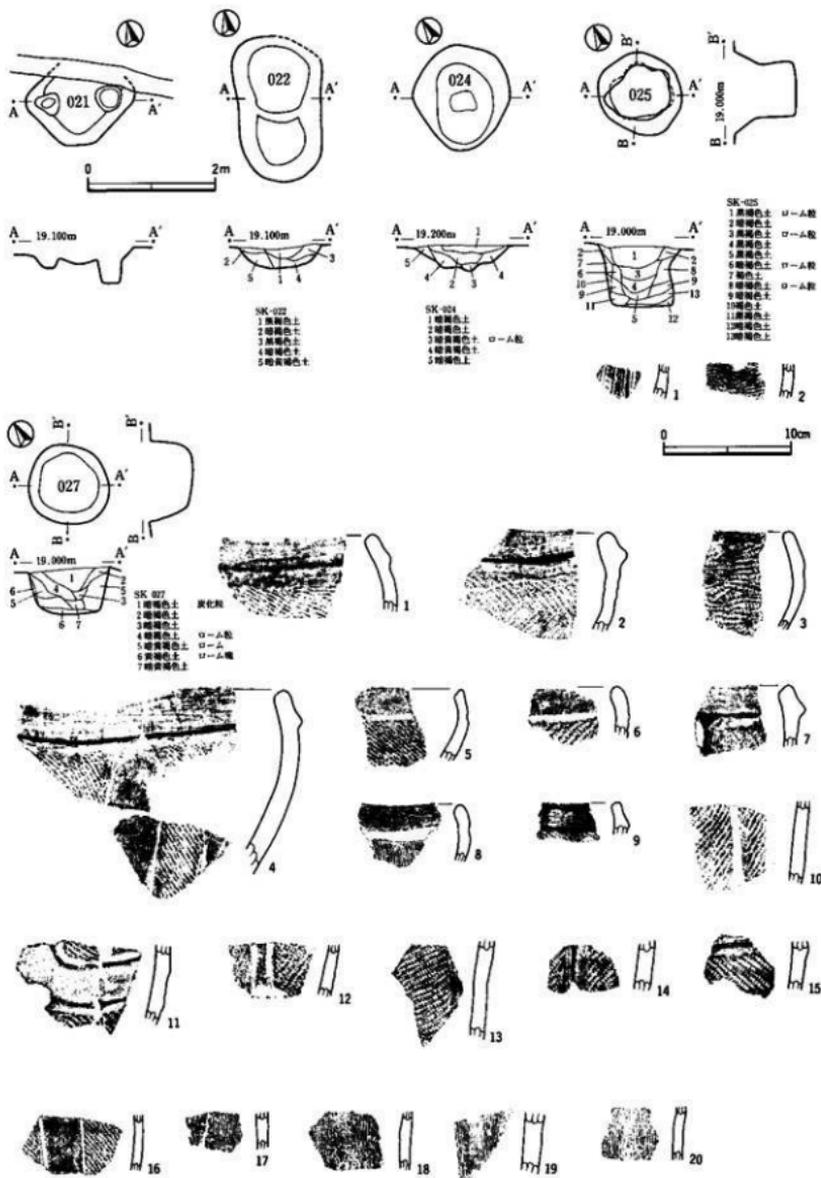
b：平面形状は長径1.2m、短径1mほどの楕円形を呈する。確認面からの掘り込みは0.5mを測る。底部はやや鍋底状を呈し、壁はやや外側へ開き気味に立ち上がる。

新旧関係は土層断面図から判断するとaがbより新しい。

遺物の出土はaから僅かに見られたが、bからの出土はなかった。1は橋状把手の部分である。橋状部には文様は付けられていない。2は口縁部である。口唇部直下に巡る無文帯である。3も2と同様であるが無文帯以下には縄文が施されている。

#### SK-021 (第48図)

11F-04区に位置する。北東部に攪乱により欠損している。平面形状は長辺1.6m、短辺1.3mの隅丸形状を呈すると考えられる。確認面からの掘り込みは0.3mを測る。底部は平坦で壁はやや外側へ開き気味に立ち上がる。東西の角付近には壁に接して柱穴が2本検出された。遺物の出土は見られたが、いずれも小破片であり図示できるものはなかった。



第48图 021·022·024·025·027号土坑

SK-022 (第48図, 図版15)

10F-96区に位置する。一部攪乱を受けているが、平面形状は長径2.3m、短径1.3mの楕円形を呈する。確認面からの掘り込みは最大で0.4mほどである。底部は平坦だが長軸の中央付近でわずかな段差を有する。遺物の出土は見られたが、いずれも小破片であり図示できるものはなかった。

SK-024 (第48図, 図版15)

11F-50区に位置する。平面形状は直径1.6mの円形を呈する。確認面からの掘り込みは最大0.3mを測る。底部は鍋底状を呈し壁は外へ広がりがながら立ち上がる。底部中央付近に深さ0.2mほどの浅い柱穴状の穴が検出されている。遺物の出土は見られたが、いずれも小破片であり図示できるものはなかった。

SK-025 (第48図, 図版31)

10F-41区に位置する。平面形状は直径1.3mの円形を呈する。確認面からの掘り込みは1mを測り深い。底部は平坦で、壁は垂直に立ち上がり、断面形状は筒状を呈する。遺物の出土は見られたが、いずれも小破片であり図示できるものは数少なかった。いずれも胴部の小破片である。1は櫛歯様工具による条線文、2は縄文が施されている。

SK-026 (第49図, 図版15)

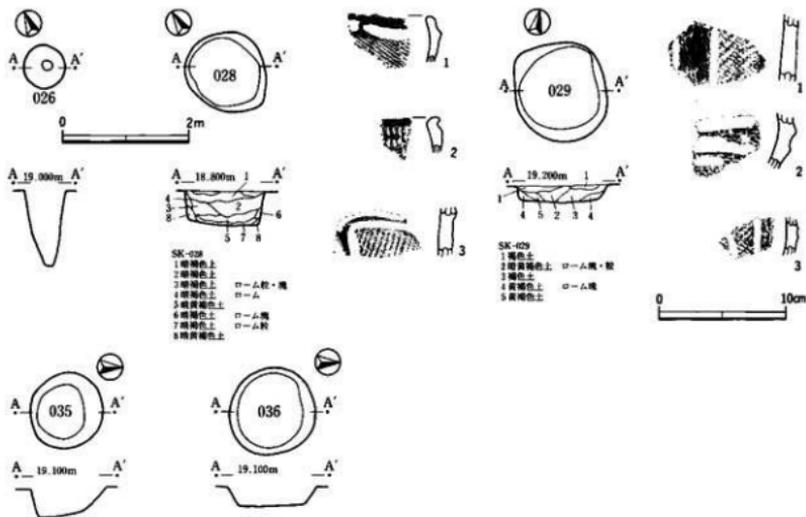
10E-47区に位置する。平面形状は直径0.7mの円形を呈する。確認面から底部までの深さは1.2mを測る。底部は口径に比べ小さく断面形状は逆三角形を示す。大きさなどほかの土坑と比べても小さく性格など詳細は不明である。遺物の出土は見られなかった。

SK-027 (第48図, 図版15・31)

10F-84区に位置する。平面形状は直径1.3mの円形を呈する。確認面からの掘り込みは0.7mを測る。底部は小さな凹凸があり鍋底状を呈するが、全体としては平らである。壁はやや外側へ広がりがながらほぼ垂直に立ち上がる。遺物の出土は上層からが多く、それも中央付近にややまとまって見られた。破片はいずれも深鉢形土器である。1～9は口縁部付近、10～20は胴部の破片である。1・2は口唇部直下に無文帯が巡り、下部に隆帯が巡り、それ以下に施されている縄文とを分けている。3は口唇部直下から縄文のみを施文している。4は大型の深鉢形土器の口縁部付近である。口縁は緩やかな波状を呈する。口唇部直下には無文帯が巡り下部には断面三角形の隆帯が横走する。以下には細い沈線で囲まれた磨消帯で何らかの文様を描き、その間に縄文が埋めている。5・6・8はともに口唇部直下に無文帯が巡り下部には沈線が横走し以下の文様帯と区分している。5・6は以下に縄文が、8は櫛歯様工具による条線が施されている。7は隆帯と浅い沈線により口縁部に文様帯を区画している。9は口唇部の無文帯部分である。11～15は稜線に挟まれた磨消帯による文様と縄文との組み合わせ。16は沈線に挟まれた磨消帯による文様と縄文の組み合わせ。17～20は同一個体と考えられ、櫛歯様工具による条線が縦方向に施されている。

SK-028 (第49図, 図版15・31)

10E-18区に位置する。平面形状は直径1.3mの円形を呈する。確認面からの掘り込みは0.5mを測る。底



第49図 026・028・029・035・036号土坑

部は平坦で、壁はほぼ直角に立ち上がる。遺物の出土は僅かであったが見られた。いずれも小破片であった。1は口縁部である。ちょうど波状口縁の波頂部であるが突起状にのびたか所が欠けている。口唇部直下には幅広の沈線が巡り、以下には縄文が施されている。口縁部の沈線は連続せず、波頂部付近で一端途切れる様である。2も口縁部である。口唇部直下には2段の爪形の刺突が施されている。3は深鉢形土器の胴部である。隆帯と沈線によって区画が行われ、内側を縄文で施文している。

SK-029 (第49図, 図版16・32)

10F-98区に位置する。竪穴住居跡SI-005に近接する。長径1.6m, 短径1.4mを測る円形に近い楕円形を呈する。確認面からの掘り込みは0.2mと比較的浅い。底部は平坦で、壁は緩やかに外へ広がり気味に立ち上がる。遺物の出土は僅かであったが見られた。いずれも小破片であった。1は深鉢形土器の胴部である。沈線と幅広の磨消帯そして縄文が見られる。2は口縁部付近である。沈線と隆帯との組み合わせによる区画が行われている。縄文も見られる。3は胴部破片である。文様の特徴は1と同様である。

SK-035 (第49図, 図版16)

11E-15区に位置する。平面形状は直径1.2mの円形を呈する。確認面からの掘り込みは0.3mを測る。底部は鍋底状で、壁は緩やかに外へ広がりながら立ち上がる。遺物の出土はあったがすべて小破片で極めて少なかった。

SK-036 (第49図, 図版16)

11E-15区に位置する。平面形状は直径1.4mの円形を呈する。確認面からの掘り込みは0.4mを測る。底部は鍋底状で、壁は緩やかに外へ広がりながら立ち上がる。遺物の出土はなかった。

SK-037 (第50図, 図版16)

11E-05区に位置する。平面形状は直径1mの円形を呈する。確認面からの掘り込みは0.2mと比較的浅い。底部は鍋底状で、壁は緩やかに外へ広がりながら立ち上がる。遺物の出土はなかった。

SK-039 (第50図, 図版16)

11E-06区に位置する。平面形状は長径1.3m, 短径1mの楕円形を呈する。確認面からの掘り込みは0.3mを測る。底部は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物の出土はなかった。

SK-040 (第50図, 図版16)

11E-06区に位置する。SK-039号土坑の南側に接するように並ぶ。直径1mの円形を呈する。確認面からの掘り込みは0.3mを測る。底部は鍋底状で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物の出土はなかった。

SK-041 (第50図, 図版16)

11E-18区に位置する。平面形状は直径1.4mほどの円形を呈する。確認面からの掘り込みは0.3mを測る。底部は鍋底状で細かな凹凸が多い、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物の出土はなかった。

SK-042 (第50図, 図版16)

10E-98区に位置する。平面形状は直径1.5mの円形を呈する。確認面からの掘り込みは0.5mとやや深い。底部は鍋底状で壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物の出土はあったがすべて小破片で極めて少なかった。

SK-043 (第50図, 図版16)

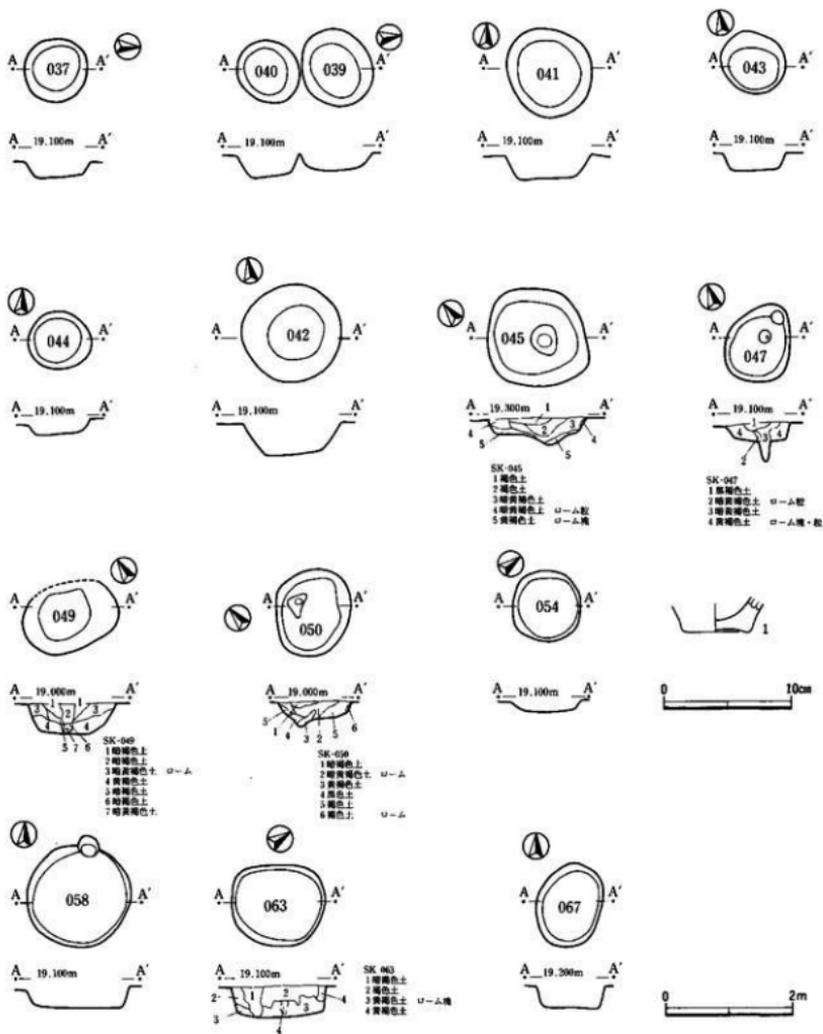
11E-18区に位置する。平面形状は直径1mの円形を呈する。確認面からの掘り込みは0.3mを測る。底部は鍋底状で細かな凹凸を有する、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物の出土はあったがすべて小破片で極めて少なかった。

SK-044 (第50図, 図版16)

11E-19区に位置する。平面形状は直径1mの円形を呈する。確認面からの掘り込みは0.2mと比較的浅い。底部はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。遺物の出土はなかった。

SK-045 (第50図, 図版17)

12E-82区に位置する。平面形状は直径1.6mの円形を呈すると考える。確認面からの掘り込みは0.2mと比較的浅い。底部は鍋底状で非常に浅い凹みを有する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物の出土はあったがすべて小破片で極めて少なかった。



第50图 037·039·040·041·042·043·044·045·047·049·050·054·058·063·067号土坑

SK-046 (第51図, 図版17・31・32)

12E-94区に位置する。平面形状は直径1.2mの円形を呈する。確認面からの掘り込みは0.4mを測る。底部は平坦で、壁はほぼ垂直にまっすぐ立ち上がる。

遺物は覆土の上層・中層を中心に大半が出土している。すべて破片で接合はするものの本来の形状が分かるほど復元できたものはなかった。1～10は深鉢形土器の口縁付近, 11～19は胴部の破片である。1は平縁の深鉢形土器の口縁から胴部下半である。地文である縄文の上から口唇部直下で幅の狭い無文帯と一体化する沈線に挟まれた磨消帯が、「冂」字状の文様を連続して施している。結果的には磨消帯に囲まれた区画のなかに縄文が残ることになる。また、器面には煤が頸部を中心にかなり広い範囲で付着する。2・3は接合しないが1と同一個体である。4は口唇部直下に狭い無文帯が巡り、下部に幅のやや広い沈線が横走る。以下には縄文を施している。5は口縁部を沈線と隆帯によって区画している。6は5と同様に沈線と隆帯により文様を施している。7は9と同一個体である。口縁は波状を呈する深鉢形土器である。地文である縄文の上を口唇部直下から垂下する平行する隆帯と沈線による文様を施している。8は10と同一個体である。地文である縄文の上を隆帯とそれを挟む沈線により口縁部に渦巻き状の文様を施している。11・12は地文である縄文の上から沈線で挟まれた隆帯によって文様を描いている。13は地文である縄文の上から沈線で文様を描いている。沈線による蕨手状の文様が見える。14地文である縄文の上から沈線で挟まれた磨消帯によって文様を施している。15は大型の深鉢形土器の胴部である。地文である縄文の上から3本の沈線で挟まれた2本の磨消帯がほぼ一定の間隔を持って垂下している。本破片は深鉢形土器の胴部下半部でほぼ半周する。ちょうど粘土の輪積痕で割れている。この土器は内外面とも熱を受け変色し、部分によって煤の付着や器面が脆くなっている部分もある。また、土器下端部は輪積痕が摩耗し丸みを帯びていることを考えるとしばらく炉に埋設されていたことが考えられる。16は地文である縄文の上から隆帯とそれを挟む沈線により文様を描いている。17は地文である縄文の上から複数の沈線と磨消帯の組み合わせで文様を施している。18・19は櫛歯様工具による縦方向の条線文が施されている。

SK-047 (第50図, 図版17)

12E-84区に位置する。平面形状は長径1.2m, 短径1mの卵形を呈する。確認面からの掘り込みは0.3mを測り比較的浅い。底部は鍋底状を示す、壁はほぼ垂直にまっすぐ立ち上がる。また、土坑北側壁寄りにもいずれも深さが0.4mを越える柱穴が2本、ほぼ東西に並んで検出された。

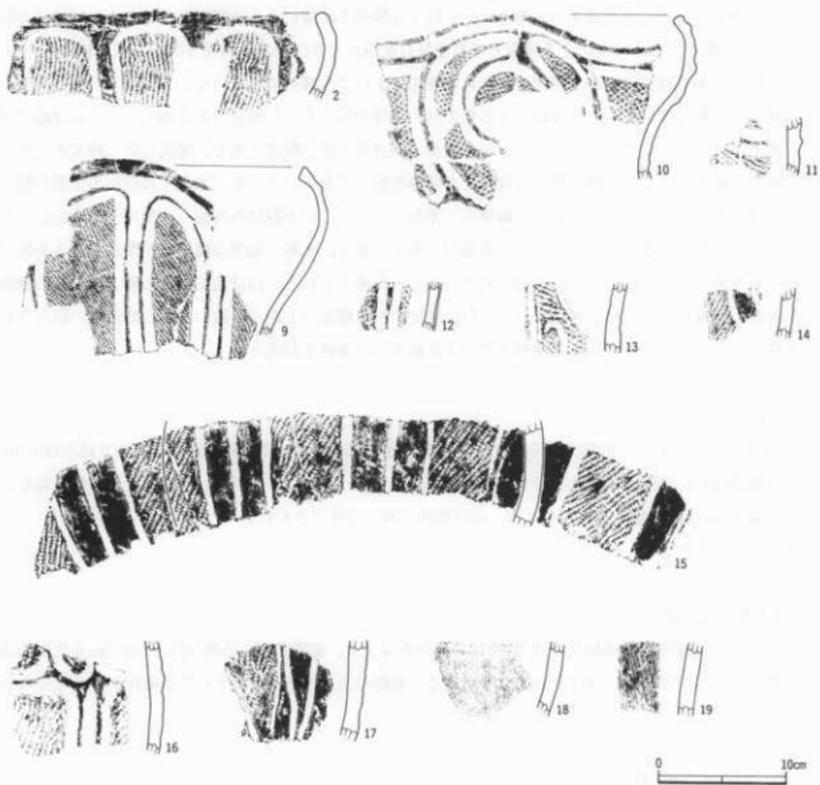
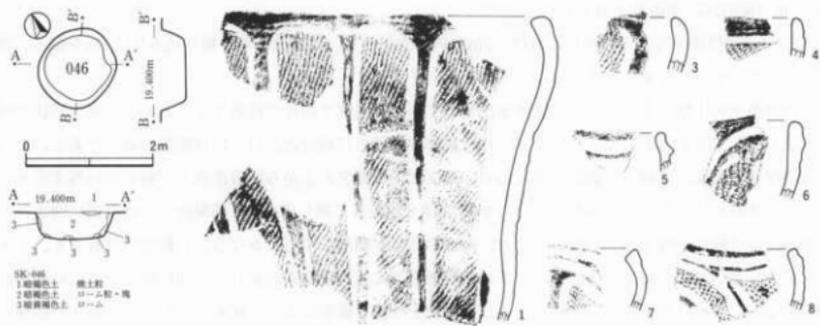
遺物の出土はなかった。

SK-054 (第50図, 図版18)

12E-41区に位置する。平面形状は直径1.1mの円形を呈する。確認面からの掘り込みは0.2mと比較的浅い。底部はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物の出土はあったがすべて小破片で極めて少なかった。

SK-057 (第50図, 図版18・32)

11E-90区に位置する。平面形状は長径1.3m, 短径1.1mの楕円形を呈する。確認面からの掘り込みは0.2mと比較的浅いが、遺物が遺構検出面よりも上から確認されており、本来はもっと深かったと考えられる。



第51图 046号土坑

底部は鍋底状を呈する。底部中央付近には深さ10cmほどの凹みが検出されている。本土坑に伴うものと考えられる。

遺物は遺構の中央付近を中心に集中して出土している。遺物の内容は炭化物(材)も若干混じるが土器片と礫・礫片が二分するように出土している。総量としても今回の調査で検出された土坑のなかでも最も多い方である。第52図には出土土器の拓影図・実測図を示した。1～6は口縁部、7～12は胴部、13は底部である。1は波状口縁の波頂部である。口唇部内側は、有段になっている。口縁は「X」字状に接する隆線で区画が行われ、その内側には連続した角押文を3本施している。また、下部隆線の両側にはヘラ先による刺突が交互に加えられ見えた目波状の隆線となっている。波頂部を平坦にしてヘラ先で刻みを3本加えている。2は平縁の口縁に「X」字状に接する隆線の区画が行われ、その内側には連続した角押文を3本施している。3は波状口縁の谷部付近である。文様は1と同様である。4は2と同様であるが、区画内の角押文が2本になっている。5は波状口縁のは頂部である。隆線により区画された内側には隆線に沿った角押文に加えヘラ先による波形の連続押し引き文が加えられている。6は口縁部付近である。摩擦が激しく詳細は分からないが、隆線により区画が行われている。また、半截竹管による連続刺突が行われている。7・8・11は胴部で、粘土の輪積痕を残している。9は胴部の破片である。隆線が付けられ、その上から両側にヘラ先による刺突が交互に加えられ見えた目波状の隆線となっている。10は胴部の破片で角押文が連続して刺突されてる。12は口縁部付近である。「X」字状に接する隆線で区画が行われ、その内側に沿って連続した角押文を施している。13は底部である。径が大きくほぼ垂直に立ち上がっている。本土坑から検出された土器群は本遺跡の主体的な土器群より先行する阿玉台式土器である。

#### SK-058 (第50図, 図版18)

12E-02地区に位置する。平面形状は直径1.6mの円形を呈する。確認面からの掘り込みは0.3mを測る。底部はほぼ平坦であるが細かな凹凸を有する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。また、北の壁に接して柱穴が検出されているが、本土坑のものではないと考えられる。遺物の出土はなかった。

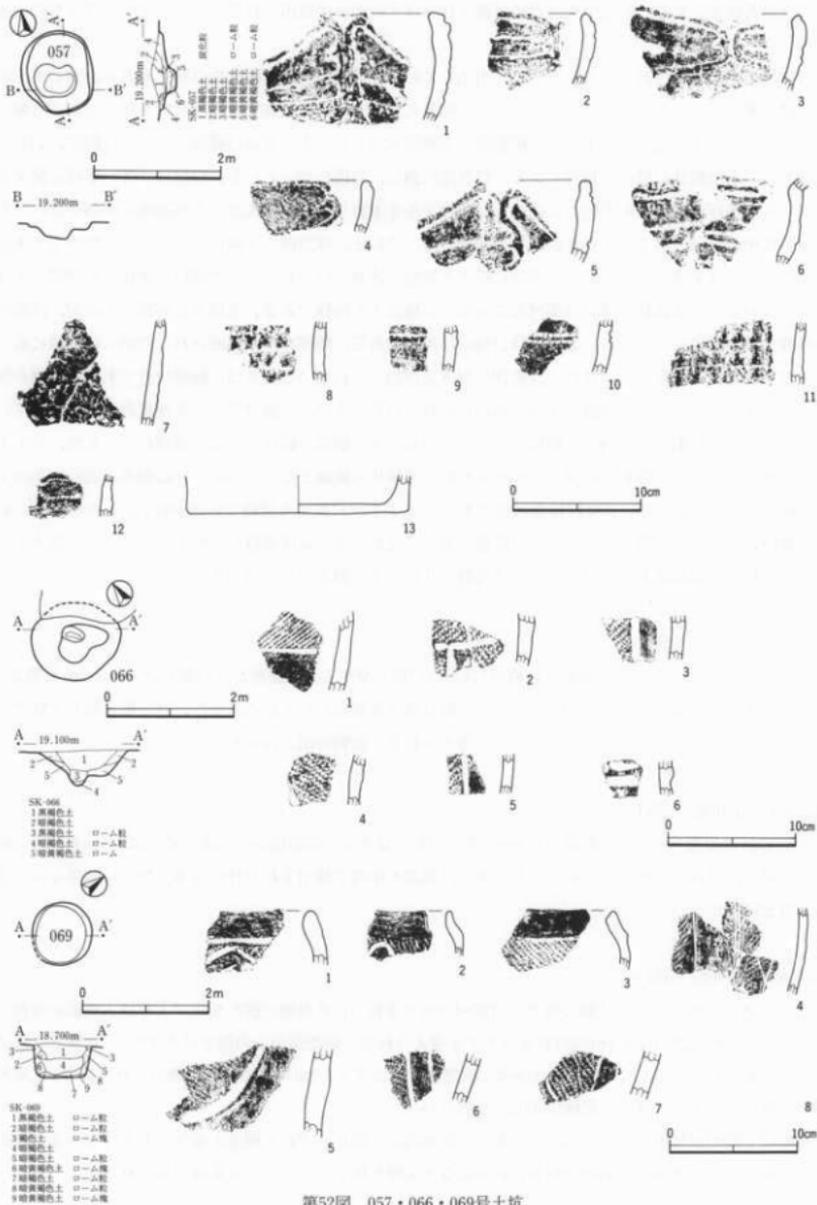
#### SK-063 (第50図, 図版18)

12E-42区に位置する。平面形状は1.4mの不正円形を呈する。確認面からの掘り込みは0.4mを測る。底部は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。また、底部の南端で検出された柱穴は本土坑とは関係ない。遺物の出土はなかった。

#### SK-066 (第52図, 図版8・32)

10F-51区に位置する。南東側で竪穴住居跡SI-002と重複し、北東側は攪乱を受け上部は広範囲に欠損している。平面形状は直径1.4mの円形を呈すると考えられる。確認面からの掘り込みは0.3mを測る。底部は平坦で壁は外へ広がりがながら立ち上がる。底部北寄りに深さ0.2mほどの柱穴が検出されている。土層断面の観察から本土坑が竪穴住居跡SI-002より新しい。

遺物は土器が少量出土しているのみである。拓影図の土器はいずれも胴部の破片である。1～5は地文である縄文の上に沈線と磨消帯の組み合わせになる文様を施している。6は隆線が見られる。



第52图 057·066·069号土坑



は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。遺物の出土は土器のみでそれほど多くはない、おもに上層からの出土である。1～3は口縁部付近である。いずれも口唇部直下に無文帯が巡る。1は無文帯下部に沈線が横走り以下には縄文を施し上から沈線に挟まれた磨消帯によって文様を加えている。2は無文帯と胴部の縄文との境には段があり断面三角形の隆線状を呈している。3は無文帯と胴部の縄文との境は断面三角形の隆線が施されている。4～7は胴部の破片である。4は地文である縄文の上から細い沈線に挟まれた幅広の磨消帯の文様が施されている。5は隆線に挟まれた磨消帯が施されたあとの空間に縄文を施している。6・7は縄文の上から沈線に挟まれた磨消帯を施している。

#### SK-070 (第53図, 図版19・32)

10F-68区に位置する。上部の多くを削平により欠損している。平面形状は直径1.5mの円形を呈すると考えられる。確認面からの掘り込みは1.3mと非常に深い。底部は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

遺物の出土は残った覆土の上からややまとまって出土している。1は口縁部である。口唇直下には棒状工具の先端を連続して刺突している。以下には沈線、磨消帯、縄文が見られる。2は口縁部である。口唇直下には沈線が横走り、以下には沈線と無文帯の組み合わせにより文様を施している。3～5は胴部の破片である。いずれも隆線に挟まれた磨消帯と縄文の組み合わせによる文様が施されている。6・7は底部である。底部外側は平坦ではあるが中央付近が極めて僅かであるが膨らむ、内側は平坦ではなく球状を呈しており、いずれも深鉢形土器のものと考えられる。

#### SK-071 (第53図, 図版19)

10F-65区に位置する。上部を削平により多くを欠損している。直径1.3mの円形を呈すると考えられる。確認面からの掘り込みは0.4mを測る。底部は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。接して検出された柱穴2本は本土坑のものではない。遺物の出土はなかった。

#### SK-072 (第53図, 図版19)

10F-65区に位置する。平面形状は長径1.5m、短径1.2mの楕円形を呈する。確認面からの掘り込みは0.2mと比較的浅い。底部は平坦で壁は垂直に立ち上がる。遺物の出土は見られたが、すべて小破片の土器でその量は極めて少なかった。

#### SK-073 (第53図, 図版19)

10F-43区に位置する。北東側に攪乱を受け欠損している。平面形状は直径1mの円形を呈すると考えられる。確認面からの掘り込みは0.2mと比較的浅い。底部は鍋底状で壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物の出土はなかった。遺物の出土は見られたが、すべて小破片の土器でその量は極めて少なかった。

#### SK-074 (第53図, 図版19・34)

10F-32区に位置する。南西側の上部は削平を北側は攪乱を受け欠損している。平面形状は直径1mの円形を呈すると考えられる。確認面からの掘り込みは0.5mを測る。底部は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。底部東寄りには浅い柱穴が検出されている。遺物の出土はすべて小破片であった。その量はほんの僅かで

ある。1～4はすべて深鉢形土器の胴部破片である。1は深鉢形土器の頸部付近である。粘土の貼り付けが剥がれた跡が残る。2は櫛歯状工具による縦方向の条線が施されている。3・4は縄文のみが施されている。

#### SK-076 (第54図, 図版19・34)

10F-22区に位置する。削平により上部の多くを欠損している。平面形状は直径1.2mの円形を呈すると考えられる。確認面からの掘り込みは1.1mと深い。底部は平坦で壁は底部付近の一部でやや外へ膨らみわずかに袋状を呈するが、上部は垂直に立ち上がる。本土坑は本来はもう少し深かったと考えられる。また、土層断面の観察から、検出された覆土の下半分ほどはやや大きめのロームの塊が非常に多く混じり、人為的に埋戻している様子が見られる、中ほどで底部を再度形成して土坑を再使用した可能性が考えられる。

確認面近く中央付近の覆土中より破砕されたハマグリの小規模な堆積が認められた。上部が欠損していることを考えると貝の堆積はもう少しあったのかも知れない。

遺物は覆土上層から大半が出土している。土坑としてはややまとまった量となっている。1～8は口縁部、9～16は胴部の土器拓影図である。1は深鉢形土器の口縁部である。口唇部直下に無文帯が巡り、ちょうど無文帯を跨ぐように櫛状把手が付く。無文帯以下には地文である縄文の上から沈線により区画された磨消帯が施されている。2は口唇部直下には無文帯が巡り、以下には縄文のみが施されている。なお、無文帯と縄文の境に沈線が存在するのには本破片だけでは判断つかない。3・5・6は同一個体である。口唇部直下には無文帯が巡り、下部には稜線が横走する。以下胴部には縄文のみを施している。4はやや大型の深鉢形土器である。口唇部直下には幅の広い無文帯があがめぐる。下部には断面三角形用の稜線が横走する。稜線の上から以下の胴部には縄文のみが施されている。7・8は口唇部直下には無文帯が巡り、下部には幅のある浅い沈線が横走する。以下には縄文を施している。9～11は地文である縄文の上を沈線で挟まれた磨消帯で文様を施している。12～15同一個体である。地文である縄文の上を断面三角形の稜線で挟んだ磨消帯で文様を施している。16は縄文のみが施されている。17・18は底部である。いずれも深鉢形土器のものである。17の外側は平坦ではあるが中央付近でかすかに膨らむ、内側は球状を呈する。18は内外とも底部は平坦である。

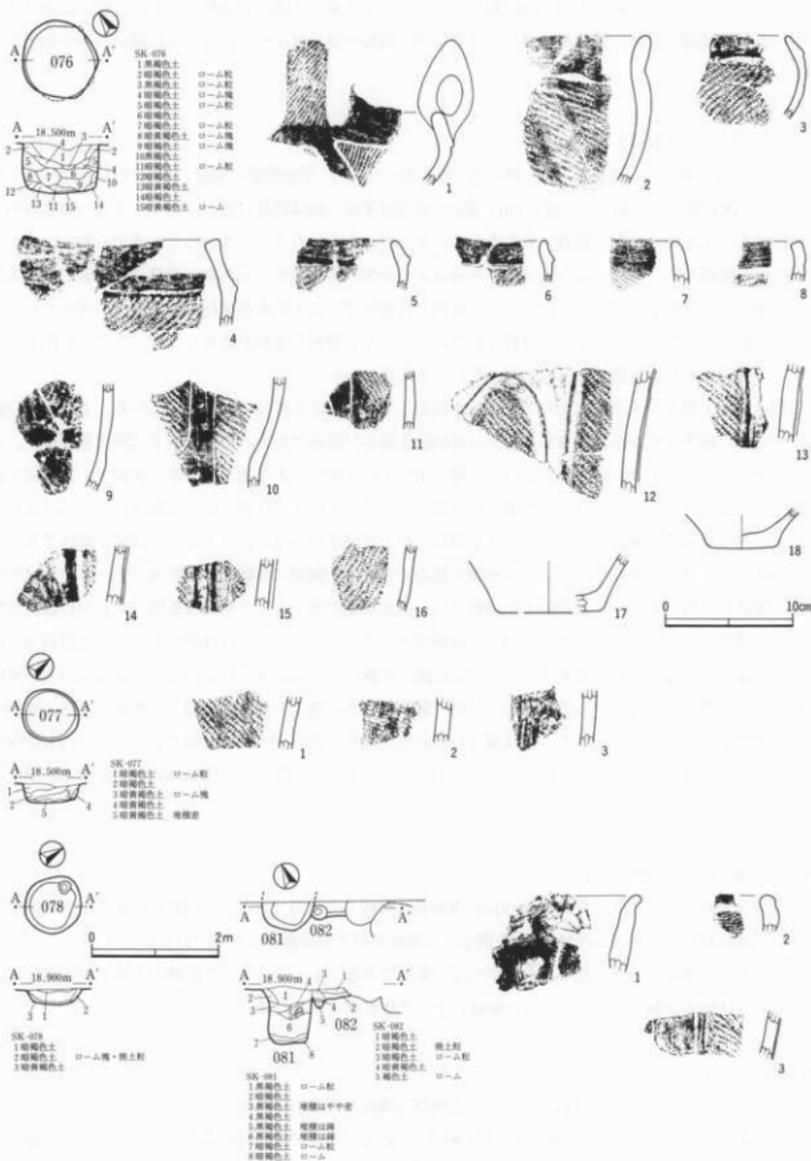
#### SK-077 (第54図, 図版20・34)

10E-18区に位置する。竈穴住居跡SI-010の南東側に隣接して検出された。平面形状は直径1mの円形を呈する。確認面からの掘り込みは0.3mを測る。底部は平坦で壁は垂直に立ち上がる。

遺物の出土は僅かであるが見られた。すべて小破片である。1～3はすべて深鉢形土器の胴部破片である。1・2は縄文が施されている。3は隆線により文様が施されている。

#### SK-078 (第54図, 図版20)

10E-07区に位置する。竈穴住居跡SI-010の北西側に隣接して検出された。平面形状は直径1mの円形を呈する。確認面からの掘り込みは0.2mと比較的浅い。底部は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。北端壁に接するように深さ0.5mの柱穴が検出されている。遺物の出土は見られたが、すべて小破片の土器でその量は極めて少なかった。



第54图 076·077·078·081·082号土坑

#### SK-081 (第54図, 図版20)

10F-24区に位置する。竪穴住居跡SI-011の北西側に近接して検出された。北東側半分は調査区域外に、東側ではSK-082号土坑と重複して上部を欠損している。平面形状は直径0.8mの円形を呈すると考えられる。確認面からの掘り込みは1mと深い。底部は平坦で壁は垂直に立ち上がる。土坑がある程度埋まった段階でオキアサリを主体とする小規模な貝層の堆積が検出されている。遺物の出土は上部からわずかに出土しているのみである。1は波状を呈する口縁の波頂部付近である。沈線が施されているのが見られる。2口縁部である。口唇部直下には沈線で楕円形状の区画が行われ、内側には縄文が施している。3は胴部の破片である。隆線に挟まれた磨消帯とその外側に縄文が施されている

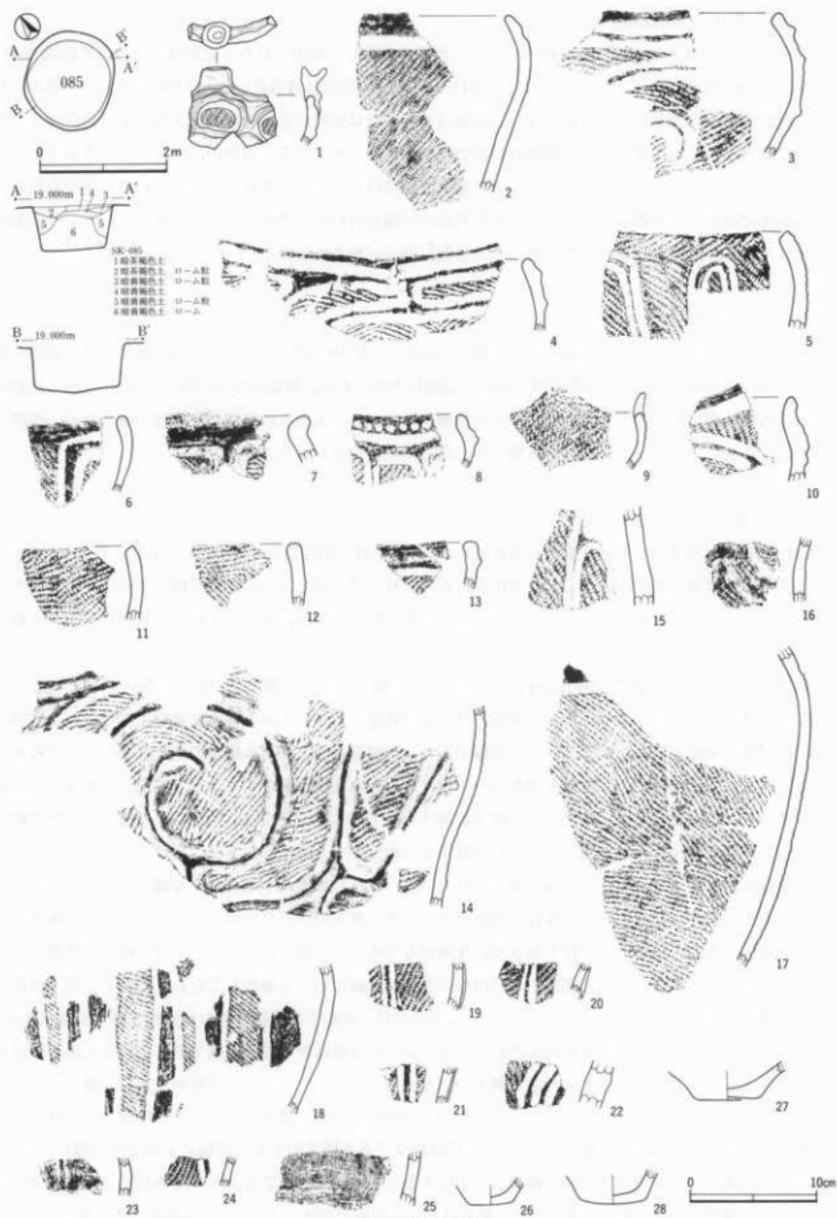
#### SK-082 (第54図, 図版32)

10F-24区に位置する。北側は調査区外区域に、西側で土坑SK-081と重複し、東側は擾乱を受け底部と壁面の一部のみの検出である。平面形状、規模の詳細は不明である。確認面からの掘り込みは0.2mと比較的浅い。底部は平坦だが熱を受けているのかやや硬化している。本土坑の性格の詳細は不明である。遺物の出土は見られたが、すべて小破片の土器でその量は極めて少なかった。

#### SK-085 (第55図, 図版20・33)

11F-12区に位置する。上部に擾乱を受けている。平面形状は直径1.5mの円形を呈すると考えられる。底部は平坦で壁は垂直に立ち上がる。底部中央付近には柱穴状の深さ5cmの凹みが検出されている。また、底部直上からハマグリ・オキアサリを主体とする貝殻が厚さ約50cm、直径約1mの円筒状に堆積して検出された。

遺物の出土は今回の調査で検出された土坑の中では数少ない出土遺物量の多い土坑の一つである。1～13は口縁部付近、14～25は頸部から胴部、26～28は底部である。1は平縁の深鉢形土器である。口唇部には円筒状の突起が付く。口唇部直下に沈線が巡り、口縁部は地文である縄文の上を隆帯により区画を行なっている。2は口唇部直下に無文帯が巡り下部に太く浅い沈線が横走する。以下胴部には縄文のみが施されている。3は口縁部以下地文である縄文が施され、上から粘土紐の貼り付けによる断面三角形の稜線によって文様を加えられている。4は口唇部直下から地文とする縄文が施され、平行する2本の浅くやや太い沈線によって「冂」字状の文様を加えられている。5は口縁部以下地文である縄文が施され、上から隆帯による区画が行われている。6は口唇部直下には狭い無文帯が巡り、以下には地文の縄文が施され、上から非常に浅く、幅の広い平行する2本の沈線がなでるように施されている。7は口縁部に隆帯により区画が行われている。8は口唇部直下には円形の刺突が口縁に沿って連続して行われている。以下は地文である縄文の上を隆帯による区画を行っている。9は波状の突起を口唇部に持つ深鉢形土器の口縁である。突起を含め口唇部直下から縄文が施文されている。10・13は深鉢形土器の口縁である。沈線と隆帯の組み合わせによる文様又は区画を地文である縄文の上から施している。11・12は深鉢形土器の口縁である。口唇部直下より縄文のみが施されている。14は大型の深鉢形土器の口縁部付近である。隆線による渦巻状の文様が描かれ、内側に縄文が施文されている。15は地文である縄文の上から沈線による文様を施している。16は地文の縄文の上から非常に浅く幅の広い平行する2本の沈線がなでるように施されている。17は深鉢形土器の口縁部付近から胴部である。2と接合はしないが同一個体である。18は深鉢形土器の胴部である。



第55图 085号土坑

地文である縄文の上を沈線で挟まれた磨消帯が一定間隔を持って垂下する。19～21は地文である縄文の上を隆線による文様を施している。22・23は隆線に挟まれた磨消帯の文様が施されている。24は15と同様に地文である縄文の上から沈線による文様を施している。25は櫛歯様工具による細い条線を縦方向に施している。26～28は深鉢形土器の底部である。

#### SK-087 (第56図, 図版34)

10E-53区に位置する。平面形状は直径1mの円形を呈する。確認面からの掘り込みは0.5mを測る。底部は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は上部の方から出土した、その量は僅かであった。1は深鉢形土器の上半部の破片である。口唇部直下には無文帯が巡り、下部には断面三角形の隆線が横走する。以下には縄文のみが施されている。

#### SK-093 (第56図)

10E-16区に位置する。平面形状は長径1m、短径0.8mの卵形を呈する。確認面からの掘り込みは0.1mと非常に浅い。底部は平坦である。部から柱穴が検出されているがいずれも0.1mと浅い、北側の大きい柱穴が本土坑に伴うものである。遺物の出土は見られたが、すべて小破片の土器でその量は極めて少なかった。

#### SK-094 (第56図)

10E-25区に位置する。平面形状は長径1.4m、短径1.2mを測る不整の楕円形を呈する。確認面からの掘り込みは0.1mと非常に浅い。底部は平坦である。遺物の出土は見られたが、すべて小破片の土器でその量は極めて少なかった。

#### SK-096 (第56図, 図版20)

10E-05区に位置する。南側で竪穴住居跡SI-012と重複し、東側で攪乱を受け遺構の多くを欠損している。平面形状は直径1.3mの円形を呈すると考えられる。確認面からの掘り込みは0.2mと比較的浅い。底部は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物の出土は見られたが、すべて小破片の土器でその量は僅かであった。

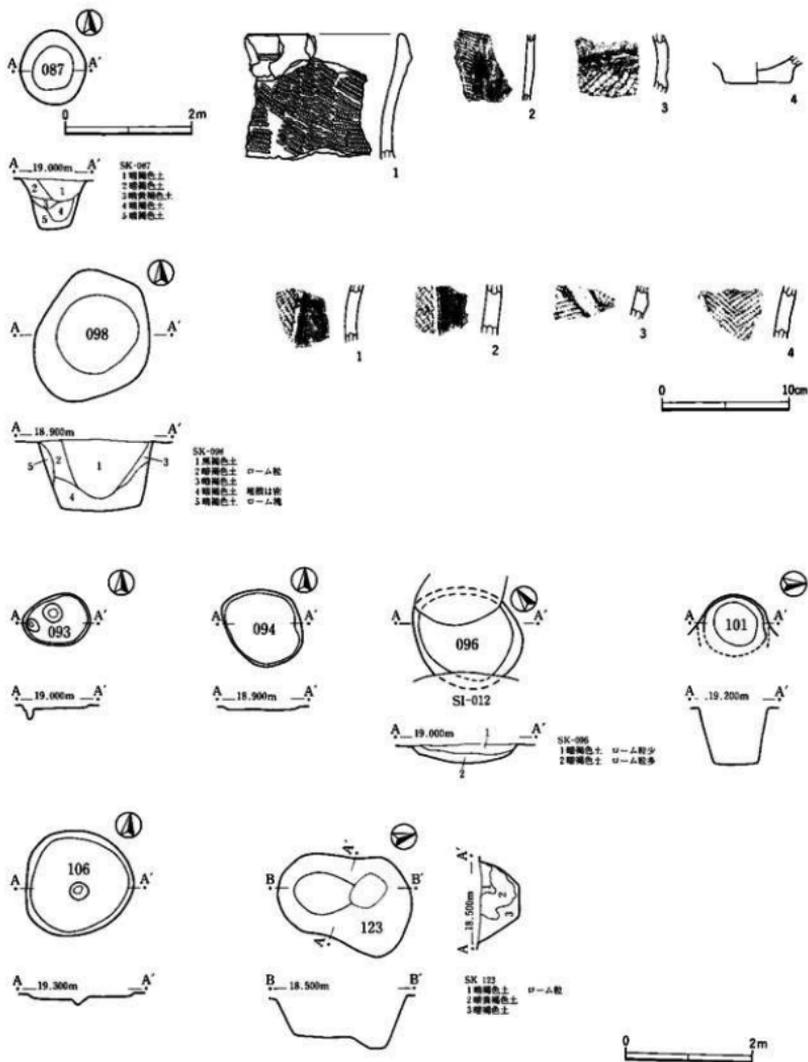
土層断面の観察から本土坑が竪穴住居跡SI-012より新しい。

#### SK-098 (第56図, 図版21・34)

10E-44区に位置する。平面形状は直径0.8mの円形を呈すると考えられる。確認面からの掘り込みは0.5mを測る。底部は平坦で壁は垂直に立ち上がる。遺物の出土は見られたが、すべて小破片の土器でその量は極めて少なかった。1・2は胴部の破片である。磨消帯と縄文が見られる。3・4は縄文が施されている。

#### SK-101 (第56図, 図版21)

10E-32区に位置する。東側に攪乱を受け上部が欠損している。平面形状は直径1mの円形を呈すると考



第56图 087・093・094・096・098・101・106・123号土坑

第6表 縄文土器観察表

遺構	坪図	分類	遺存度	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調(内/外)	備考
SI-001										
SI-001	1	深鉢	1/5	(36.6)	(21.0)	-	砂粒・長石	良	明褐色/暗褐色	
	2	深鉢	1/7	(20.0)	(17.2)	-	砂粒・長石・スコリア	良	黄褐色/黒褐色	
	3	深鉢	1/7	(21.8)	(17.3)	-	砂粒・長石・スコリア	良	灰褐色/にぶい褐色	
	4	深鉢	1/7	(17.0)	(13.3)	-	砂粒・長石	良	黒褐色/赤褐色・黒褐色	
	5	深鉢	1/4	-	(12.4)	4.0	砂粒・長石	良	暗褐色/にぶい赤褐色	
SI-004										
SI-004	1	深鉢	1/5	(12.6)	(12.8)	-	砂粒・長石	良	赤褐色/にぶい黄褐色	
SI-005										
SI-005	2	深鉢	1/4	36.5	36.5	-	砂粒・長石	良	黒褐色/にぶい黄色	
	3	深鉢	1/10	-	-	5.0	砂粒・長石	良	赤黒/にぶい黄褐色	
SI-006										
SI-006	1	深鉢	1/2	15.0	21.0	4.2	砂粒・長石	良	黒色/にぶい褐色	
SI-008										
SI-008	1	深鉢	9/10	25.2	33.6	6.6	砂粒・長石	良	にぶい黄褐色/褐灰色	埋没
	2	有孔脚付	1/20	(7.6)	(14.0)	(6.1)	砂粒・長石	良	黒色/黒褐色	
	3	深鉢	1/20底部	-	-	4.8	砂粒・長石	良	灰褐色/赤褐色	
SI-011										
SI-011	1	深鉢	1/5	(20.0)	(17.6)	-	砂粒・長石	良	黒褐色/褐灰色	
	2	深鉢	2/7	16.6	(13.2)	-	砂粒・長石	良	黒褐色/灰褐色	
	3	深鉢	4/5	15.8	(20.8)	-	砂粒・長石	良	黒褐色/褐灰色	
	19	深鉢	1/10	-	(11.5)	(11.5)	砂粒・長石	良	黒色/にぶい赤褐色	
SI-012										
SI-012	1	深鉢	1/6	(23.2)	(23.3)	-	砂粒・長石	良	にぶい黄褐色/橙・黒褐色	
	2	深鉢	2/7底部	-	(19.4)	4.2	砂粒・長石	良	赤褐色/にぶい赤褐色	

えられる。確認面からの掘り込みは1mと深い。底部は平坦で壁は垂直に立ち上がる。遺物の出土はなかった。

#### SK-106 (第56図, 図版21)

12F-40区に位置する。平面形状は直径1.6mの円形を呈する。確認面からの掘り込みは0.1mと非常に浅い。底部は平坦で、中央付近に深さ0.1mの柱穴と思われる浅い窪みが検出された。遺物の出土はなかった。

#### SK-123 (第56図, 図版21)

12D-02区に位置する。陥穴SK-120の南側で接するようにある。平面形状は長径2.2m, 短径0.6mを測る不整形円形を呈する。確認面からの深さは最大で0.9mとやや深い。底部は平坦で、北側には浅い窪みがある。壁は広がりがながらほぼ直線的に立ち上がる。遺物の出土はなかった。

#### 4) ピット群 (第20図)

今回の調査では、検出確認された竪穴住居跡や土坑とは別に非常に小規模な柱穴様の穴が多数検出された。これらは本来、竪穴住居跡や何らかの遺構に伴う柱穴であった可能性の高いものが多数含まれると考

えられる。しかし、後世の攪乱や重複などが重なり、柱穴と考えられても炉跡が伴っていないか、規則的に配置されていないか、明瞭に単独の竪穴住居跡と判断できないものも多くあった。また、柱穴の検出だけのことが多い掘立柱建物跡ではないかも観察したが、柱穴の並び方などに規則的な要素が見られなかったりと、まとまった一遺構としての判断できないものも多かった。したがって一遺構と判断して個別にその概要を取り上げて述べていくことが難しい状況にある。そこで今回は検出されたピット群の全容を一括したその配置図(1/1,000)として報告することに止めることにした。

## 5) 土製品

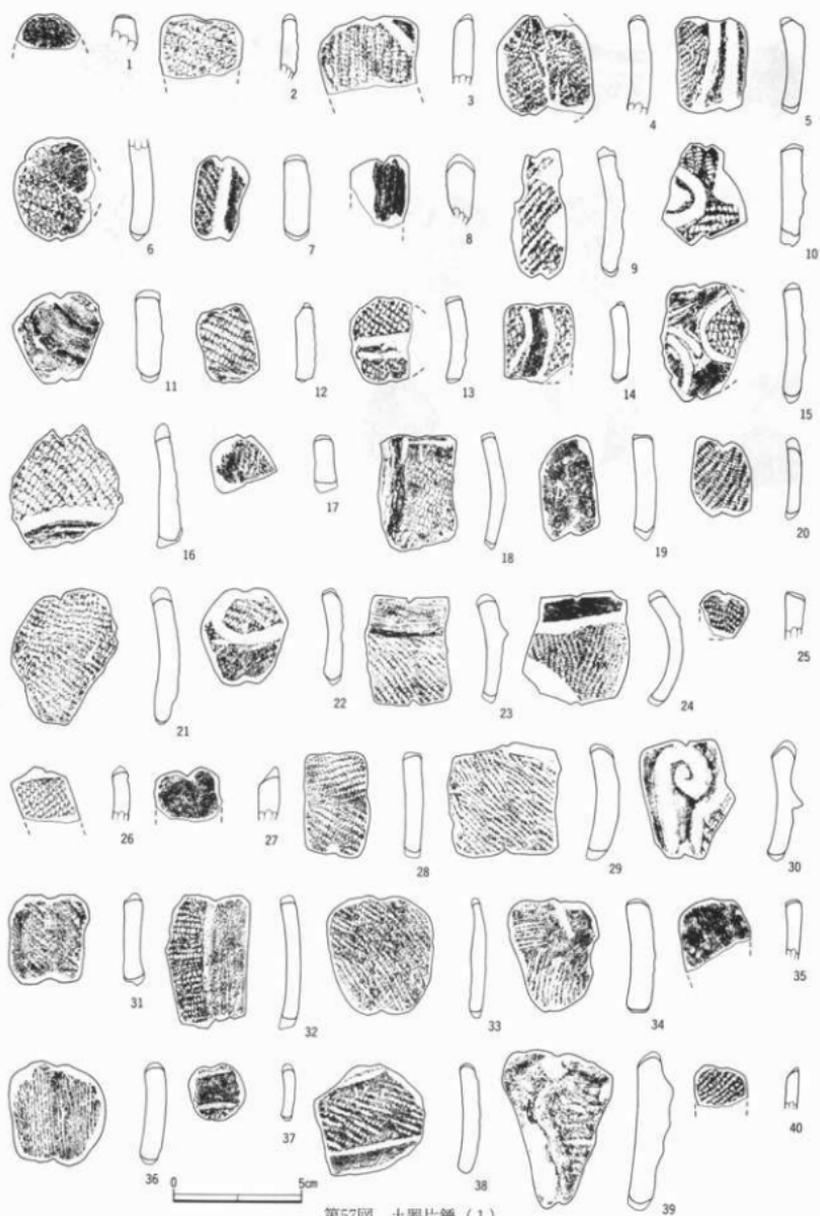
### ア 土器片鍾(第57・58図, 第7表, 図版35・36)

今回の調査で出土し、確認できた土器片鍾は合計で54点であった。そのうち遺構から出土したものの50点、遺構外のグリッドから出土したものの4点であった。次に形状で分類して見ると、切り込みを2か所(一対)以上残している完形品及び完形品に近いもの32点(59%), 切り込みが1か所しか残っていない半欠品が22点(41%)となる。そして出土状況から分類してみると遺構から出土した50点のうち35点(70%)は竪穴住居跡から、残る15点(30%)は土坑からである。出土の多かった遺構を挙げると、最も出土数が多かったのは竪穴住居跡SI-002の13点、次いでO12の10点である。土坑では5点を出土した土坑SK-046が最も多かった。ほかの遺構は1~2点の出土である。

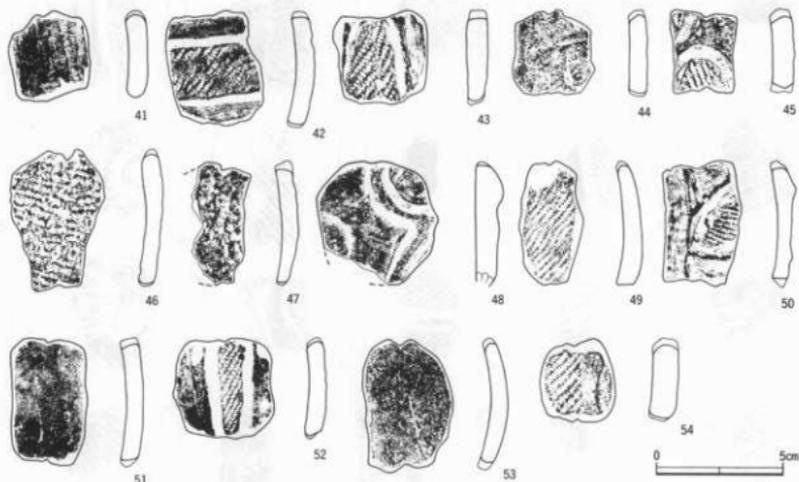
**計量・計測値** 出土した土器片鍾54点すべてについて計測を以下の条件のもと行った。長軸を一対(2か所)の切り込みを結ぶ方向とした、また短軸を長軸に直行する軸とし、四辺(二対一4か所以上)に切り込みを持つ土器片鍾については便宜的に辺が長い方を長軸として計測を行った。切り込みが1か所しか確認できない完形品と判断できないものについては現存する部位の計測を行った。結果は第7表のとおりである。なお、表の中で長短比欄で1.0を越える数値の土器片鍾は見た目横長となる。

次に、切り込みが2か所確認できる完形品又は完形品に近い35点について計測値を見てみることにする。長軸の長さは、最大8.58cm、最小3.38cmを測り、平均は6.13cmとなる。短軸の長さは、最大6.73cm、最小3.28cmを測り、平均は5.23cmとなる。長軸:短軸比では平均0.9となりやや縦長の土器片鍾が多く、一般的な形状と言えるだろう。重量については最も重いもので88.0g、最軽量のもので10.0gを計り、平均46.0gとなる。

**形態** 一般的に土器片鍾は土器の破片を基本的に長方形又は方形に成形して使用している。今回の調査で出土した土器片鍾の形状をみて見ると、基本的には長方形又は方形に近い土器破片を選び、若干の加工を加えて目的にあった形状に成形しているようだ。切り込みも基本的には土器破片の長軸線上に刻んでいる。それは観察表の長軸:短軸比の平均値が0.9であることからもうかがえる。ちなみに長軸・短軸の区分については、一対の切り込みを結ぶ方向を長軸とし、それに直行する方向を短軸として分類した。したがって、すべての土器片鍾の長軸が、必ずしも素材の土器破片の長軸と一致するとは限らない。それは長軸:短軸比で数値が「1.00」未満は長軸が長いことを示し、「1.01」以上は短軸が長い見た目横長の土器片鍾を示していると言える。次に土器片鍾の長軸方向が、本来の器としての土器の正位置に対してどのような部位にあるかを観察して見ることにする。土器の正位置に対して長軸が平行な関係を「1類」、直行する



第57图 土器片(1)



第58図 土器片鍾（2）

位置関係を「II類」、I・IIに当てはまらないものを「III類」として分類した。また、素材の土器破片に加えた加工の状態について破片の断面部いのはほぼ全周に調整を加えて形を整えているものを「a類」、一部だけに調整を加えているものを「b類」、調整を全く加えていないものを「c類」として分類した。結果は観察表の分類欄に示した。II類が最も多く、次にI類が続く。また加工されたものも多く見られるが、そのままであるもの結構多い傾向にあるようだ。

時期・傾向 今回の調査で出土した土器片鍾に使われている土器の時期については、表の時期欄に観察結果を示してあるとおりである。ただし、使われている土器片は時期の特定が容易な口縁部が少ないものの、本遺跡の遺構等から出土している土器との比較検討から判断して決定した。本遺跡の当該期と言える加曾利E III式の土器破片が多く、次いで加曾利E II式と続く、その中で1点だけ阿玉台式の土器片鍾が混じる。使われている土器片の部位は、先にも触れたとおり口縁部以外の土器片が多い。切り込みについては比較的幅広く、深めのものが多く見られる。

#### イ 土製円盤（第59図、図版37）

土器片鍾と同じように土器の破片を利用し、周囲を加工して形状を円形に整えた土製円盤が数は少ないながら出土している。表面が摩滅して文様が確認できないものもあるが、おおむね本遺跡の当該期である縄文時代中期加曾利E式期と同時期のものである。図示した9点のうち7を除く8点は遺構からの出土である。

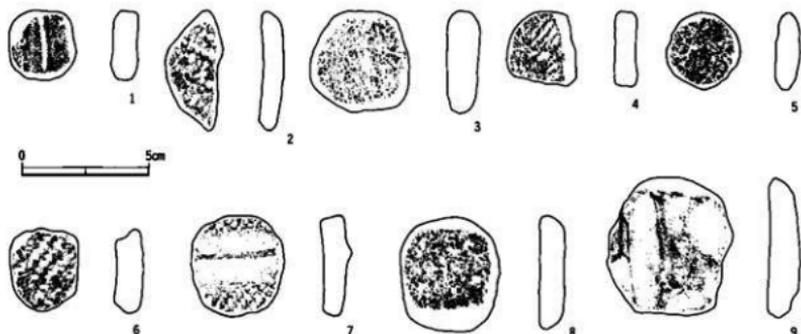
第7表 土器片観察表

No	出土地点	遺構種類	時期	長軸長cm	短軸長cm	長短比	重量g	部位	分類	図版番号	備考
1	SI-001	住居跡	EII?	(3.14)	(2.02)	0.64	(10.7)		Ib	57-1	
2	SI-001	住居跡	EII	(3.73)	(4.80)	1.29	(24.2)		IIa	-2	
3	SI-001	住居跡	EIII	(4.46)	(5.98)	1.34	(42.6)		IIIb	-3	
4	SI-001	住居跡	EIII	(6.10)	(5.66)	0.93	(50.7)		IIa	-4	
5	SI-002	住居跡	EIII	5.71	4.30	0.75	31.4	口縁部	IIa	-5	
6	SI-002	住居跡	EIII	(6.16)	(4.91)	0.80	(45.9)		IIIa	-6	
7	SI-002	住居跡	EIII	(4.98)	(3.18)	0.64	(29.4)		IIa	-7	
8	SI-002	住居跡	EII	(4.08)	(3.55)	0.87	(20.6)	口縁部	IIb	-8	
9	SI-002	住居跡	EIII	(7.65)	(3.22)	0.42	(29.9)		IIa	-9	
10	SI-002	住居跡	EIII	6.05	4.95	0.82	(39.5)		IIc	-10	
11	SI-002	住居跡	EII	5.20	5.25	1.01	41.8		Ib	-11	
12	SI-002	住居跡	EIII	4.61	3.33	0.72	23.6		IIb	-12	
13	SI-002	住居跡	EII	(3.91)	(5.09)	1.30	(24.6)		Ia	-13	
14	SI-002	住居跡	EII	6.90	5.28	0.77	45.80		IIb	-15	直行して一対有り
15	SI-002	住居跡	EIII	4.75	4.15	0.87	24.90		IIa	-14	直行して一対有り
16	SI-002	住居跡	EIII	7.43	6.61	0.89	64.70	口縁部	Ib	-16	直行して一対有り
17	SI-002	住居跡	EIII	(3.41)	(3.95)	1.16	(14.9)		IIIb	-17	
18	SI-005	住居跡	EII	6.93	4.84	0.70	37.9		IIc	-18	
19	SI-005	住居跡	EII	(5.82)	(8.31)	1.43	(30.6)		IIa	-19	
20	SI-007	住居跡	EIII	(2.63)	(6.88)	2.62	(66.0)		IIIb	-21	
21	SI-007	住居跡	EIII	5.60	5.16	0.92	37.5		IIb	-22	
22	SI-008	住居跡	EIII	6.20	4.82	0.78	49.5	口縁部	Ia	-23	
23	SI-008	住居跡	EIII	6.36	6.73	1.06	54.1	口縁部	Ib	-24	
24	SI-012	住居跡	EII	4.58	3.62	0.79	15.1		Ic	-20	
25	SI-012	住居跡	EII	(2.53)	(2.92)	1.15	(9.5)		Ia	-25	
26	SI-012	住居跡	EII	(3.04)	(3.94)	1.30	(17.4)		Ic	-27	
27	SI-012	住居跡	EII	(3.13)	(4.38)	1.40	(14.1)		IIc	-26	
28	SI-012	住居跡	EIII	6.22	4.00	0.64	38.3		Ic	-28	
29	SI-012	住居跡	EIII	6.68	6.82	1.02	88.1	口縁部	Ic	-29	
30	SI-012	住居跡	EII	7.04	5.58	0.79	55.5	口縁部	IIc	-30	
31	SI-012	住居跡	EIII	5.46	4.74	0.87	(35.3)		Ia	-31	
32	SI-012	住居跡	EIII	7.91	4.89	0.62	44.1	口縁部	IIc	-32	
33	SI-012	住居跡	EII	7.02	6.50	0.93	56.5		Ia	-33	丹彩土器利用
34	SI-015	住居跡	EIII	6.64	5.22	0.79	61		IIIc	-34	
35	SI-015	住居跡	EIII	6.29	5.84	0.93	55.2		Ia	-36	
36	SK-012	土坑	EIII	(4.21)	(4.32)	1.03	(15.8)		Ia	-35	
37	SK-017	土坑	EIII	3.38	3.28	0.97	10.0		IIb	-37	
38	SK-017	土坑	EIII	(6.36)	(6.59)	1.04	(47.8)		IIb	-38	丹彩土器利用
39	SK-027	土坑	EIII	9.26	6.48	0.70	101.2	口縁部	IIc	-39	
40	SK-046	土坑	EIII	5.11	4.88	0.95	37.5	口縁部	IIc	58-41	
41	SK-046	土坑	EIII	6.80	5.56	0.82	57.8		IIc	-42	
42	SK-046	土坑	EIII	5.66	5.69	1.01	57.8		IIc	-43	
43	SK-046	土坑	EIII	5.20	4.91	0.94	28.8	口縁部	IIb	-44	
44	SK-046	土坑	EIII	5.00	4.00	0.80	35.1		IIc	-45	
45	SK-070	土坑	?	8.58	5.68	0.66	53.3		IIc	-46	
46	SK-070	土坑	?	(7.33)	(3.46)	0.47	(31.3)	口縁部	IIc	-47	
47	SK-074	土坑	阿玉台	7.40	7.31	0.99	(76.5)		IIIa	-48	
48	SK-081	土坑	EIII	7.37	3.79	0.51	40.1		IIc	-49	
49	SK-085	土坑	EIII	7.47	4.59	0.61	57.2	口縁部	IIc	-50	
50	SK-085	土坑	EII	7.26	4.64	0.64	59.0		IIb	-51	丹彩土器利用
51	E11-15	グリッド	EII	5.97	5.60	0.94	56.9	口縁部	IIa	-52	
52	E12-50	グリッド	EII	(2.55)	(3.04)	1.19	(7.2)		Ic	57-40	
53	F10-32	グリッド	EIII	7.80	5.39	0.69	54.4		IIb	58-53	
54	F10-93	グリッド	EII	4.97	4.46	0.90	41.5		Ib	-54	
	平均対象	32点		6.13	5.23	0.90	46.0				
	最大対象			8.58	6.73	1.02	88.1				
	最小対象			3.38	3.28	0.51	10.0				

\*長軸長及び短軸長の(数字)は土器片の一部が欠損しているため現存値を記した。また重量も同様である。

\*長軸及び短軸の分類は、対の切り込みを結ぶ方向を長軸とし、それに直行する方向を短軸とした。

\*部位欄で、特に記入がないものは土器の割部破片を用いているものである。



第59図 土製円盤

## 6) 石製品

### ア 石鏃 (第60図, 第8表, 図版37)

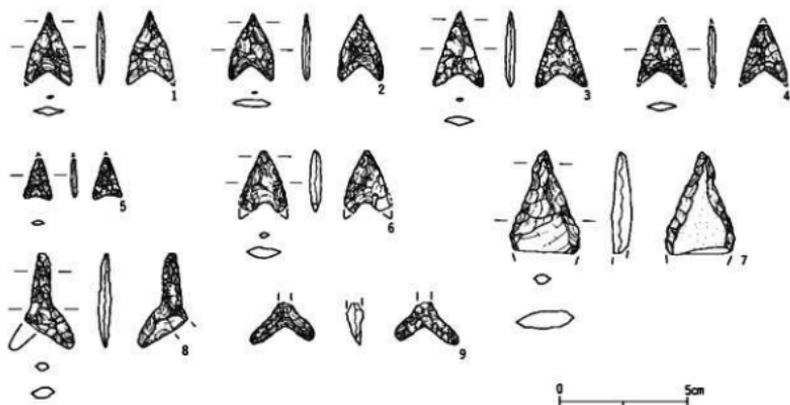
本遺跡からは9点の石鏃が出土している。すべてが遺構からの出土である。石材について見るとチャート製が7点と多く、ほかに黒曜石製が1点、砂岩製が1点である。形状を見るとすべて無茎石鏃に分類され、石鏃は抉りが浅い石鏃1点(5)と抉りが深い石鏃(7点)とに細分される。5、6は脚が長く細く作られ、刃先を含めるとプロペラ状を呈する。なお、7の詳細は脚部付近を欠損しており不明である。しかし、ここでは石鏃として分類したが形状及び調整から石鏃の可能性も十分に考えられる。

### イ 石斧 (第61図, 第9表, 図版37)

石斧類は、破片を含めても4点と出土は少なく、完形品は2点でほかは破片である。1は分銅形の打製石斧である。片面には礫原面が残り、抉り部分は双方とも摩滅して丸みを帯びている。2は短冊形の打製石斧である。両面には礫原面を残していることから手ごろな大きさの礫を加工して作られたものである。刃部片面は磨製石斧の刃部を思わせるほどに丁寧に磨かれている。ただし、この磨きが両面であったかもう一方は使用によると思われる刃こぼれがあり確認できない。また、刃部付近の両側片は摩滅して丸みを帯びている。3は打製石斧の胴部の片面だけの破片である。形状など詳細は不明。4は定角式の磨製石斧である。刃部を含め多くが失われている。表面は丁寧に磨かれ面取りも明確に見える。また、残る角の一方は熱を受け淡黄色に変色し、脆くなっている。

### ウ 磨石・凹石・敲石 (第61・62図, 第9表, 図版38・39)

5はやや扁平な三角形状を示す礫である。それぞれの角には敲打による細かな凹凸が見られ、若干ではあるが平坦になっている。また、半面は被熱し明褐色となっている。6は扁平な長楕円形を呈する礫である。長軸の両端は敲打による細かな凹凸がみられる。7はやや扁平な楕円形を呈する礫である。長軸の両端は敲打による使用痕が広く見られる。8は扁平な不整形の礫である。長軸の一方には使用によると思われる細かな凹凸や剝離が見られる。9は厚みのある円礫である。縁部には三か所敲打による小さな凹

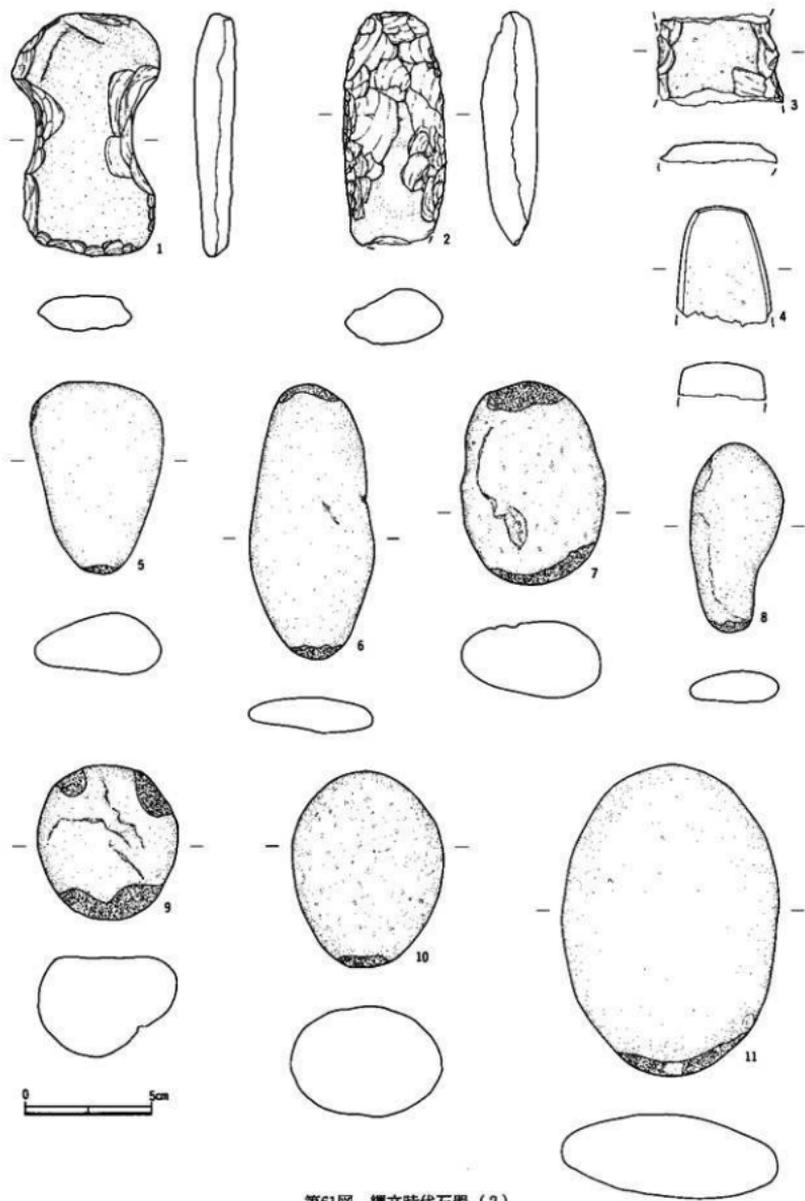


第60図 縄文時代石器 (1)

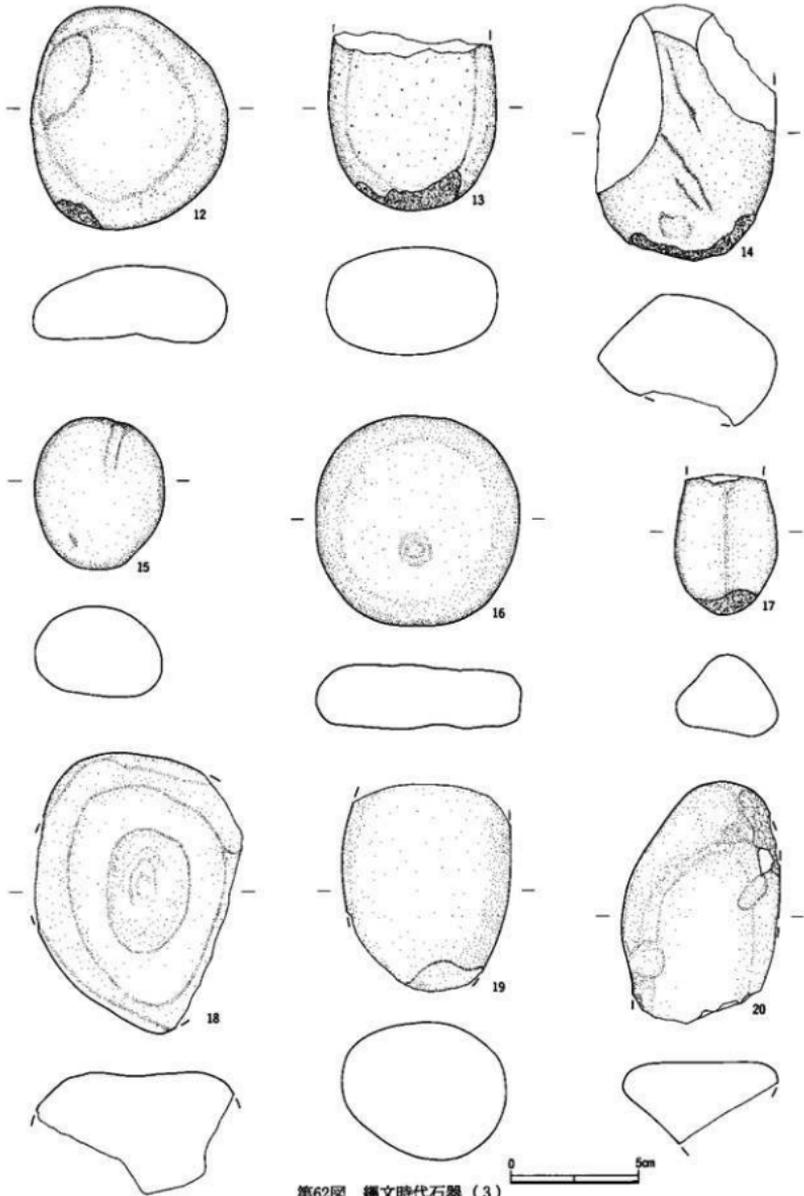
第8表 縄文時代石器観察表 (石鏃)

実測番号	位置	遺物番号	種類	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	図版番号	備考
1	SI-001	44	石鏃	チャート	(36.0)	(19.0)	(4.1)	(1.75)	60-8	
2	SI-002	67	石鏃	黒曜石	(16.0)	(11.0)	(2.0)	(0.26)	-5	
3	SI-005	59	石鏃	チャート	(15.0)	(26.0)	(5.7)	(1.07)	-9	
4	SI-008	14	石鏃	チャート	(29.0)	(18.0)	(2.6)	(0.98)	-1	
5	SI-008	35	石鏃	チャート	26.0	17.0	2.6	1.02	-2	
6	SI-008	57	石鏃	チャート	(25.0)	(18.0)	(2.6)	(0.93)	-6	
7	SI-008	108	石鏃	チャート	(29.0)	(21.0)	3.0	(1.19)	-3	
8	SI-012	334	石鏃	チャート	(24.0)	(28.0)	4.5	(1.67)	-4	
9	SK-028	10	石鏃	砂岩	(40.0)	(26.0)	(6.5)	(7.25)	-7	

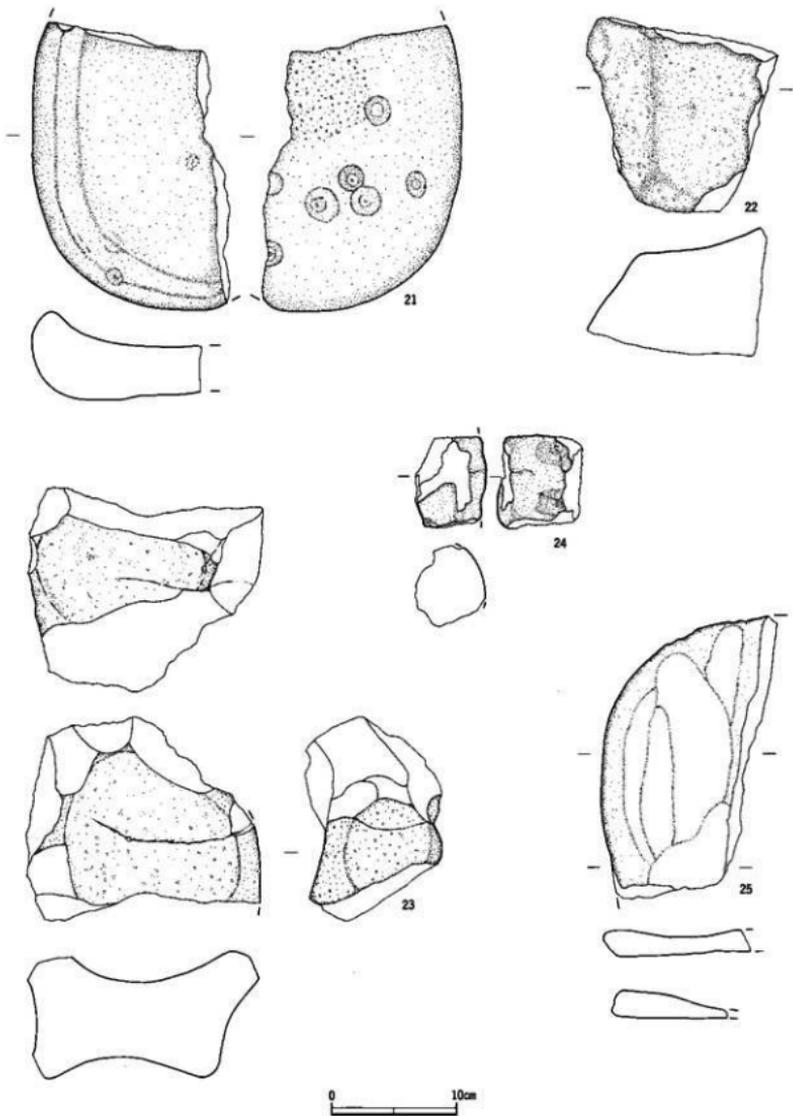
凸が見られ、一部では平坦になっている。また、平坦面を除く面は被熱しにぶい橙色に変色している。10は厚みのある楕円形を呈する円鏃である。長軸の一方に使用によると思われる平滑化が見られる。11は扁平なやや大きめの楕円形を呈する鏃である。長軸の一方を使用しており、平滑化や小さな剝離痕が見られる。12はやや扁平な半月形を呈する鏃である。弧にあたる縁は使用により平滑化が見られる。13は厚みのある楕円形に整形された鏃であるが、半分近く欠損する。周囲は使用による結果、表面には細かな凹凸が見られ平坦となっている。また、長軸の端部は敲打によると思われる小さなへこみも見られる。14は大人の拳大の楕円形を呈する鏃である。長軸の一方は敲打により凹凸を持ちながら平坦になり、もう一方は敲打による剝離を繰り返し原形をとどめない。15はたまご大の円鏃である。側面には使用による摩滅痕が見られる。16は扁平なやや厚みのある円形を呈する鏃である。敲打等使用による細かな凹凸が一周し、平坦な面が帯状に巡る。17は厚みのある細長い鏃であるが、半分ほど欠損している。長軸の端部は敲打による打撃痕が残る細かな凹凸が広がる。また、欠損した部位の一部に使用痕が見られる。18は大人の拳大の鏃である。平坦面は磨りにより平坦に磨かれ、中央付近は浅い凹みが見られる。平坦部の反対側は、欠損により失っている。本鏃は使用前に被熱し黒褐色に変色している。19はやや大きめの楕円形を呈する鏃であ



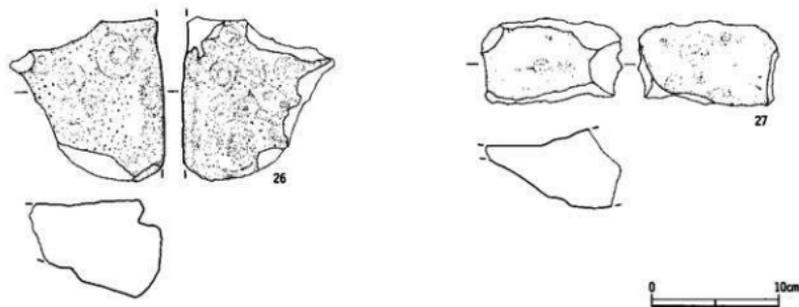
第61図 縄文時代石器 (2)



第62図 縄文時代石器 (3)



第63図 縄文時代石器（4）



第64図 縄文時代石器(5)

るが、半分ほどを欠損している。長軸端部は使用により削られ平坦になっている。また、礫の周囲もやはり使用によるざらつきが見られる。本礫も使用前に被熱している。20は細長い不整形の大人の拳大の礫である。横断面が三角形を呈するが、一面を含む端部一方は欠損している。残る平坦面の2面は砥石として使われたようで非常に丁寧に磨かれている状態である。長軸端部は敲打による細かな凹凸が付く。

#### エ 石皿 (第63・64図, 第9表, 図版39・40)

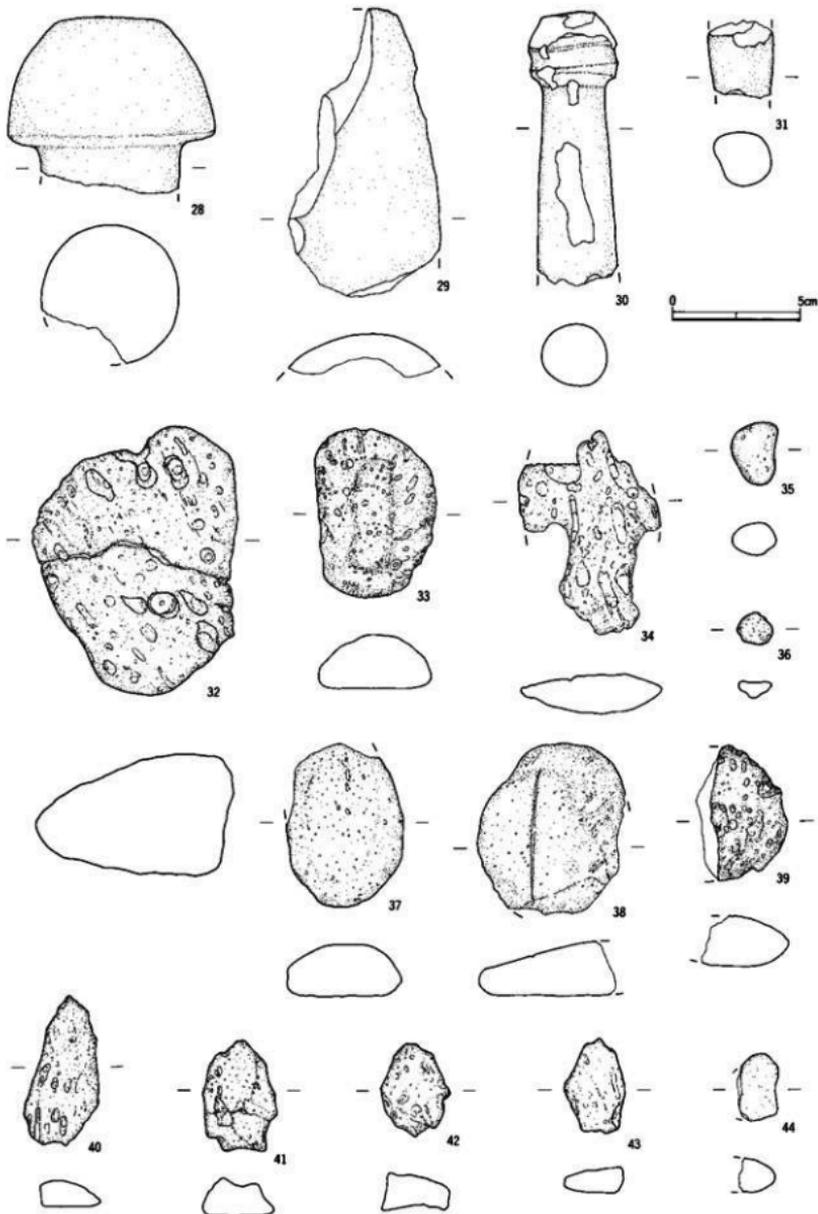
今回の調査では石皿の出土も見られたが、残念ながら点数も少なく完形品も無く、すべて一部分欠損しているか破片であった。出土はいずれも遺構からで、図示したうちの4点は同一遺構からの出土であることは興味深い。21は比較的扁平な原石を利用している。1/4ほどの残存であるが良好な資料と言える。23は多面体の不定形な原石である。一部欠損して全体を知りえないが平坦面が残る4面をすべて利用している。22も残存する形状を考えると23と同様な使われ方をしたのではないか。25は大きめの石皿が壊れたのち残った部位のまだ厚みのあるか所を再び石皿として利用している。

#### オ 石棒 (第65図, 第9表, 図版40)

石棒は合計4点出土した。すべて同一の遺構からの出土である。28は石棒の先端部である。基部から頭部の作りだしは一段であり、頭部の装飾はなく先端が平らに整形されている。基部の断面は円形である。29は石棒の基部の表面の破片である。材質は28と同じであるが、径がやや大きく表面の磨きがより丁寧であることなどを考えると別の石棒であろう。28・29ともに長さは1m近くになるのではないかと考えられる。30は石棒の先端付近である。28と比較すると小ぶりである。頭部と基部の接点部には浅く溝が一周し、さらに頭部にも溝2条が平行して一周する。そのほかの装飾はない。基部の断面形状は円形を呈する。31は石棒の基部と考えるが、断面形状が一定しておらず、石棒であるかは不明である。

#### カ 軽石 (第65図, 第9表, 図版40)

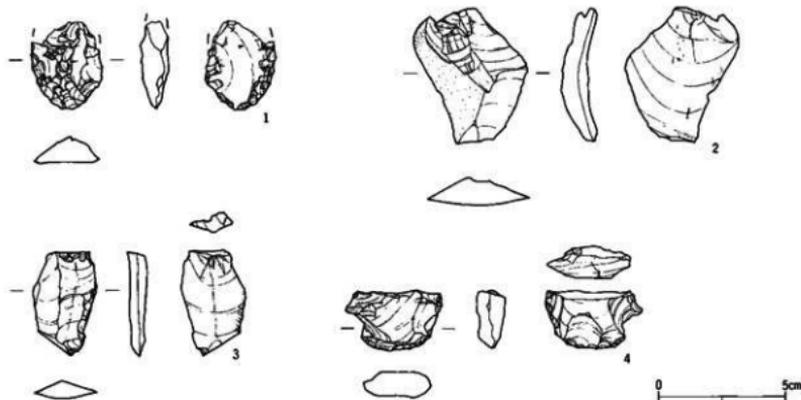
軽石は大小合わせて多く出土しているが、図示して示すことのできる13点について実測を行った。全て遺構からの出土である。32は同一遺構の中で2mほど離れて出土した2点が接合したもので今回出土した



第65図 縄文時代石器(6)

第9表 縄文時代石器観察表(磨石類・石棒・軽石)

実測番号	位置	遺物番号	種類	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	図版番号	備考
1	SI-012	287	打製石斧	ホルンヘルス	95.0	59.0	15.0	106.1	61-1	
2	SK-001	51	打製石斧	流紋岩	(91.4)	(39.1)	(21.3)	(105.3)	-2	
3	SK-016	41	打製石斧	チャート	(35.3)	(49.1)	(9.5)	(21.3)	-3	
4	SK-085	53	磨製石斧	蛇紋岩	(48.0)	(35.0)	(13.0)	(43.4)	-4	
5	SI-001	1	磨石	花崗岩	79.1	56.5	30.8	166.0	-7	
6	SI-005	1	磨石	安山岩	76.9	59.5	43.3	245.9	61-10	
7	SI-008	115	磨石	砂岩	(98.9)	(59.8)	(44.2)	(255.2)	62-20	
8	SI-012	272	磨石	安山岩	82.6	81.1	26.4	227.0	-16	
9	SI-012	9	磨石	砂岩	107.3	49.2	13.7	105.1	61-6	
10	SI-012	271	磨石	安山岩	73.9	35.4	11.7	40.8	-8	
11	SK-046	43	磨石	安山岩	(70.3)	(66.3)	(41.4)	(314.3)	62-13	
12	T21-01	-	磨石	安山岩	87.0	76.0	30.4	267.5	-12	
13	T38-01	-	磨石	砂岩	75.8	52.0	29.5	127.8	61-5	
14	T38-01	-	磨石	砂岩	(116.6)	(77.0)	(48.2)	(529.1)	62-18	
15	E12-50	1	磨石	安山岩	59.8	50.1	35.3	138.8	-15	
16	F10-61	1	磨石	安山岩	121.7	83.7	39.0	490.0	61-11	
17	SI-005	60	敲石	頁岩	(52.9)	(39.8)	(32.5)	(98.1)	62-17	
18	SI-005	47	敲石	砂岩	(101.2)	(70.0)	(49.8)	(420.0)	-14	
19	SI-008	120	敲石	石英斑岩	60.3	56.5	42.3	181.3	61-9	
20	SK-004	1	敲石	砂岩	(83.4)	(65.7)	(55.4)	(360.0)	62-19	
21	SI-005	66	石皿	緑泥片岩	(225.5)	(138.0)	(22.1)	(978.1)	63-25	
22	SI-012	492	石皿	花崗岩	(168.0)	(187.0)	(114.8)	(359.0)	-23	
23	SI-012	503	石皿	花崗岩	(154.6)	(150.7)	(153.8)	(2775.9)	-22	
24	SI-012	367	石皿	安山岩	(229.5)	(156.0)	73.0	(2689.7)	-21	
25	SI-012	467	石皿	安山岩	(127.8)	(121.3)	(84.0)	(856.4)	64-26	
26	SK-016	37	石皿	安山岩	(110.5)	(65.0)	(56.2)	(360.0)	-27	
27	SI-012	280	石棒	凝灰岩	(69.0)	(82.0)	(71.0)	(440.0)	65-28	
28	SI-012	446	石棒	凝灰岩	(111.2)	(61.1)	(151.0)	(97.0)	-29	
29	SI-012	17	石棒	緑泥片岩	(107.0)	34.0	33.0	(160.9)	-30	
30	SI-012	15	石棒	蛇紋岩	(30.0)	25.0	21.0	(20.7)	-31	
31	SI-005	5	浮石?	軽石	(44.0)	(27.0)	(15.0)	(5.0)	-39	
32	SI-005	18	浮石?	軽石	(53.0)	(33.0)	(20.0)	(4.0)	-40	
33	SI-005	32	浮石?	軽石	36.0	27.0	15.0	1.4	-42	
34	SI-005	58	浮石?	軽石	(79.0)	(53.0)	(15.0)	(4.0)	-34	
35	SI-008	15,117	浮石?	軽石	(106.0)	(78.0)	(45.0)	(88.2)	-32	
36	SI-008	20	浮石	軽石	(63.0)	47.0	20.0	(10.3)	-37	
37	SI-008	66	浮石?	軽石	13.0	15.0	7.0	0.1	-36	
38	SI-012	48	浮石	軽石	(67.0)	(55.0)	(21.0)	(17.7)	-38	
39	SI-012	230	浮石	軽石	73.0	47.0	20.0	8.5	-33	
40	SI-012	277	浮石?	軽石	(60.0)	(28.0)	(10.0)	(1.9)	-41	
41	SI-012	342	浮石?	軽石	38.0	24.0	10.0	0.8	-43	
42	SI-012	409	浮石?	軽石	(28.0)	(15.0)	(13.0)	(1.0)	-44	
43	SK-011	1	浮石	軽石	23.0	16.0	12.0	1.3	-35	
44	SK-057	117	石皿	砂岩	(75.0)	(56.9)	(66.4)	(277.7)	63-24	



第66図 縄文時代石器（7）

第10表 縄文時代石器観察表（その他）

実測番号	位置	遺物番号	種類	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	図版番号	備考
1	SI-012	135	尖頭器	黒耀石	(35.3)	(27.7)	10.4	(9.01)	66-1	
2	SK-001	33	剥片	頁岩	52.4	44.1	10.3	21.99	-2	
3	T9-001	1	石刃	チャート	41.3	24.9	7.5	6.43	-3	
4	T7-001	1	楔形石器	瑪瑙	(23.4)	(38.2)	(12.0)	(11.63)	-4	

ものの中で最も大きい軽石となった。加工した痕跡は見あたらない。33は一面が鋭利なもので平らに削られており、断面形状は半月形となる。他の面には加工の跡が認められない。34は欠損部位が多く原形を知りえないが、断面形状等から見ると断面及び平面形状が楕円形に成形していると考えられる。37は平面形状を小判形に成形し、長軸の一方の端近くには長軸に直行して径が数ミリメートルの穴を穿けていたようである。残念ながら出土したときには欠損していた。38は33同様に一面が鋭利なもので平らに削られている。断面形状は不明である。平らに削られている面の反対側の面には鋭利な刃でつけたと思われる細い直線の溝が見られる。そのほかの軽石はいずれも小さく本来の形状等については不明である。

キ その他の石器（第66図、第10表、図版37）

ここで取り上げる石器は遺構の覆土あるいは確認調査中に出土した石器であるが、その石材や形状等から縄文時代、特に本遺跡の中心を占める縄文時代後期後葉の所産とは捉えられないものを一括してまとめたものである。

1は黒耀石製の尖頭器である。刃部は半分ほど欠損している。横長剥片を用い、横方向に石器の長軸を設定し刃部の調整を行っている。調整は両面から行われ、腹面から背面への調整は剥離が深く大きくなるように加えている。一方背面から腹面へは細かく浅い調整を行っている。2は頁岩製の縦長剥片である。

打面は原面打面である。背面には礫原面を残す。先端部は欠損している。3はチャート製の石刃である。稜がほぼ側片に平行するように一条走る。打面は平坦打面である。先端部は欠損している。4は瑪瑙製の楔形石器である。打面側半分ほどが欠損している縦長剝片であると思われる。先端部には刃潰し状の階段状剝離が見られることから楔形石器とした。

### 第3節 貝層標本の分析結果

本遺跡からは、貝層を伴う遺構が多数検出されている。内訳は縄文時代中期の住居跡からが7軒、土坑からが5基である。遺構がある程度埋まってもまだ残る窪みに破棄されたと考えられる。定量採取された貝層は、ある程度まとまって検出されたものを中心に住居跡ではSI-001号（2地点）・002号・005号・006号・010号・012号の6軒、土坑ではSK-011号・016号・085号の3基の合計10地点である。そのほか規模の小さい貝層を伴う住居跡SI-015号、土坑SK-076号・081号の計3地点については一括標本として任意に標本を採取した。

#### 1 資料の採取方法

貝層から定量採取する方法は、採取地点に一辺30cm×30cm×厚さ5cm（容量4,500cm<sup>3</sup>）の一定量の資料が採取されるように人口層位を設定し、上層から順に採取し標本に番号を付した。定量採取した貝層では10地点37単位、一括採取した貝層からは3地点4単位の合計37単位の標本を採取した。

#### 2 資料の分析方法

採取された標本は、フローテーション法により浮遊物を回収した後、編目が9.52mm・4mm・2mm・1mm・0.5mmの5種類の試験用フルイを用いて水洗を行った。標本は編目4mm以上のフルイに残った貝類を選別し、集計した。腹足類（巻貝類）は、殻軸と殻口部が遺存するものを個体数とし、二枚貝類は殻長部が遺存するものを左右別に集計し、多い方を個体数とした。重量は遺存部位にかかわらず種の同定が可能なものすべてを加算し値とした。これらうち二枚貝に属し、ほとんどの貝層に一樣に見られるオキアサリとハマグリについて殻長及び重量の計測結果について表示することとした。そのほかの貝種については水洗・選別の過程で観察はされたものの、計測には値しなかったり、非常な偏りがあったりしている。なお、今回の標本水洗・選別の作業の中では特に定量採取された標本の中からは貝類以外の魚骨・哺乳類等の遺体は検出されなかった。

#### 3 分析の結果

水洗・選別されたこれらの貝類は、巻貝類（腹足類）が6種類、二枚貝類で10種類の合計16種類の貝類が同定・確認された。

##### 1. 同定された貝類

軟体動物 MOULLUSCA

巻貝類（腹足類） GASTROPODA

イボキサゴ	<i>Umbonium(suchium)moniliferum</i>	アカニシ	<i>Rapana venosa venosa</i>
ウミナナ類	<i>Botillaria multiformis spp.</i>	アラムシロガイ	<i>Reticunassa festiva</i>
ツメタガイ	<i>GLassaulax didyma</i>	バイ	<i>Babylonia japonica</i>

二枚貝類 BIVAIVIA

サルボウガイ	<i>Scapharca subcenata</i>	バカガイ	<i>Macra chineensis Phillippi</i>
マガキ	<i>Grassostrea gigas</i>	シオブキガイ	<i>Macra veneriformis Reeve</i>

マテガイ	<i>Solen strictus Gould</i>	オキアサリ	<i>Gomphina (Macridiscus) veneriformis</i>
カガミガイ	<i>Phacosoma japonicum</i>	ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>
アサリ	<i>Tapes (Amygdala) philipinarum</i>	オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>

## 2. 貝種の傾向

貝種については前述のとおりであるが、個体を明確に確認でき数量及び重量が計測されたものは限られた種類であった。この中で最も多かったものはハマグリで全体の56%と半数以上を占める、次に多いのはオキアサリで33%、この両種で実に全体の89%となる。そのほか個体数が100以上確認されたものはマガキ(6%)とアサリ(3%)、シオフキガイ(1%)で残りのほとんどを占める。これら5種の貝は千葉県内の縄文時代中期の貝塚では一般的に見られる貝種であり、本遺跡に隣接する同時代の遺跡から検出された貝種ともほとんど相違はない。

これら同定・計測されたマガキを除くほとんどの貝種は、内湾の潮間帯の砂泥底に生息している二枚貝類である。このことは海老川の河口付近から直線距離にして約2.5kmに位置することを考えれば当然のことと言える。3番目に検出の多いマガキは岩礁に付着する貝であるが、内湾の比較的塩分の低い潮間帯の岩礁に生息するものであり、検出が多いこともうなずける。余談だが、このことから本遺跡の西を南に流れ現東京湾に流れ込む海老川の河口周辺には当時、満潮時には波間に隠れてしまうような小さな岩が潮間帯の砂泥の中に比較的多く存在していたのではないかと想像される。

一方、その存在を認められるが個体として計測できなかった巻き貝類(腹足類)も二枚貝類と同じく砂泥底に生息するが、その生息範囲は潮間帯から水深が20mほどの海底と生活の幅がかなり広く、結果的に採取(検出)に影響するとも考えられる。このことから潮の干潮時にはかなりの距離潮が退き、広い範囲で砂浜が出現していたのであろう。

また、今回の調査では、淡水性の貝であるカワニナや比較的塩分の低い潮間帯に生息するオキシジミなどは確認されていない。

次に、検出数の多かったハマグリ、オキアサリ、マガキの3種類の大きさについて見てみると、今回表に表した個体の平均値ではハマグリが33.72cm、オキアサリが34.27cm、マガキが38.41cmである。いずれも現在食用に供されているものと比較すると小さいが、本遺跡と同時代の周辺ほかの遺跡・貝塚等から検出された貝類と比べて見るとこの時期としては一般的な大きさであると言える。しかしながら本遺跡から採取されたハマグリはわずかに・マガキはちょっと小さめであると思われる。オキアサリが比較的的平均的な大きさではなかろうか。

今回検出された貝層の遺構毎の構成にその中心となる貝種及び組み合わせに少なからず変化が見られるようだ、採取の時期に違いがあるのだらうと考えるが季節的なものなのか時間的なものなのかははっきりしない。今後の調査の結果も待って検討する必要がある。

第11表 オキアサリ股長集計一覧

股 長	SI-001	SI-002	SI-005	SI-006	SI-012	SK-016	SK-081	SK-085	合 計
17.5-20.0	0	0	0	1	0	2	5	1	9
20.0-22.5	2	0	3	5	0	1	15	10	36
22.5-25.0	7	0	2	10	0	6	33	55	113
25.0-27.5	14	0	19	15	0	5	22	136	211
27.5-30.0	19	0	12	23	3	13	13	160	243
30.0-32.5	13	2	17	41	8	17	14	176	288
32.5-35.0	7	1	31	66	11	35	10	174	335
35.0-37.5	1	2	87	55	16	34	3	153	351
37.5-40.0	2	0	95	19	21	17	3	146	303
40.0-42.5	8	0	73	24	19	16	4	70	214
42.5-45.0	3	1	42	17	10	5	2	40	120
45.0-47.5	1	0	14	4	7	2	0	18	46
47.5-50.0	3	0	10	6	2	0	0	7	28
50.0-52.5	0	0	2	1	0	0	0	3	6
52.5-55.0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
合 計	80	6	407	287	97	153	124	1,150	2,304
平 均 値	31.791	35.400	38.039	34.589	38.565	34.669	27.482	33.344	34.273
絶対偏差の平均	5.272	3.267	3.944	4.470	3.716	4.056	4.344	4.648	5.007
標 準 偏 差	6.669	4.745	5.213	5.867	4.577	5.248	5.522	5.683	6.122

第12表 ハマグリ股長集計一覧

股 長	SI-001	SI-002	SI-005	SI-012	SK-016	SK-085	合 計
15.0-17.5	0	1	0	0	0	1	2
17.5-20.0	0	0	1	0	0	0	1
20.0-22.5	5	1	0	0	2	1	9
22.5-25.0	20	3	1	0	1	4	29
25.0-27.5	27	8	3	0	1	36	75
27.5-30.0	66	39	20	0	5	241	371
30.0-32.5	68	82	51	0	18	759	978
32.5-35.0	70	82	51	0	37	797	1,037
35.0-37.5	17	85	67	3	17	419	608
37.5-40.0	12	32	43	0	8	174	269
40.0-42.5	2	10	20	3	0	63	98
42.5-45.0	1	6	20	0	1	31	59
45.0-47.5	3	1	3	0	0	13	20
47.5-50.0	0	0	0	1	1	6	8
50.0-52.5	0	1	0	0	1	1	3
52.5-55.0	0	0	0	0	0	0	0
55.0-57.5	0	2	1	0	0	1	4
57.5-60.0	0	1	0	0	0	0	1
60.0-62.5	0	0	0	0	0	0	0
62.5-65.0	0	0	0	0	0	1	1
65.0-67.5	0	1	0	0	0	1	2
67.5-70.0	0	0	1	0	0	0	1
70.0-72.5	0	0	0	0	0	1	1
72.5-75.0	0	0	0	0	0	0	0
75.0-77.5	0	0	0	0	0	0	0
77.5-80.0	0	0	0	0	0	0	0
80.0-82.5	0	0	0	0	0	0	0
82.5-85.0	0	0	0	0	0	1	1
100.0-	0	1	0	0	0	0	1
合 計	291	356	282	7	92	2,551	3,579
平 均 値	31.101	34.254	35.727	39.829	33.804	33.704	33.722
絶対偏差の平均	3.206	3.584	3.692	3.167	2.738	2.822	3.042
標 準 偏 差	4.151	6.005	5.011	4.446	4.239	8.512	7.766

第13表 マガキ殻長集計一覧

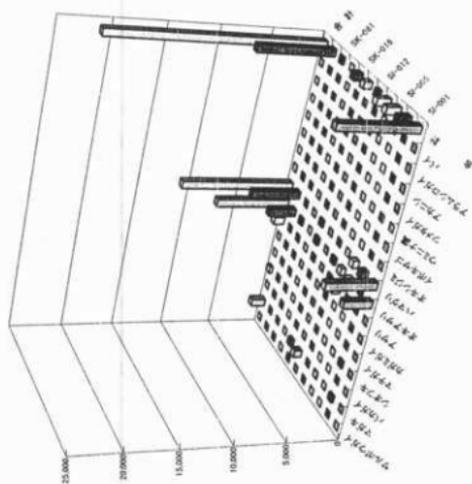
殻 長	SI-001	SI-002	SI-006	SI-011	SK-016	合 計
10.0-12.5	0	0	0	1	0	1
12.5-15.0	0	0	0	1	0	1
15.0-17.5	0	0	0	0	0	0
17.5-20.0	0	2	0	5	1	8
20.0-22.5	0	0	0	14	0	14
22.5-25.0	0	0	1	8	0	9
25.0-27.5	0	1	1	11	2	15
27.5-30.0	0	6	2	9	5	22
30.0-32.5	0	3	6	8	5	22
32.5-35.0	3	6	1	21	4	35
35.0-37.5	1	5	2	14	4	26
37.5-40.0	1	7	3	16	6	33
40.0-42.5	2	2	2	22	3	31
42.5-45.0	2	6	1	23	5	37
45.0-47.5	1	2	0	10	3	16
47.5-50.0	1	1	0	10	3	15
50.0-52.5	1	3	0	7	3	14
52.5-55.0	0	4	0	11	2	17
55.0-57.5	0	1	0	2	0	3
57.5-60.0	0	2	0	1	1	4
60.0-62.5	0	0	0	1	0	1
62.5-65.0	0	1	0	1	0	2
65.0-67.5	0	2	0	2	0	4
67.5-70.0	0	0	0	1	0	1
100.0-		1				1
合 計	12	55	19	199	47	332
平 均 値	40.858	40.545	33.837	38.044	38.800	38.413
絶対偏差の平均	4.865	8.589	4.653	8.700	7.111	8.138
標準偏差	6.036	10.676	5.525	10.868	8.725	10.242



具種の頻度(個体数)

□SI-001 ■SI-002 □SI-005 □SI-006 ■SI-012 □SK-011 ■SK-016

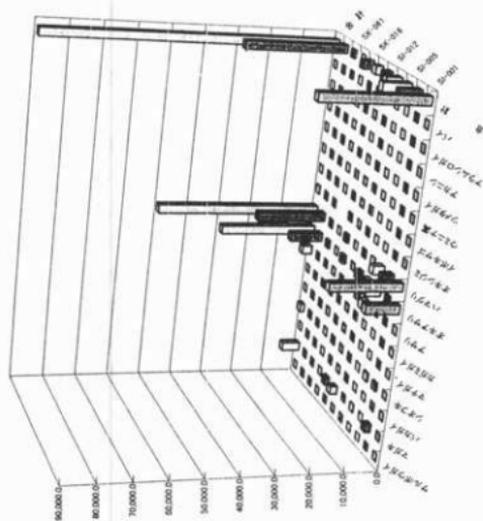
□SK-076 ■SK-081 ■SK-085 □合計



具種の頻度(重量 g)

□SI-001 ■SI-002 □SI-005 □SI-006 ■SI-012 □SK-011

■SK-016 □SK-076 ■SK-081 ■SK-085 □合計



## 第3章 まとめ

### 第1節 旧石器時代

今回の調査で旧石器時代の遺物を出土する地点は単独が2か所、複数個を出す集中地点が3か所の計5か所から総数で198点の石器が出土している。その内訳は石器は少数でそのほかは剥片・碎片などの微細のものも多く、礫（群）の出土はなかった。これら集中地点それぞれ石器出土の様相に差異が見られる。以下に石器集中地点ごとの様相の違いを中心にまとめることにする。

石器集中地点1については、今回の調査の中で最も多数の石器を検出した。その中での特徴を簡単にまとめると次のようになる。それは①出土石器点数134点のうち実に128点（96%）が黒曜石であること、そして②これらのうち別の母岩と考えられる3点の黒曜石を除く125点と多数の黒曜石が同一母岩であること、さらに③同一母岩の黒曜石125点のうちおよそ1/3実にあたる35点が接合関係にあること、④これら出土石器の大半が直径が3m以内の範囲の内に集中して検出されていること、⑤製品として分類される石器が少なく、小剥片と碎片が残りの大半を占めていること、の5点に集約される。

以上の観察結果から考えられることは、本地点は入手した大型の黒曜石の原石（素材）を加工した石器製作跡であったということである。ただし、出土した数少ない石器や剥片を見てみると本遺跡に生活跡を残す旧石器時代人たちは石器の製作、とくに素材となる石核から剥片を作り出すことにあまり精通していなかったのではないかと思われる節がある。というのは接合する資料も含めた出土した剥片も観察すると、剥離時の打撃の力が充分ではなく最後までそのまま抜けきらずに途中で抜けて剥離してしまった剥片が多いのである。いわゆる「寸詰まりの剥片」状態のものが実に多いのである。はたして目的とする石器を満足して十分な数作ることが出来たのであろうか。

次に接合資料についてであるが、多数の剥片が接合する黒曜石の接合資料5点について若干まとめることにする。接合資料b（12点）・c（13点）・d（5点）・e（2点）・f（3点）と接合の形状も数もまちまちであった。そのうちbとcの2個体は10点以上の剥片の接合が見られた。しかし石核の全容が分かるまでに復元できたものはなかった。その中で接合資料cは子供の拳大ほどの大きさにまとめられた石核であり、打面を頻繁に移動しながら剥離作業を繰り返し行っていた様子が見られる。接合資料bは12点と数は多く接合するが、接合資料cの様にまとまりと剥離作業の流れが見えない状況である。

出土した石器はナイフ形石器2点、石刃2点、使用痕あるいは加工痕のある剥片5点、石核2点を含め総計11点と少ない。その他は細かな剥片や碎片である。これら石器のうちナイフ形石器を含む6点（チャート製石器4点および母岩を別にする黒曜石剥片2点）は、剥片の数やその剥離状態が本地点のほかの黒曜石石器や剥片と違いがあり、製品又はそれに近い形で本遺跡へ持ち込まれた可能性が強い石器である。

石器集中地点2については、総計で57点の石器を検出しているが、分布範囲は半径が4mほどのやや広い範囲に散在する。石材の2/3を占める37点が安山岩である。また碎片もややまとまって出土している。これらの安山岩は十数の母岩に分かれること、そして剥片の多くには原面が残されていることなどから石器素材となった原石の大きさが推測できそうである。第1の参考資料として、残存する原面が半分ぐらいを占める剥片の大きさから、そして第12図23で示した石核が原面を多く残すほぼ原形に近い形状をとどめて

いる。これらのことからおよそ平均して大人の拳大あるいは若干小さめの大きさの礫を持ち込んで石核としたのだろう。

石器集中地点3については、石器集中地点2からやや距離をおいて検出されているが、石材の安山岩を考えると石器集中地点2の範疇に含まれることも考えられる。というのは石器集中地点2の調査区は一部制約があり調査できなかった部分があったり、攪乱を受けていたりと本来の状況を止めていないことも考えられるからである。単独出土の石器については、石材や石器の性格から考えられると製品での外部からの搬入品であると判断される。

## 第2節 縄文時代

今回の調査では、早期末の陥穴9基、炉穴は12基（炉床数）、土坑1基、中期後葉の竪穴住居跡16軒、土坑53基、そしてピット群が検出された。確認された遺構総数はピット群を除き91基となる。このうち早期の遺構は約1/4にあたる22基、そのほかの69基（軒）はほとんどすべてが中期後葉の時期にあたる。

早期の遺構についてであるが、陥穴については、北側調査区（B区）で9基検出されている。これら陥穴からの早期を示す遺物の出土は見られなかった。しかし、遺構の縦横断面の形状や覆土の様相などを観察して得られた資料から、いわゆる早期の所産とされるTピットと呼称されている陥穴に非常に類似している。これら9基の陥穴すべてが当該期の遺構として間違いないと考えられる。9基の立地状況は調査区でも台地のやや奥まった縄文時代中期の竪穴住居跡が展開する平坦面に散在する。まとめるとしては、単独と考えられるものもあるが、中には2基あるいは3基とやや狭い範囲にまとまっている様相も見られる。また、方向について見てみると、長軸方向がほぼ南-北にそろっているものが8基、東-西に向くのが1基と傾きに偏重の傾向が見られる。これらは当時の地形や環境に関連しているのであろうか、また、作られた時期の問題であろうか、今後の周辺地域の調査成果が待たれるところである。

炉穴については、SK-001の1基を除くといずれも確認面からの深さが浅く、ほとんどが炉床に近い場所からの検出であり、遺物の搬出もほとんどなく時期なども含めて詳細は不明である。その中でもSK-001は縄文早期に一般的に見られる炉穴の様相を示していると言えるだろう。今回検出されたの炉穴は同心円を描くように、また、それ以前に使われた炉床を意識しながら移動を繰り返し、全部で5回ほど連続して使用していたようである。つまりこれら重複する炉穴はほぼ一定の範囲の中で炉床の移動を繰り返し重複しながら炉を営んでいたと言える。また、SK-001から出土した遺物のほとんどは土器片である。そのほとんどが土器面の表裏に条痕文を有する茅山上層式の土器群である。これらの土器は炉床直上、あるいは底部近くからある程度のまとまりを持って出土するものが多くあった。これら炉床の作られ方、遺物の検出状況などの傾向は下総台地の他の場所から検出されている当該期の多くの炉穴（群）ともよく類似した特徴を有すると言える。

次に、本遺跡での中心的存在である縄文時代中期についてであるが、竪穴住居跡については、北側調査区（B区）からの検出がすべてであった。16軒が確認され検出された。攪乱が激しく、また、他の遺構との重複があったりと十分な数値が得られなかった中で見てみる。まず、形状及び規模であるが平面形状は基本的に円形であり、若干楕円を示すものも見られる。規模は平均で住居の直径がおおよそ4.5m前後になる。遺構の深さであるが確認面からの深さは攪乱の影響を受け非常にまちまちであるが全体的に浅い傾向にある。施設についてであるが、炉は検出されなかったSI-016を除く15軒について見てみる。いずれも竪

住居跡の中央部付近に作られている。このうちSI-011・SI-012は炉の一部あるいは全周にわたって土器片を並べる土器片囲い炉であった。残りの13軒は土器片などの埋設はなかった。これらのほとんどの炉は比較的深く掘られ、炉床面は非常に硬く硬化し、赤色に変色していた。柱穴についてであるが、本遺跡から検出された住居跡の多くは主柱穴が4～5本のものが多く、当該期以降によく見られる壁柱穴の形態を示すものはSI-014の一軒だけであった。

また、中期終末に近い時期から竪穴住居跡には出入り口と考えられている張り出し部を持つ住居跡が検出されていることが他の同時代の遺跡から報告されている。本遺跡で検出された竪穴住居跡SI-001・SI-012にも張り出し部を持たないがそれと関係する類似の施設が見られる。ともに住居跡北東側の内側、丁度壁に接するかのような位置に方形に床面を僅かに掘りくぼめ、両側には平行する2～4本の柱穴が掘られている。この様な施設は張り出し部の付け根部分でよく見られる施設と非常によく類似している。先にも述べた様に張り出し部は一般的に出入り口と考えられており、住居跡の東-西方向から南側に張り出すものが多い。しかし、それと比較すると本遺跡で検出された2軒は住居跡の北東隅の壁に接して検出され、張り出し部を持たない状況である。これと同じ様な北方側への張り出しを持つ住居の報告例も希にはあるが、張り出し部を持たない本例がそれにあたるのか、あるいは他の目的の施設であるのか、今後の調査成果及び類例の出現を待ちたい。

新山東遺跡は遺跡が立地する東西に長い舌状台地に広がる中野木台遺跡群の中では東の端に位置し、台地の付け根部分にあたる場所に立地している。中野木台遺跡群に含まれる遺跡の多くは縄文時代中期、それも後半の時期に集中している。土器型式で示すと加曾利E式期のそれも後半EⅡ～Ⅳ式期にあたる。調査例のある本遺跡西側に隣接する中野木新山遺跡、中野木台遺跡の西遺跡からこれまでに検出された住居跡はいずれも加曾利E式期の後半にあたる土器群を伴うものが多い。また、同時期の遺構も多数検出されている。今後も調査が予定されている新山東遺跡の成果を含め、周辺に存在する同時代遺跡の調査成果を待って、論ずることが必要であろう。

### 第3節 その他

今回の調査で検出された遺構の多くが後世の攪乱を受け、すべてが必ずしも良好な状態で検出されることがなかった。より現代に近い時代になればなるほどその影響は強かったようである。こうした中、調査のなかで、1121点にもよる近世の焼き物が採取されている。当然のことながら当該期の遺構は全く検出されない状況にあり、さらに出土遺物もそのほとんどが小破片であった。しかし多岐にわたる種類の焼き物が出土しているのである。これらの中には当地域の人々の生活史を知る手がかりになるものも含まれている。そこでここではまとめとしてこれら出土した近世の焼き物の種類と数量について一覧表（第15表）にして報告するものである。

最後に、今回この報告書で用いた遺構番号で途中番号が抜けているが、これらは調査の中で、あるいは整理作業の中で、遺構の検出状況及びその規模・形態・伴出遺物などについて検討した結果において欠番とした遺構であることを断っておく。ここではその一覧表を作成しないがご了承願いたい。

第15表 近世焼物類組成表

上段：破片数/下段：重量 (g)

類	品名	陶 器				磁 器				瓦葺上部	上 部	焼物別合計	類別合計 (破片数)	類別比率		
		瀬戸・美濃	備前?	常滑	不明	肥前	瀬戸・美濃	不明	小計							
銅	銅	77 245			1 5	78 250	119 200	28 90		147 290	1 5	226 545	235	21.0%		
	青磁						2 20		2 20		2 20					
	磁	3 30				3 30	4 10			4 10		7 40				
皿	皿	9 80				9 40						9 40	9	0.8%		
鉢	鉢	9 80		2 40		11 120	1 30			1 30		12 150	25	2.2%		
	耀鉢	2 20	11 180			13 200						13 200				
	土瓶				24 70	24 70						24 70				
煮炊具	炊 炊										103 390	103 390	127	11.3%		
	御神酒				1 3	1 3	6 20	1 5		7 25		8 28				
鉢 利	灰 鉢	160 890				160 890						160 890	177	15.8%		
	鉄 鉢				9 100	9 100						9 100				
	燗			3 65		3 65					16 62	19 125				
灯籠具	燈一燈				16 65	16 65	1 3			1 3		17 68	67	6.0%		
	燈一灰物	3 10				3 10						3 10				
	燈一鉄物	7 50			21 95	28 145						28 145				
	燈火具	9 50				9 50					26 70	35 120			35	3.1%
神仏具	香 炉												74	6.6%		
	カワラケ										74 125	74 125				
暖房具	火 鉢									16 225	164 1,615	180 1,840	180	16.1%		
玩 具	籠菓子										17 75	17 75	72	6.4%		
	碁 子										16 30	16 30				
	七 玉										1 10	1 10				
	土人形										36 150	36 150				
	面 型										1 10	1 10				
	サイコロ										1 5	1 5				
不 明	3 10			11 45	14 55	1 10	1 3		2 13	28 175	76 315	120 556	120	10.7%		
合 計	282 1,425	11 180		85 428	381 2,098	134 293	30 98		164 391	44 400	532 2,860	1,121 5,749	1,121	100.0%		
材質別組成率		34.0%				14.6%				3.9%		47.5%		100.0%		

※遺物の時期は、江戸時代後期（18世紀後半～19世紀前半）である。したがって、近代の遺物は含まれてはいない。

※この時期の特徴として、瀬戸・美濃産の磁器が比較的多い、そして玩具も多いことなどがあげられる。

# 写 真 图 版



遺跡周辺航空写真



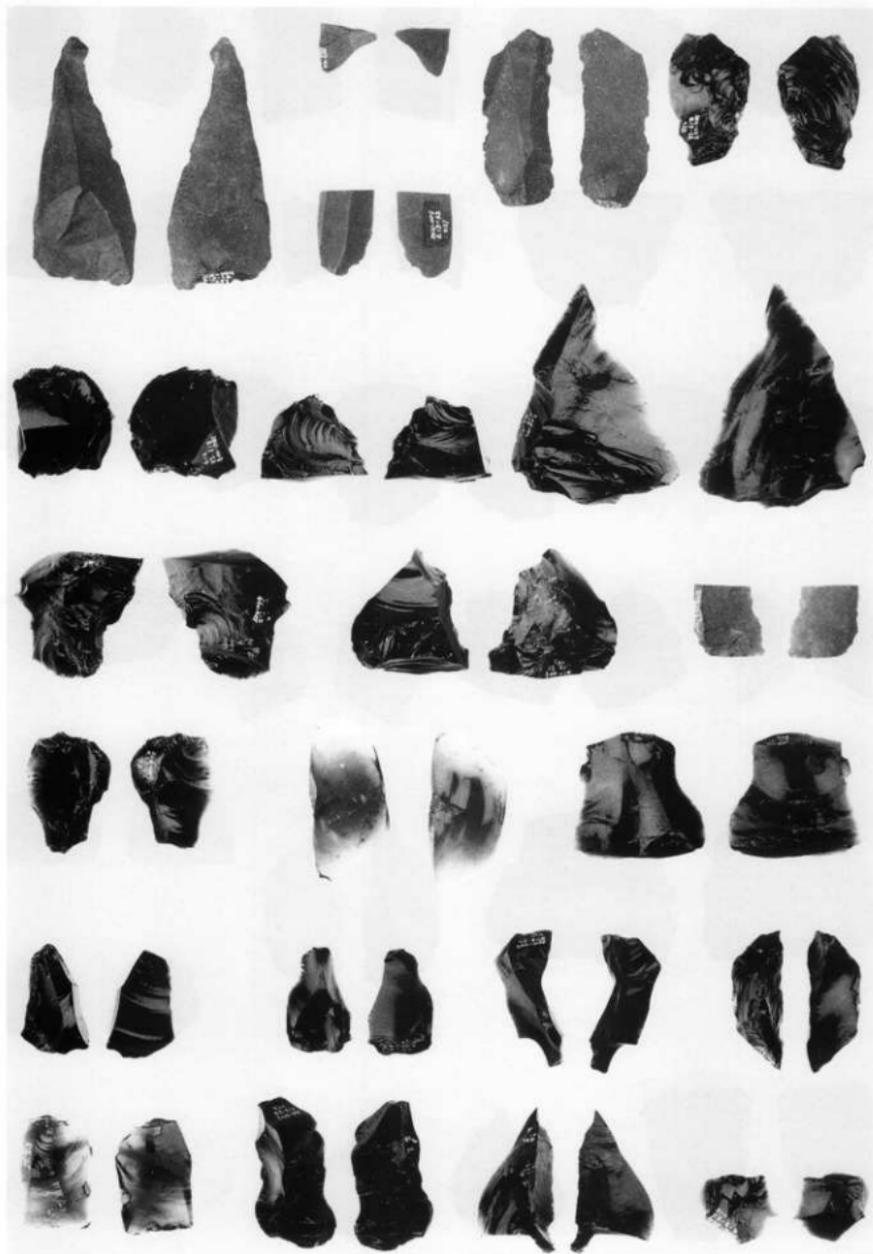
石器集中地点 1



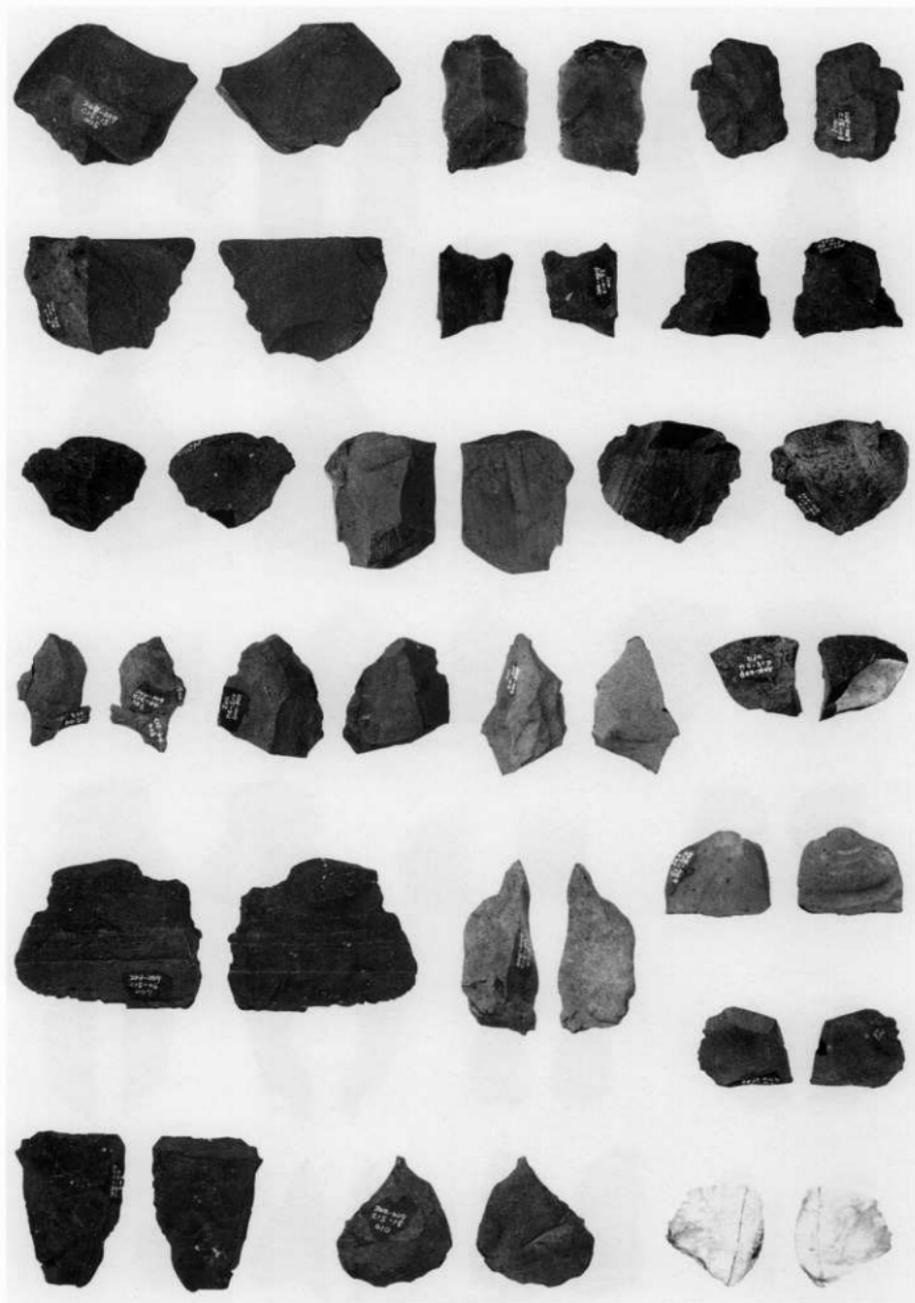
石器集中地点 2



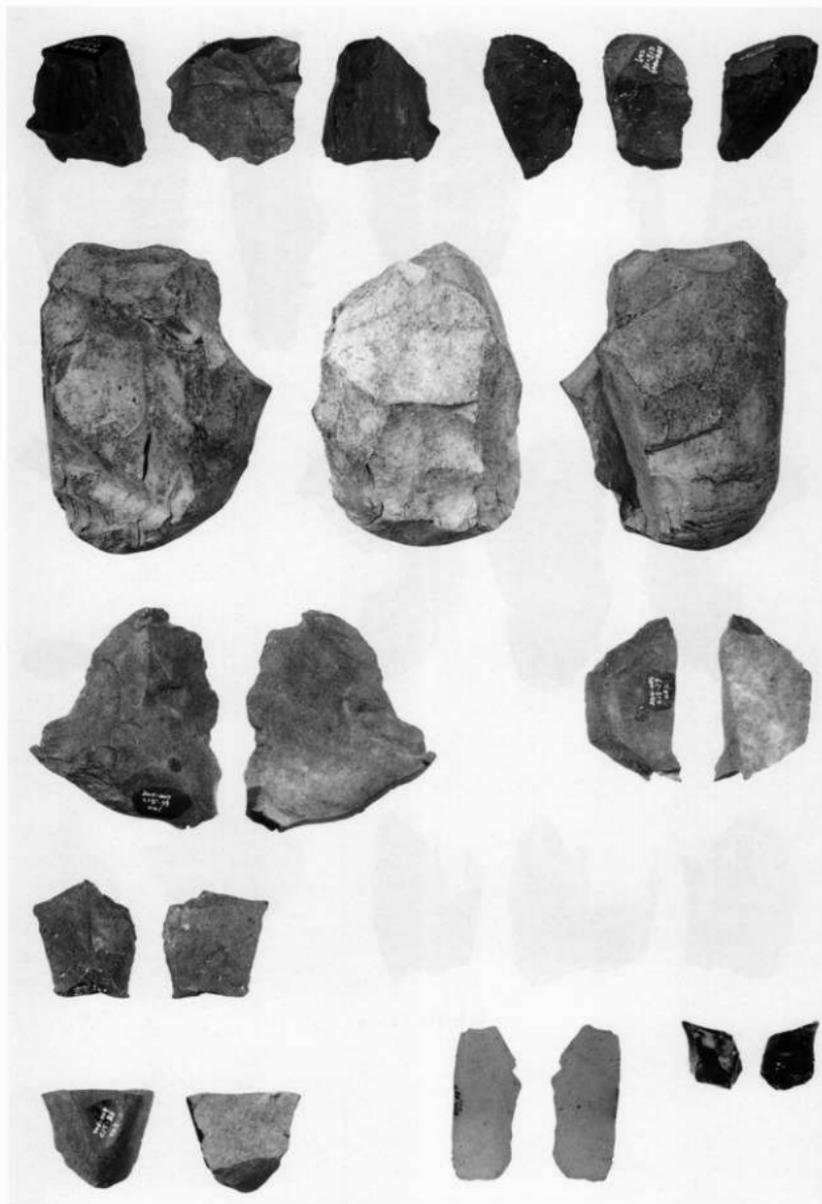
石器集中地点 3



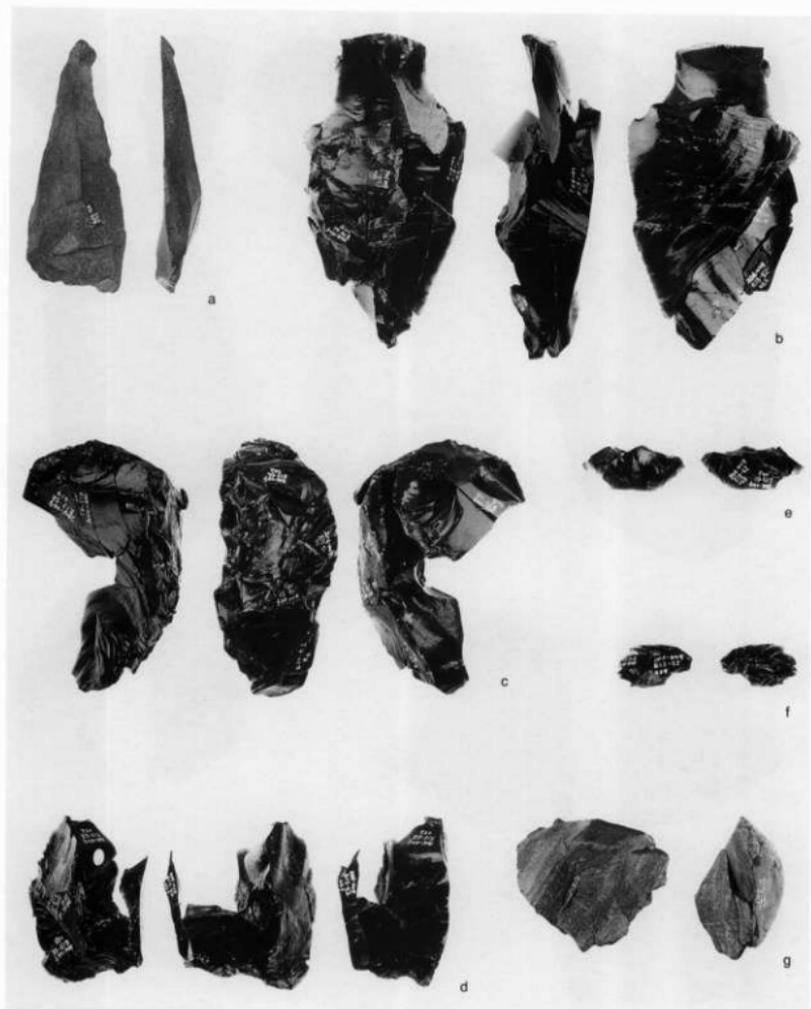
石器集中地点 1 出土石器



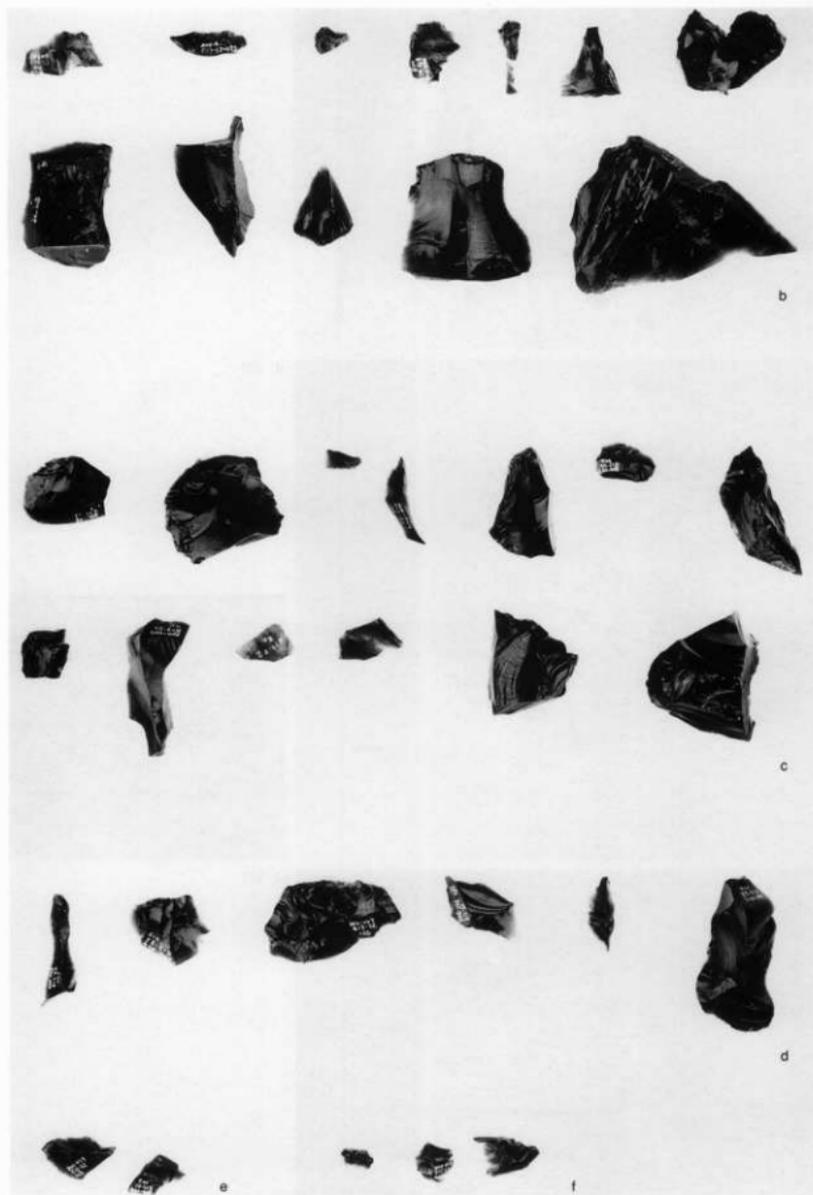
石器集中地点2出土石器



石器集中地点 2·3·单独出



接合資料 (a~g)



石器集中地点1接合資料構成石器 (b~f)

图78



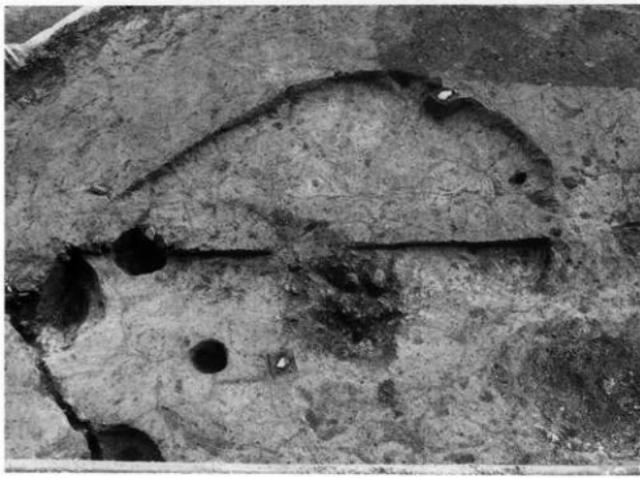
SI-001



SI-002



SI-003

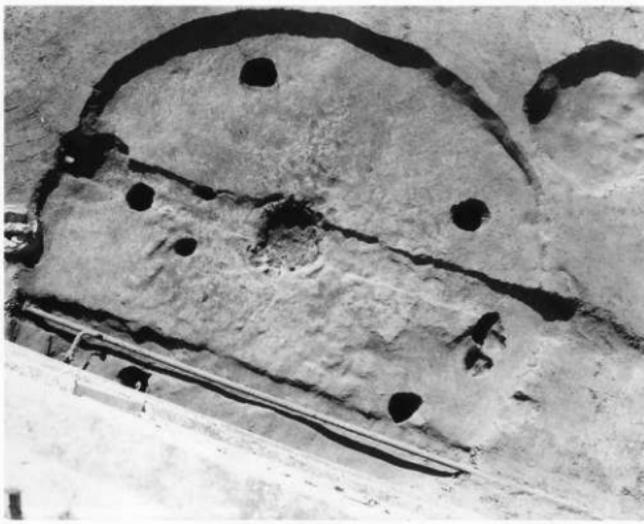
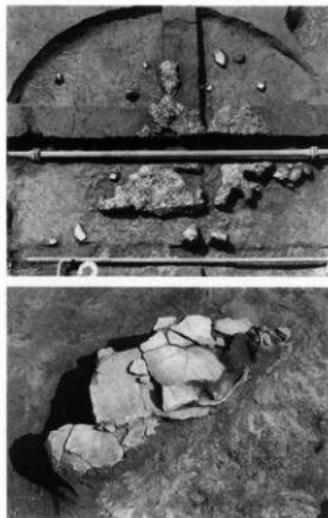


SI-004

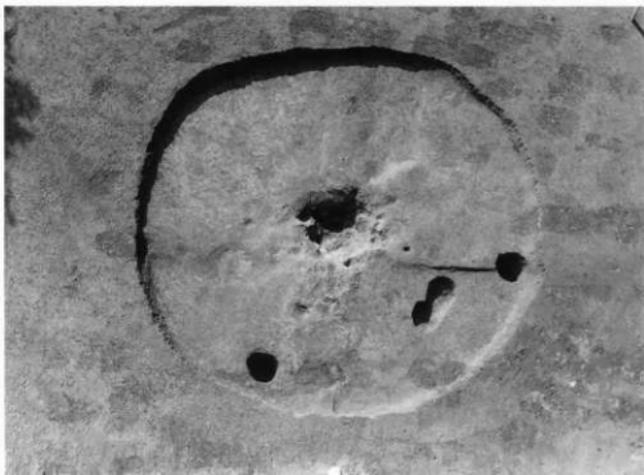
图版 9



SI-005

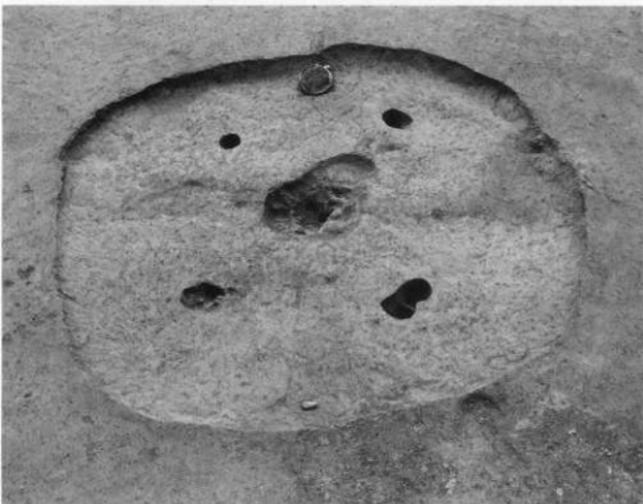


SI-006





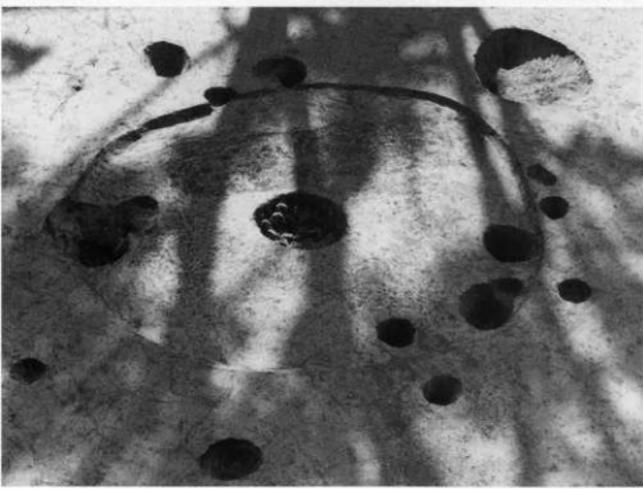
SI-007



SI-008



SI-009



SI-010

图版11



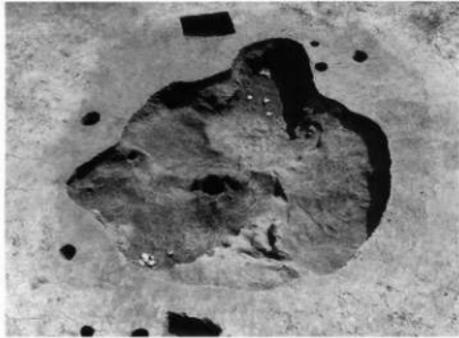
SI-011



SI-012

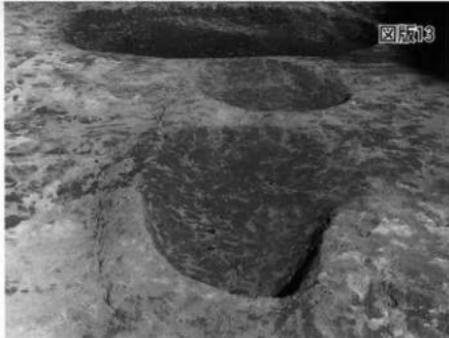






SK-001

SK-005  
SK-006  
SK-007



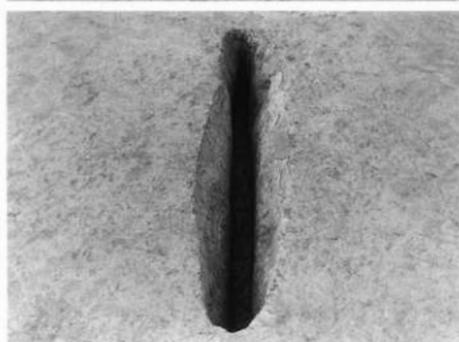
SK-020



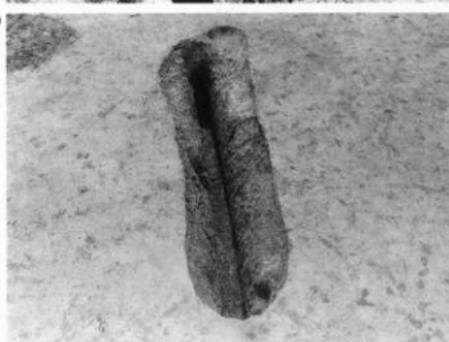
SK-019



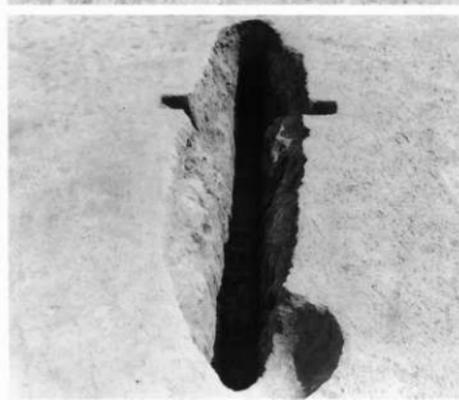
SK-089



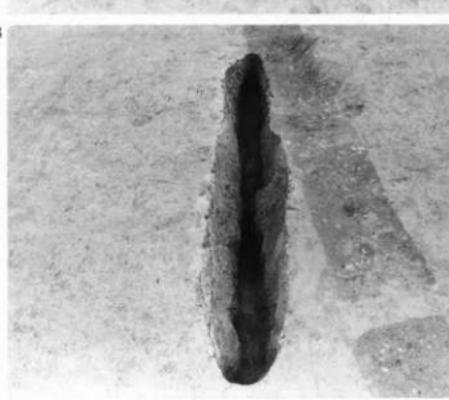
SK-023

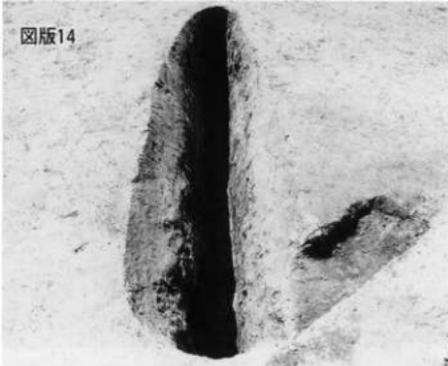


SK-118

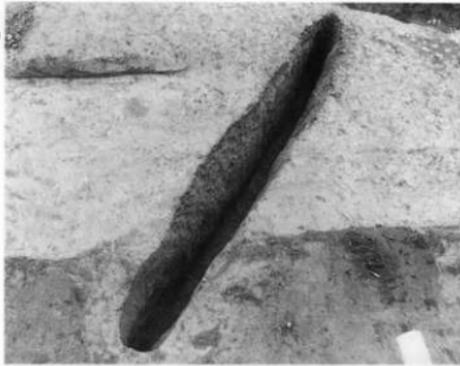


SK-103



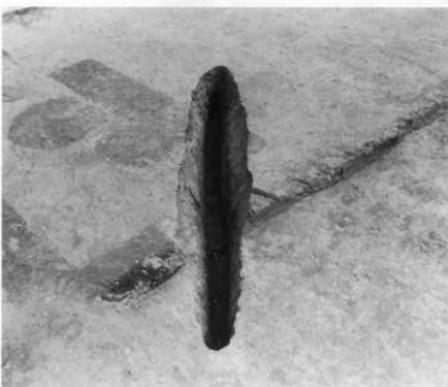


SK-120



SK-119

SK-011



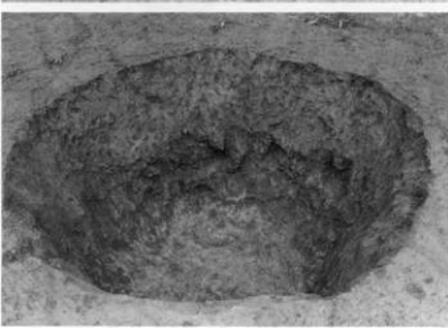
SK-121

SK-013



SK-012

SK-015



SK-014

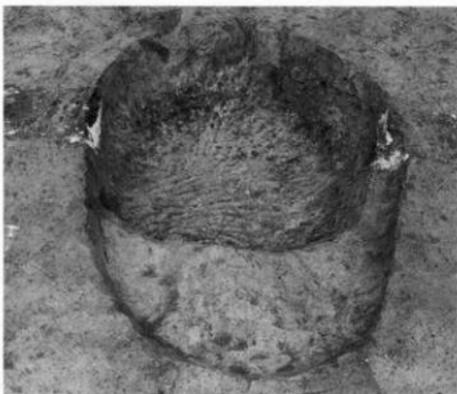


SK-016



SK-016

SK-022



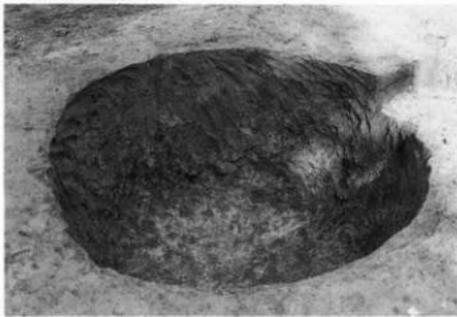
SK-017

SK-026

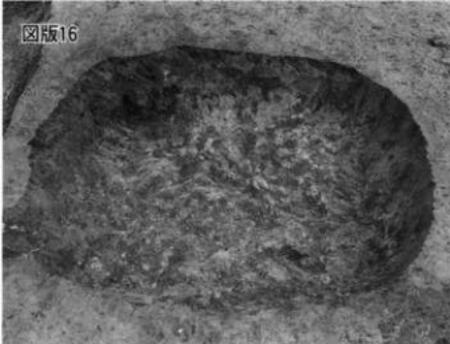


SK-024

SK-028



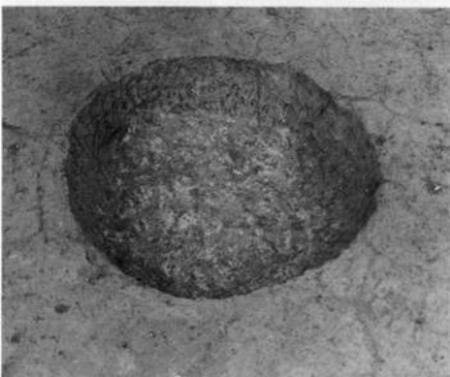
SK-027



SK-035  
SK-036



SK-029



SK-039  
SK-040



SK-037

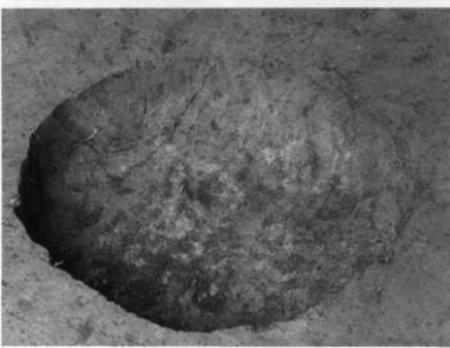


SK-042



SK-041

SK-044

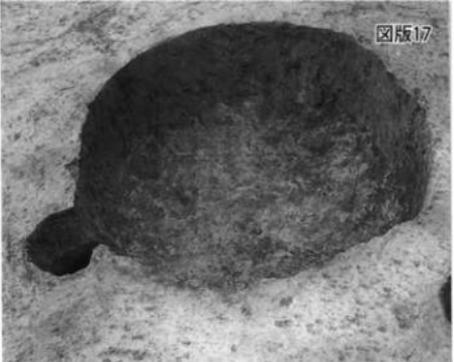


SK-043

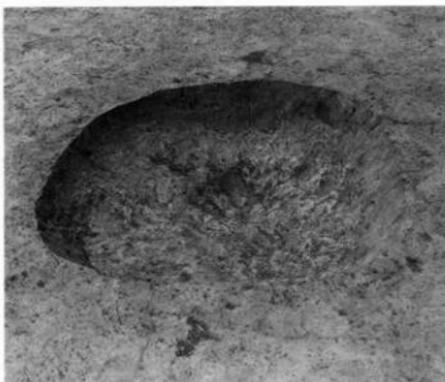




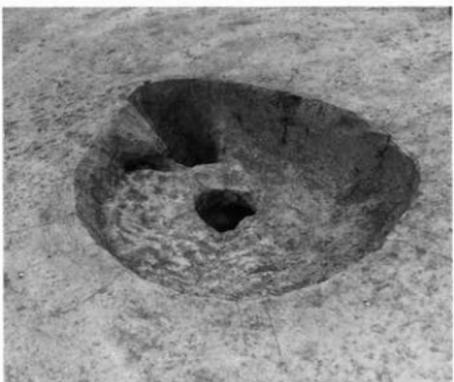
SK-046



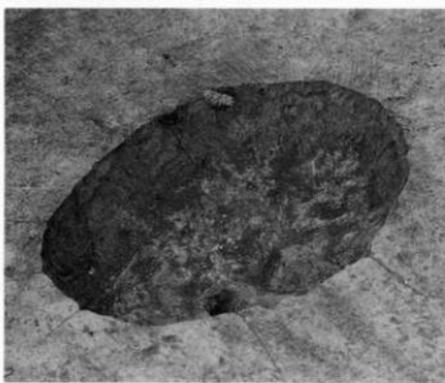
SK-046



SK-047



SK-045



SK-049



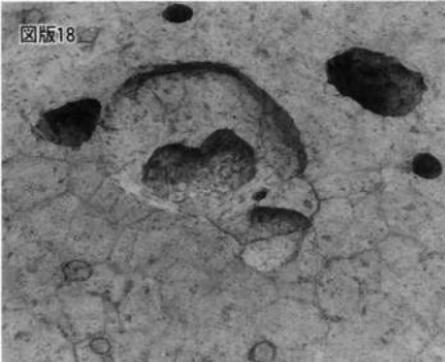
SK-048



SK-051



SK-050



SK-057



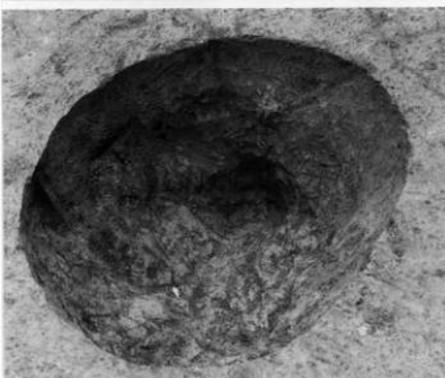
SK-057



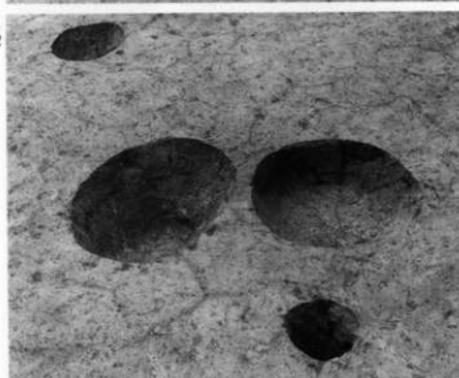
SK-059



SK-058



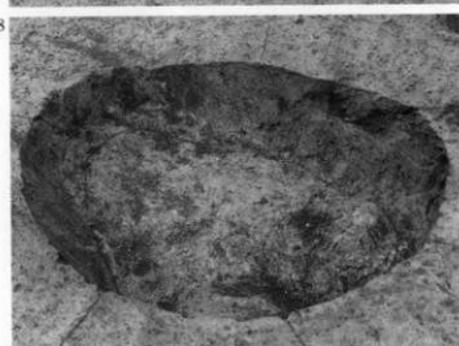
SK-061  
SK-062



SK-060



SK-068



SK-054  
SK-063

SK-069

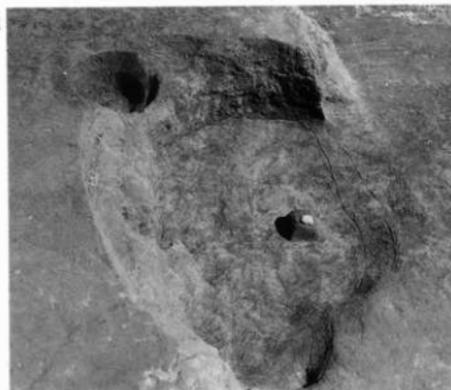


SK-069

15

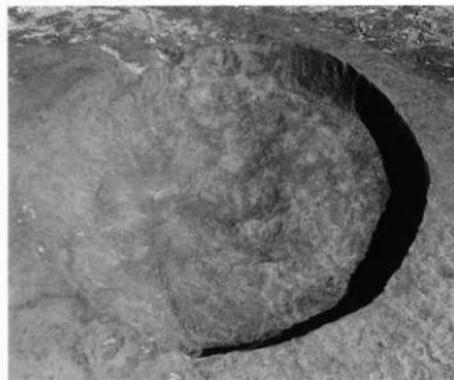


SK-071



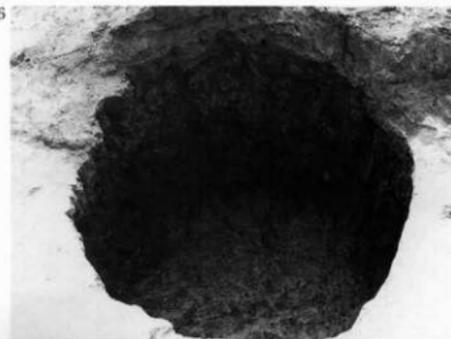
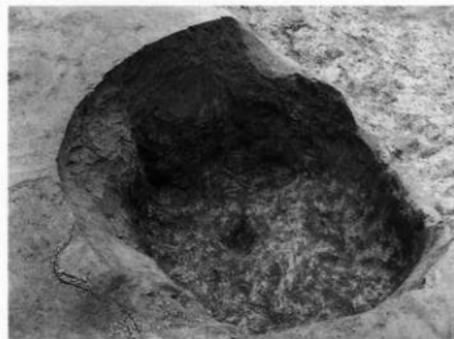
SK-070

SK-073

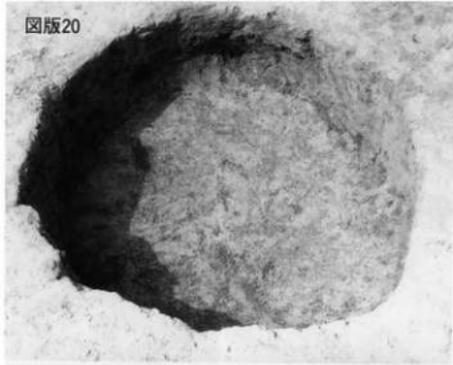


SK-072

SK-076



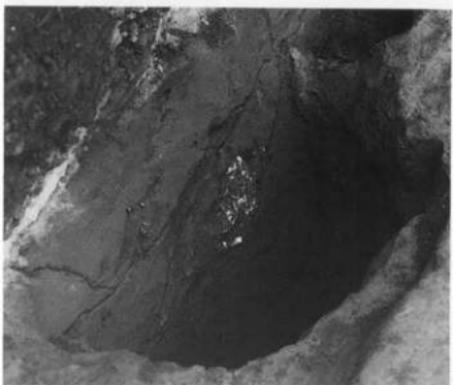
SK-074



SK-077



SK-078



SK-084



SK-081



SK-085



SK-085

SK-096



SK-085



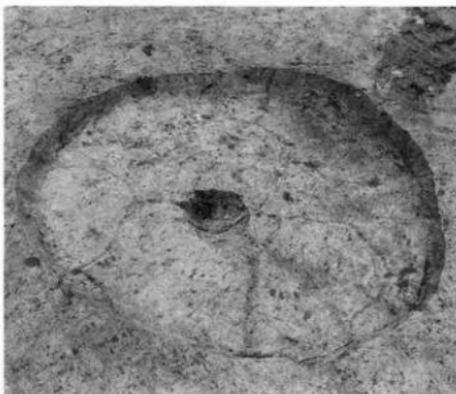


SK-101



图版21

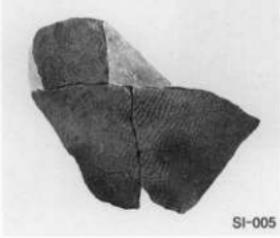
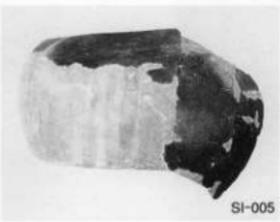
SK-098



SK-123



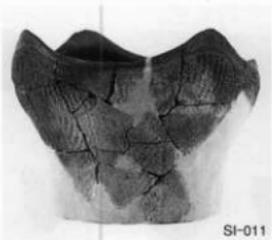
SK-106



SI-001 · 005 · 006 · 008出土土器



SI-011



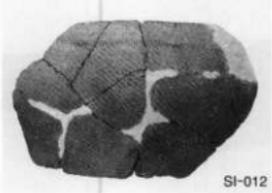
SI-011



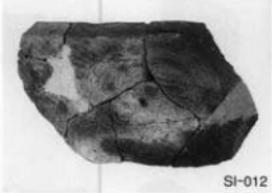
SI-011



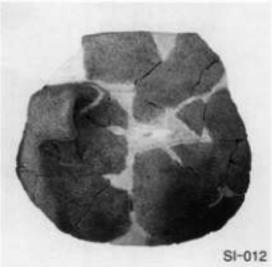
SI-012



SI-012



SI-012



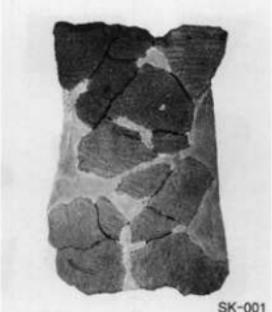
SI-012



SK-001



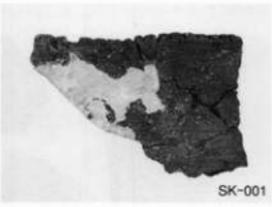
SK-001



SK-001

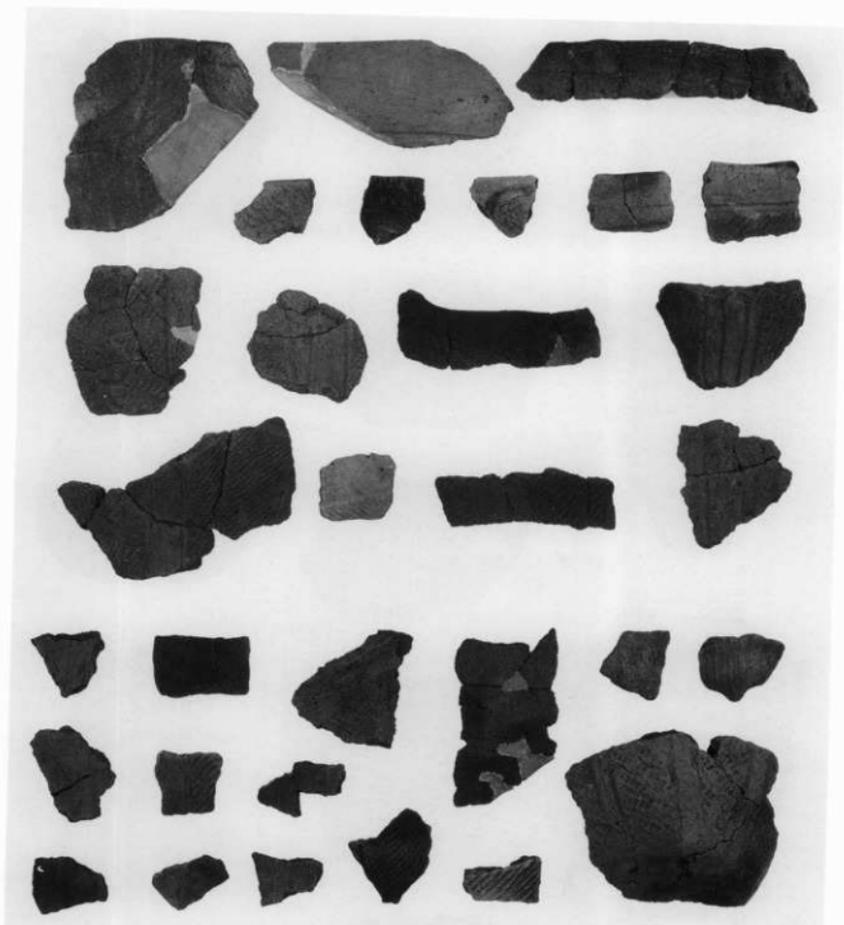


SK-001

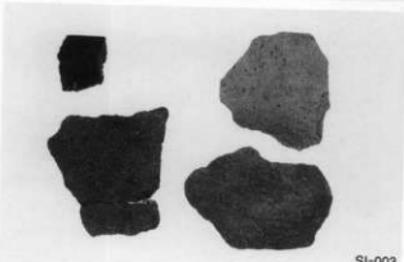


SK-001

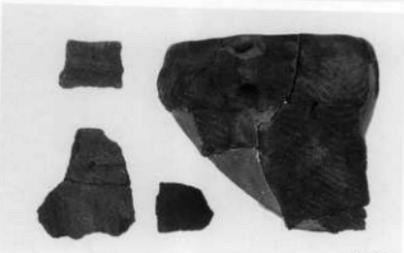
SI-011 · 012, SK-001出土土器



SI-001

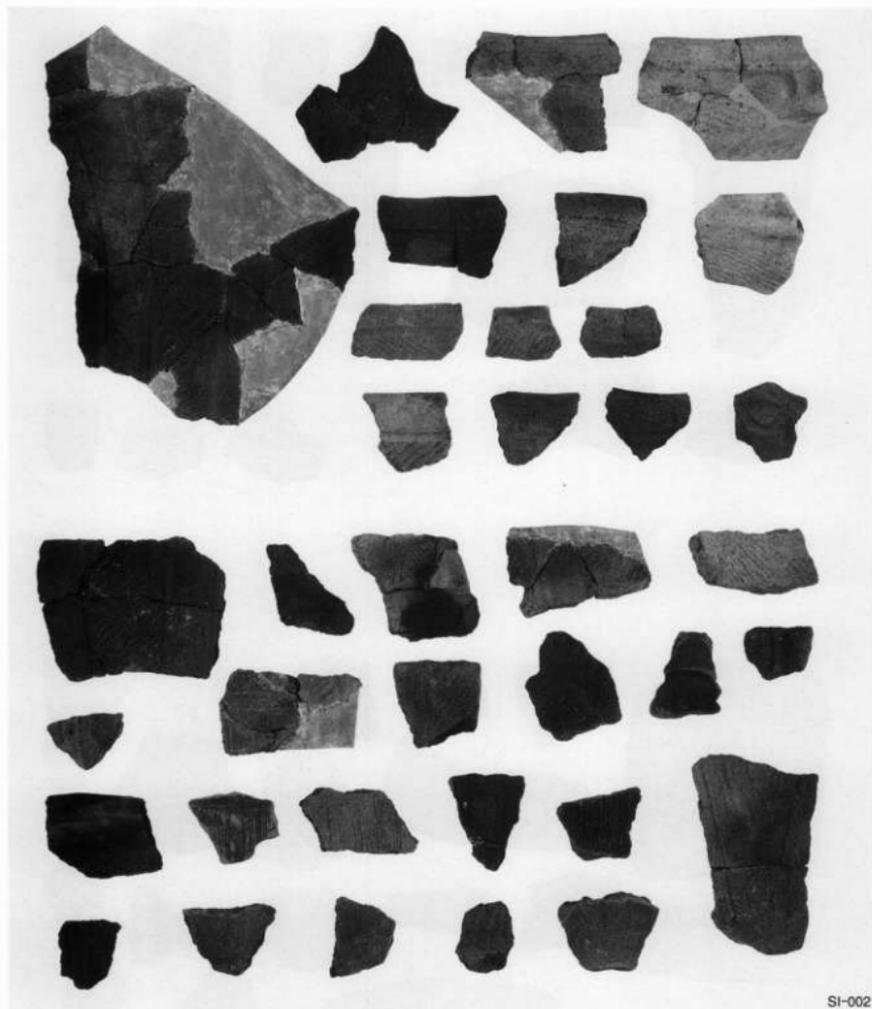


SI-003

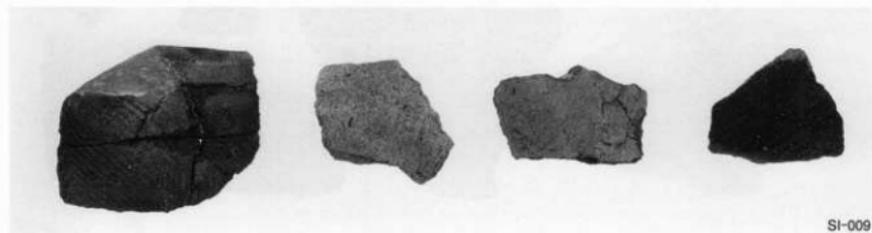


SI-004

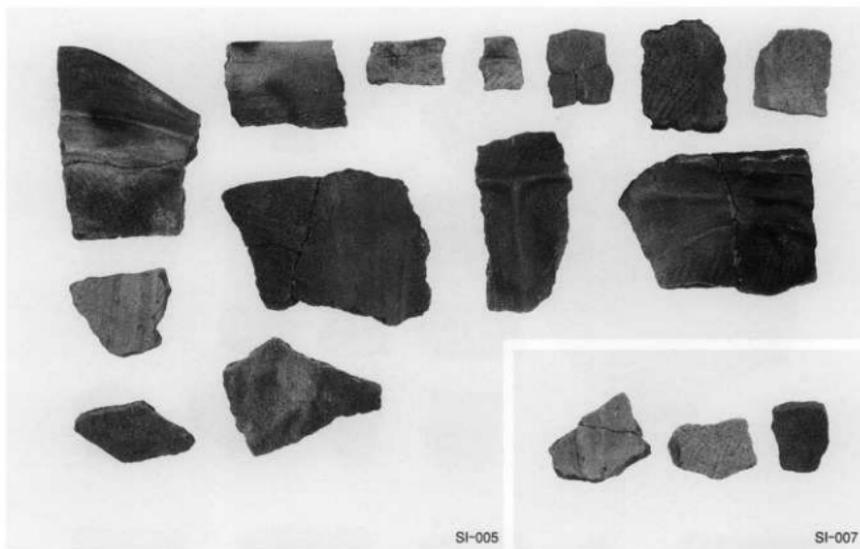
SI-001 · 003 · 004出土土器



SI-002

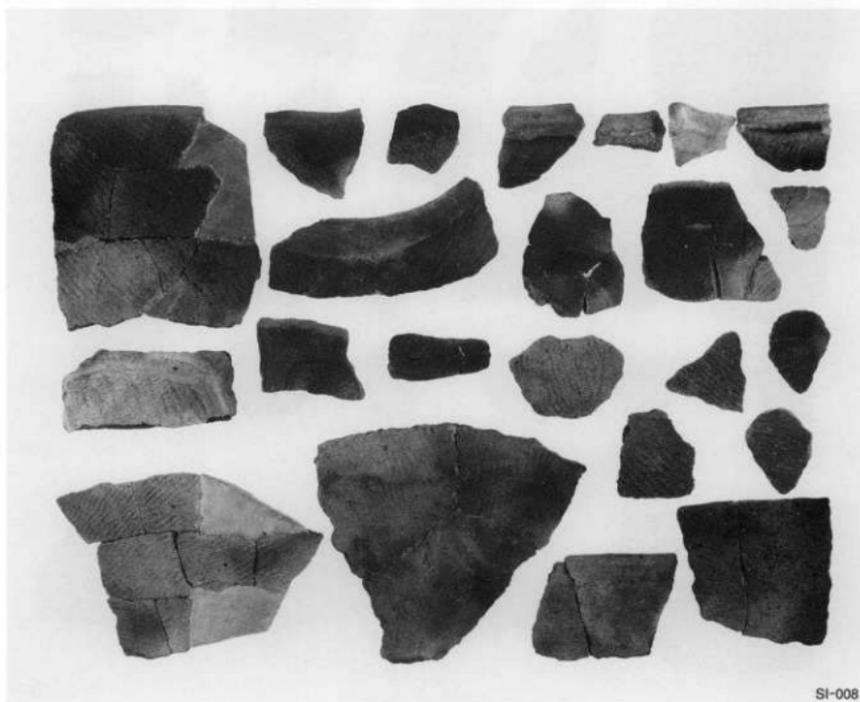


SI-009



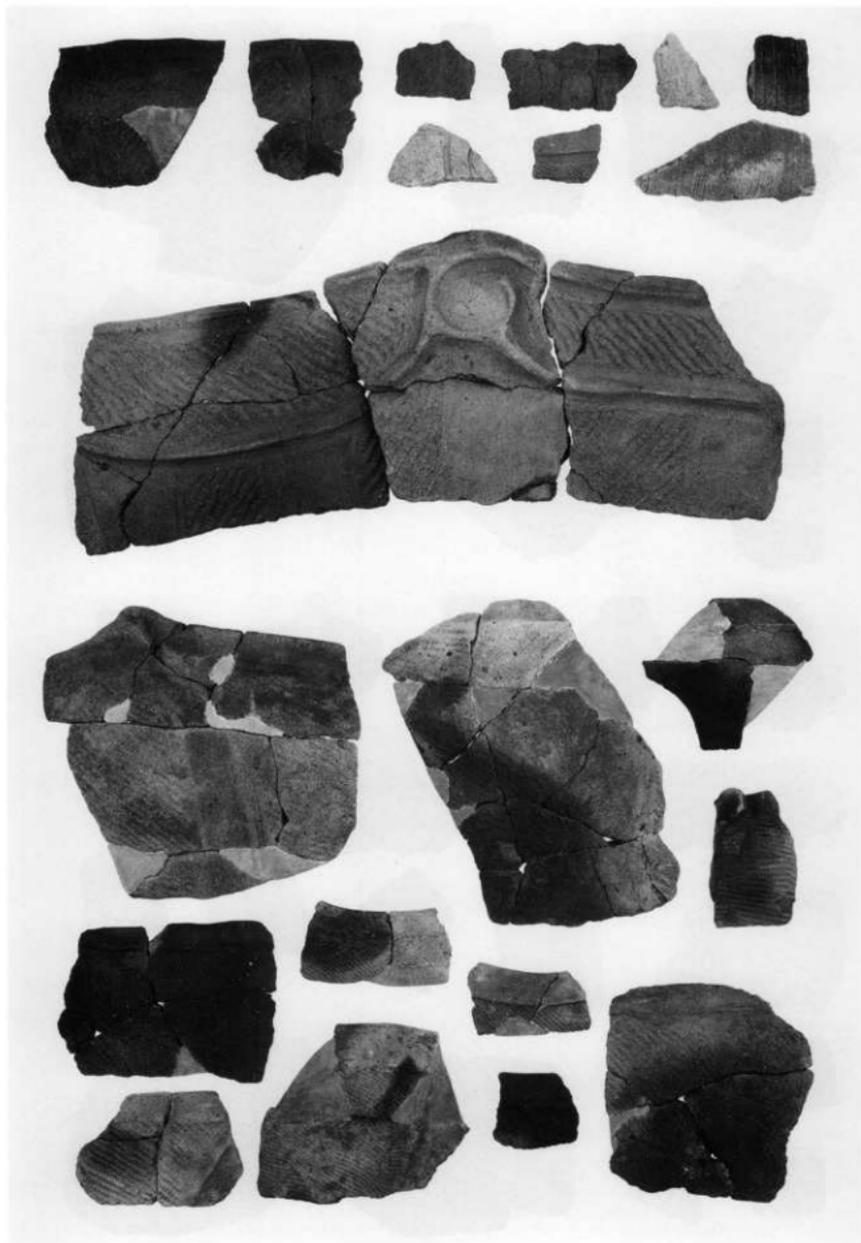
SI-005

SI-007

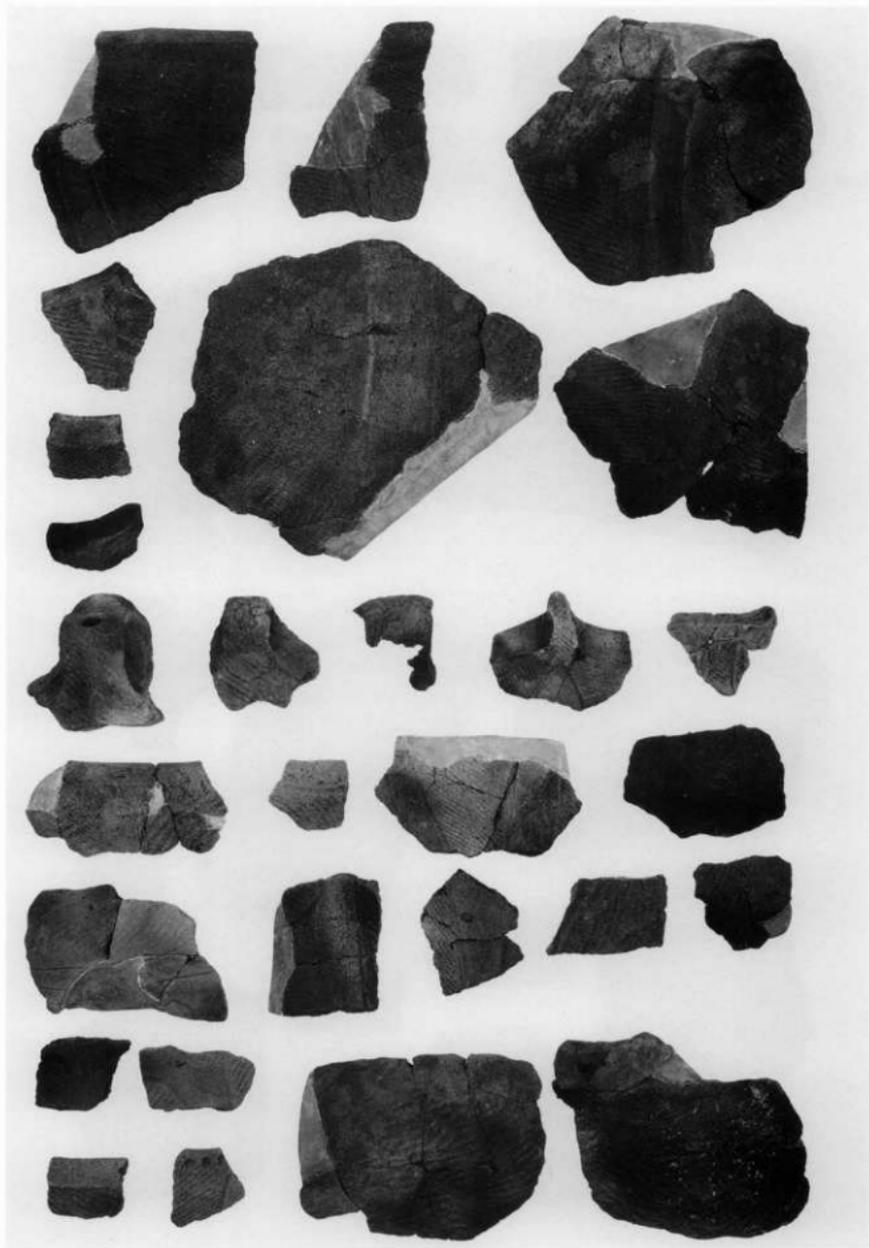


SI-008

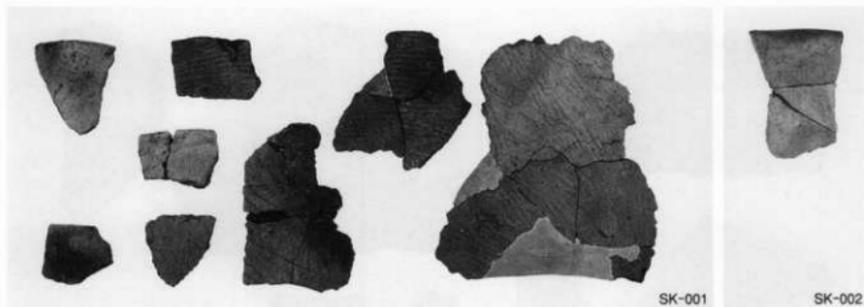
SI-005 · 007 · 008出土土器



SI-011出土土器

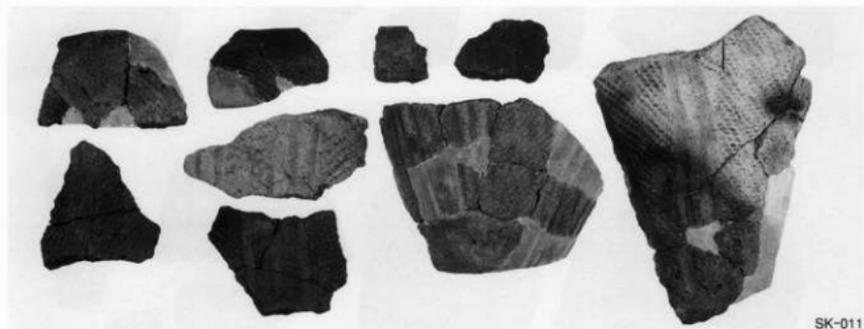


SI-012出土器



SK-001

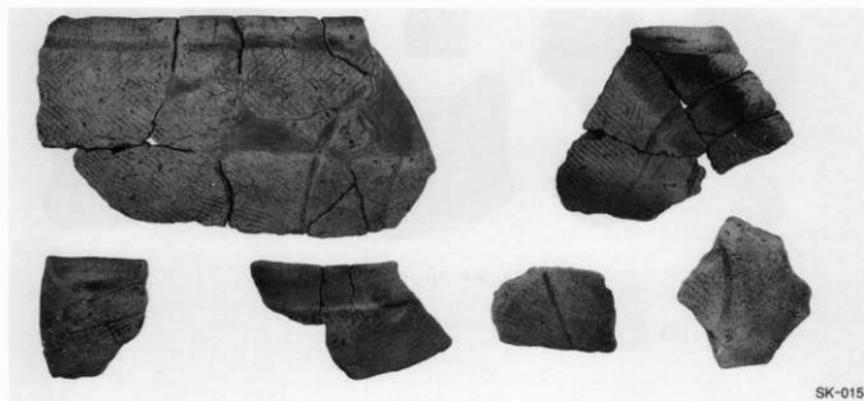
SK-002



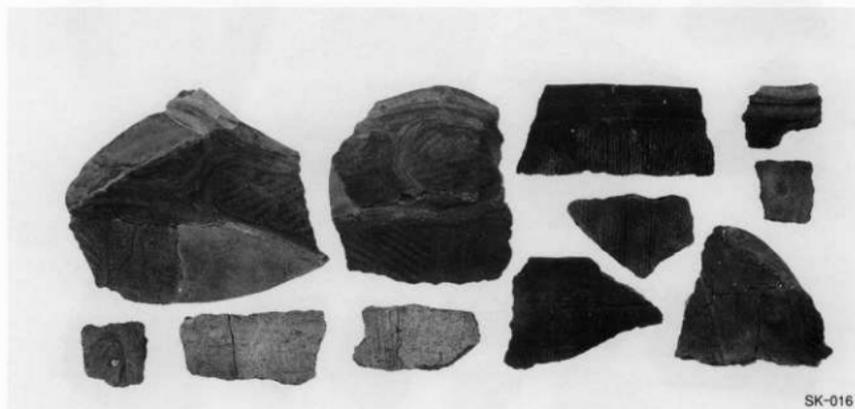
SK-011



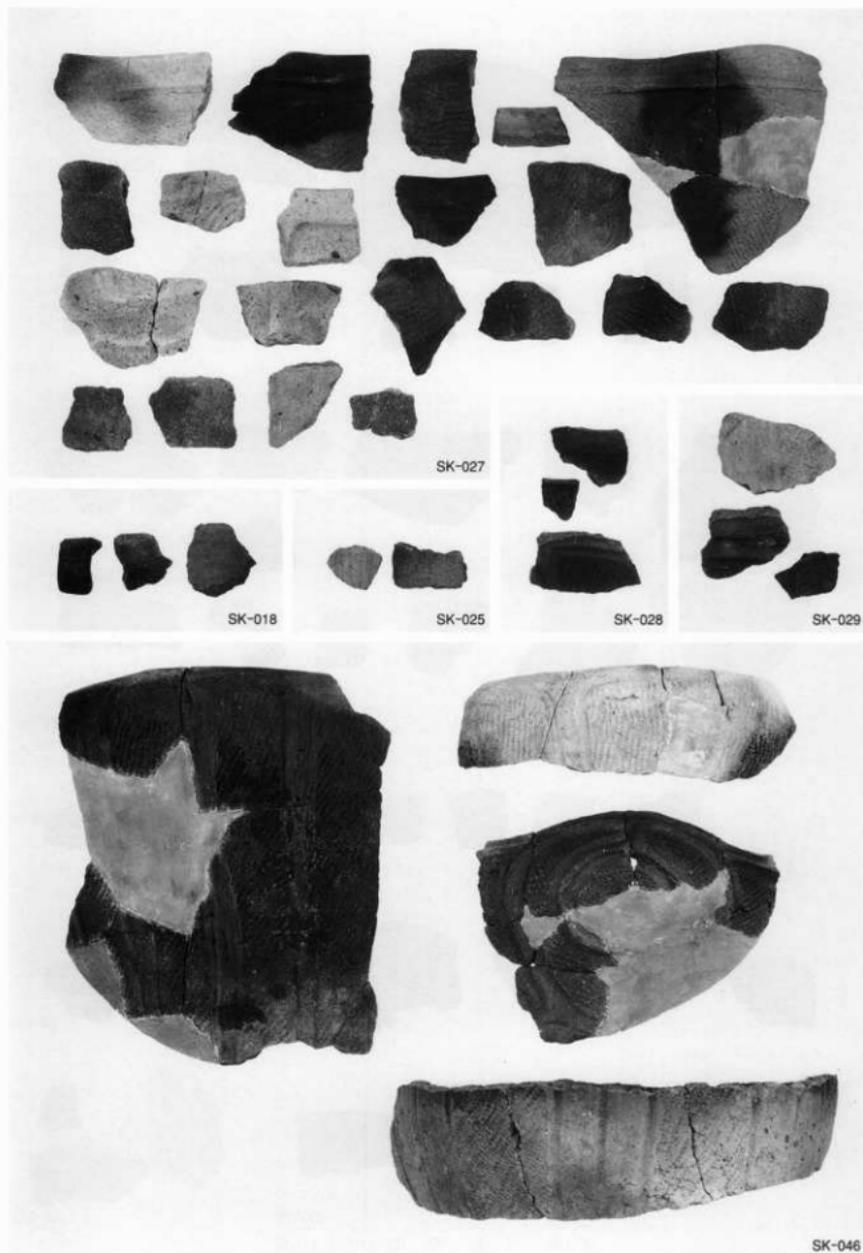
SK-012



SK-015

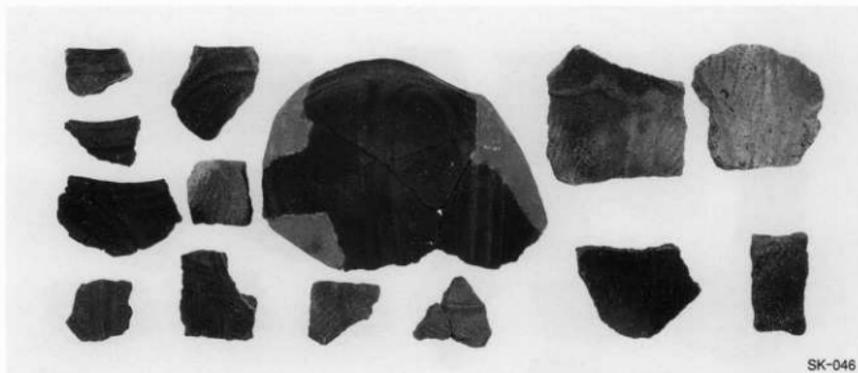


SK-013 · 014 · 016 · 017出土土器

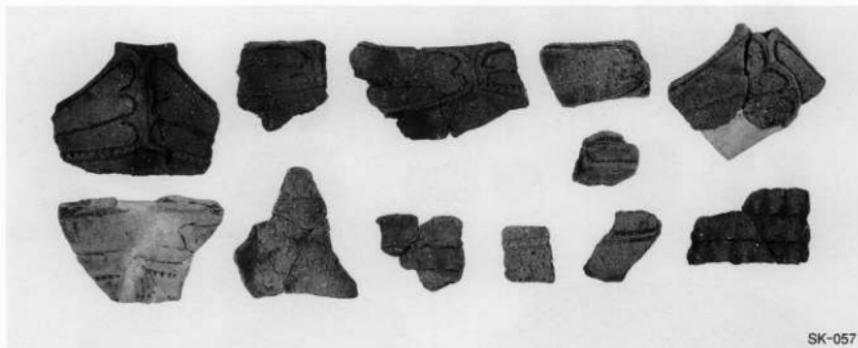


SK-018 · 025 · 027 · 028 · 029 · 046出土土器

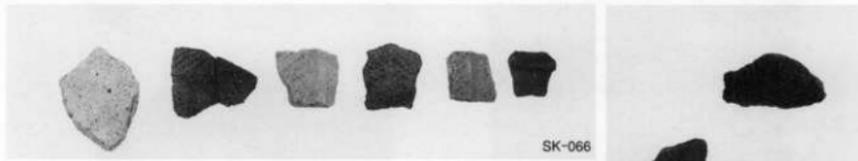
SK-046



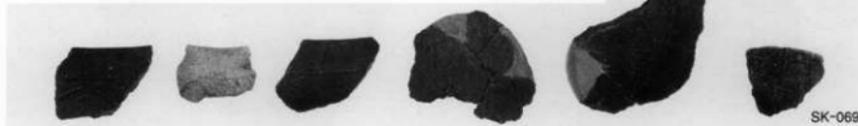
SK-046



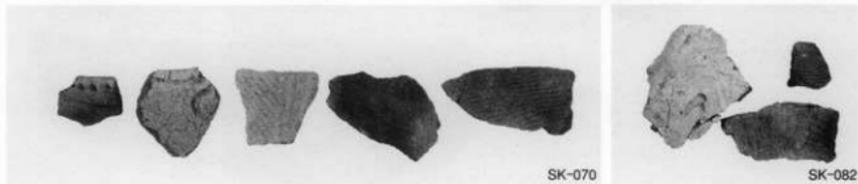
SK-057



SK-066

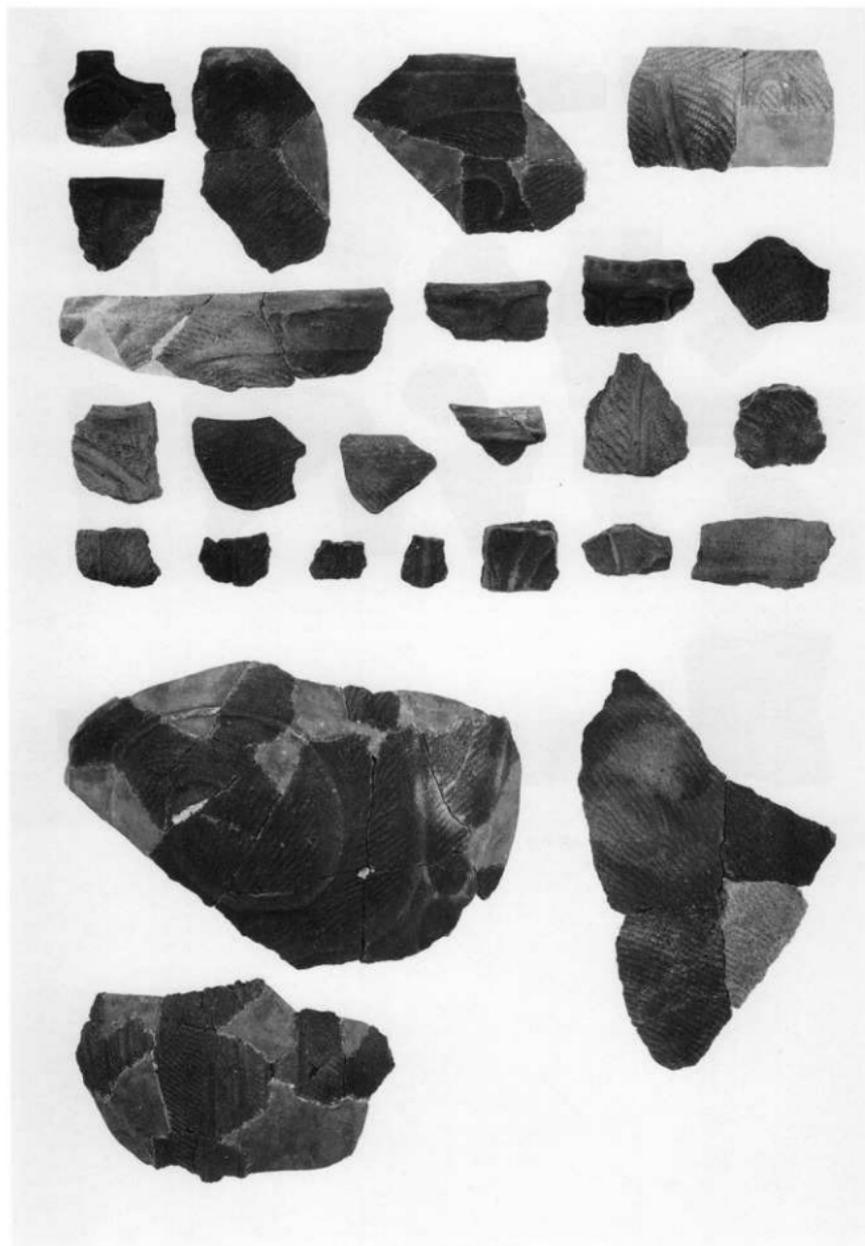


SK-069

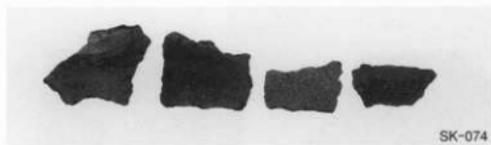


SK-070

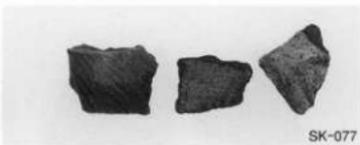
SK-082



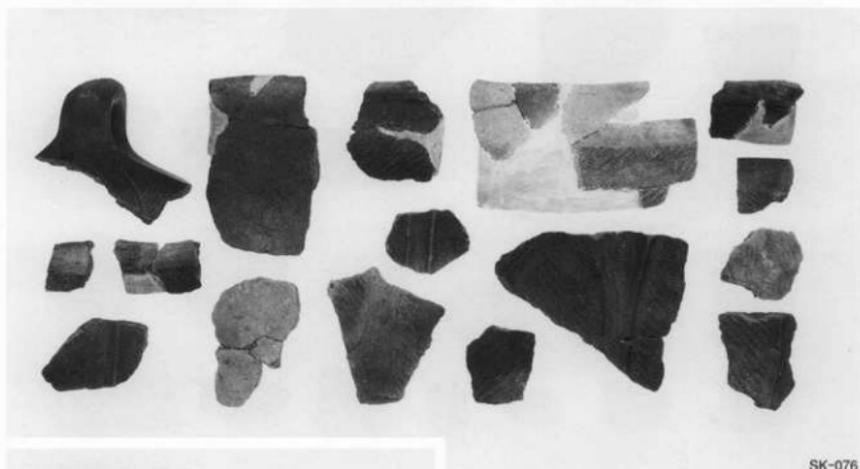
SK-085出土土器



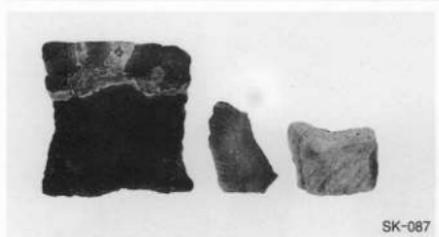
SK-074



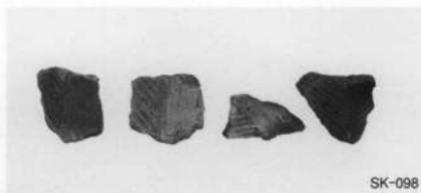
SK-077



SK-076

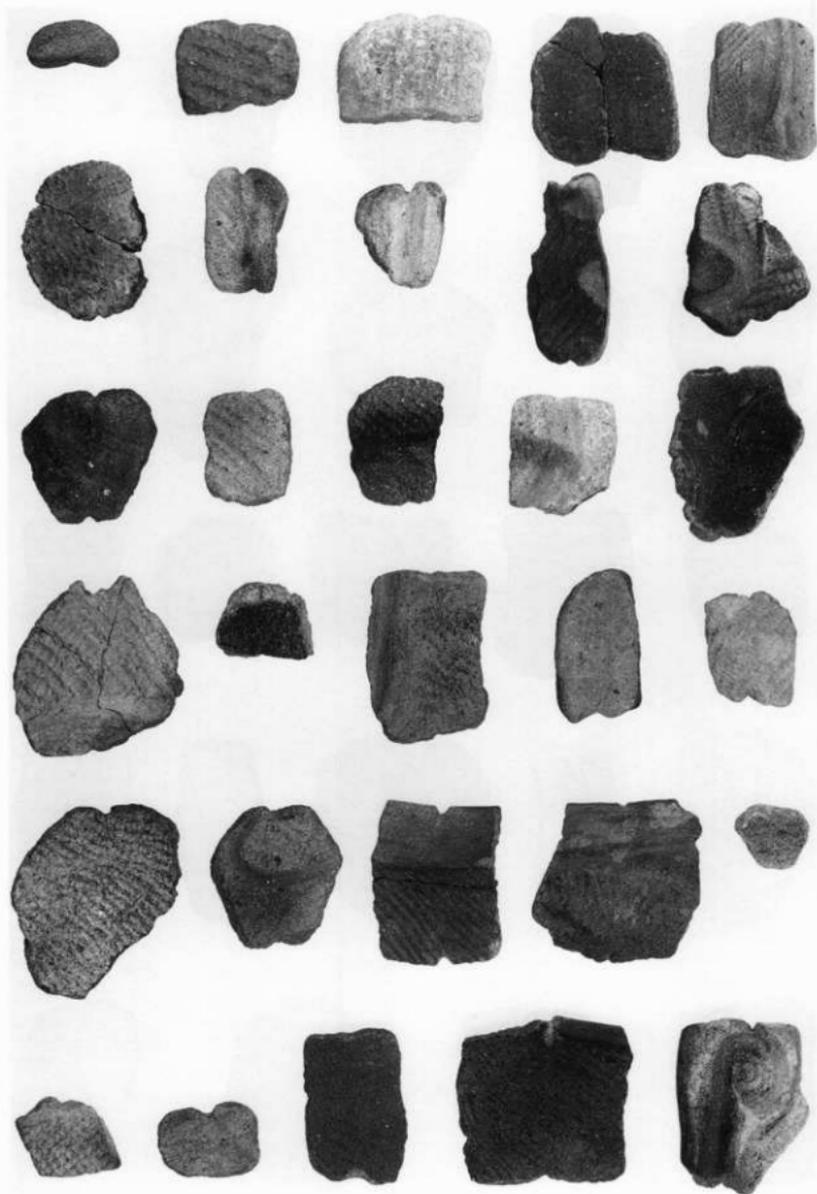


SK-087

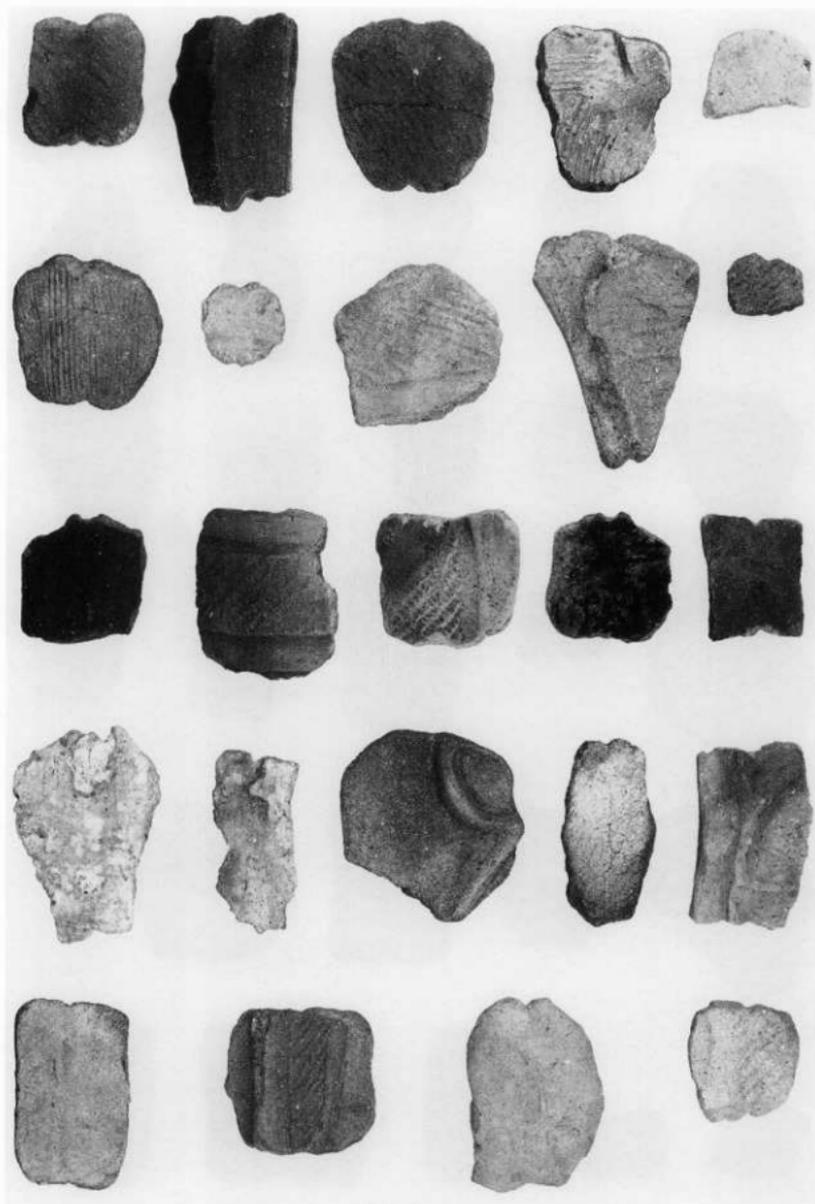


SK-098

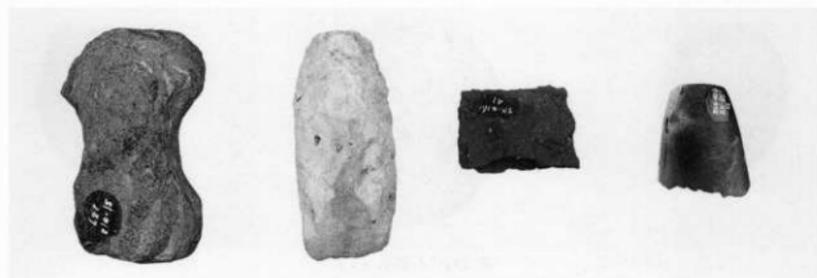
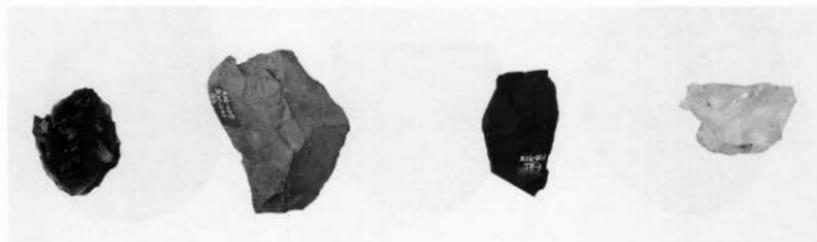
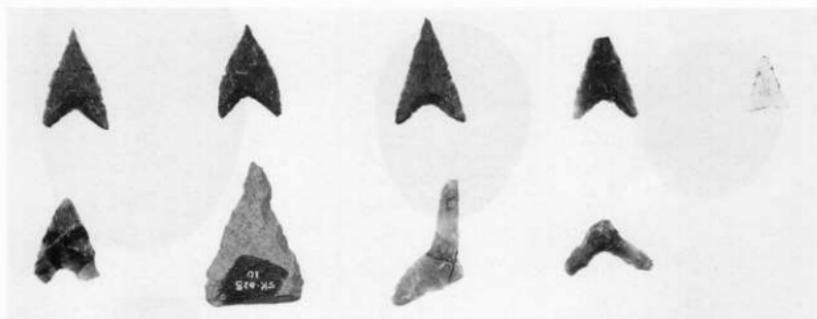
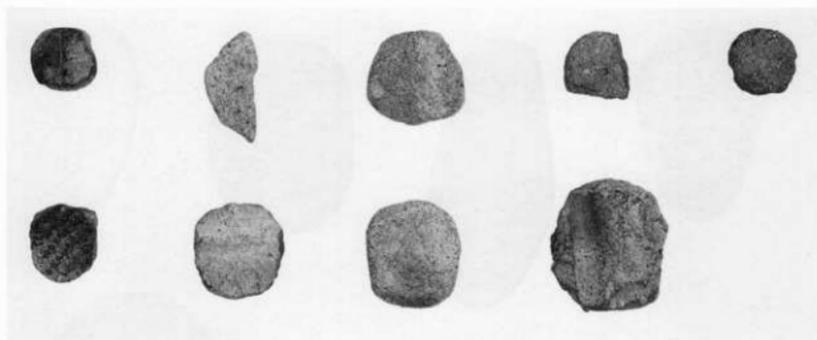
SK-074 · 076 · 077 · 087 · 098出土土器



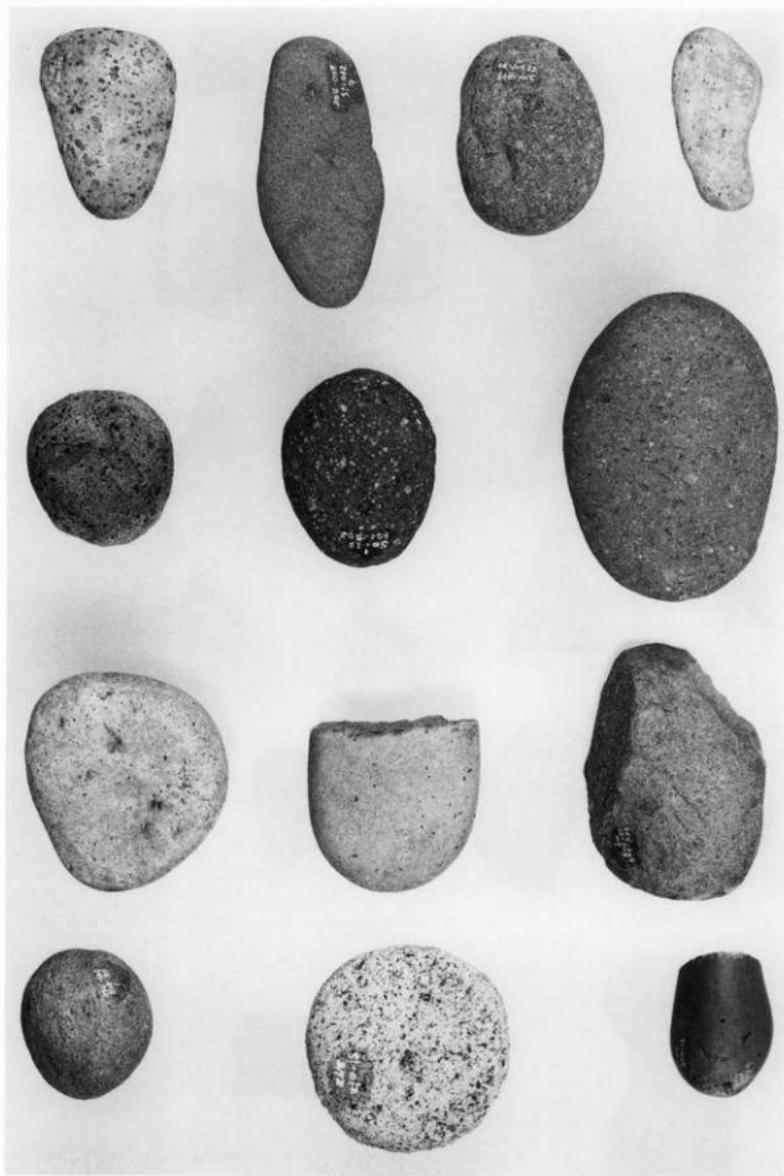
土器片雑(1)



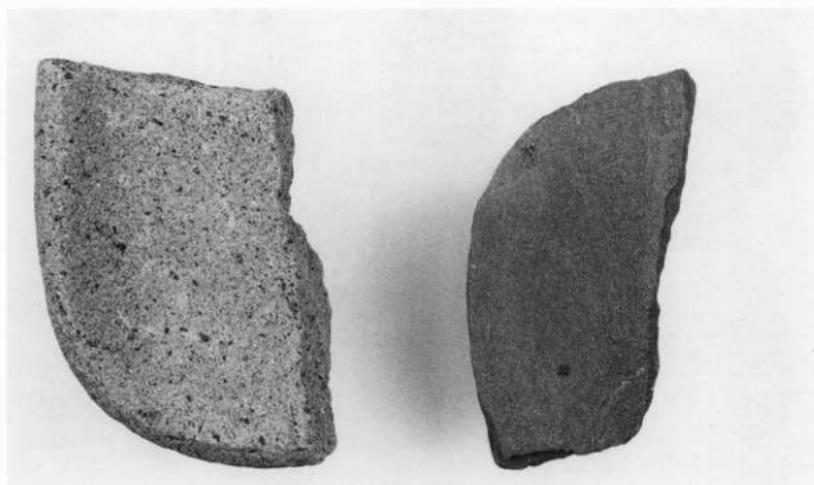
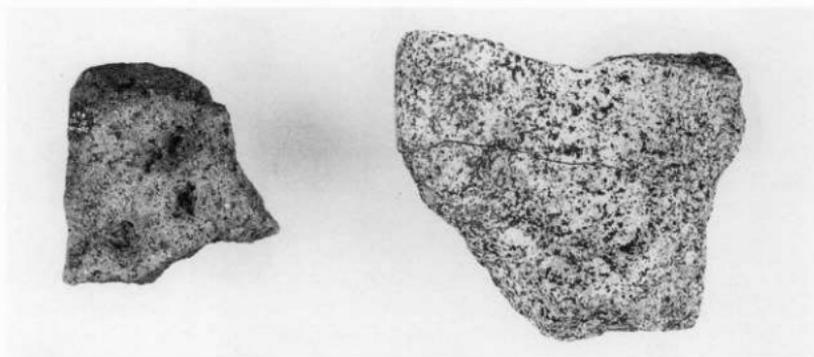
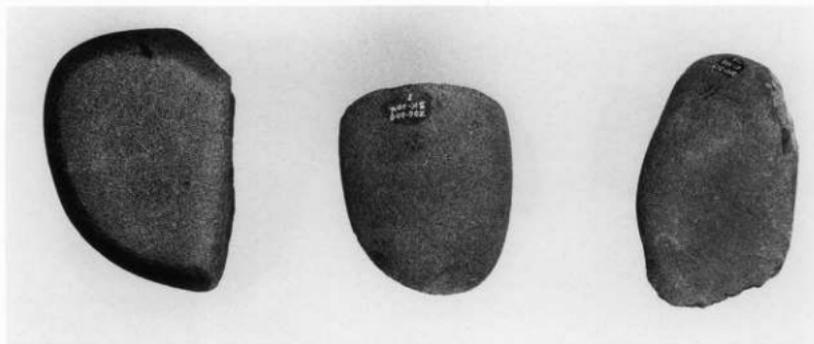
土器片 鍾 (2)



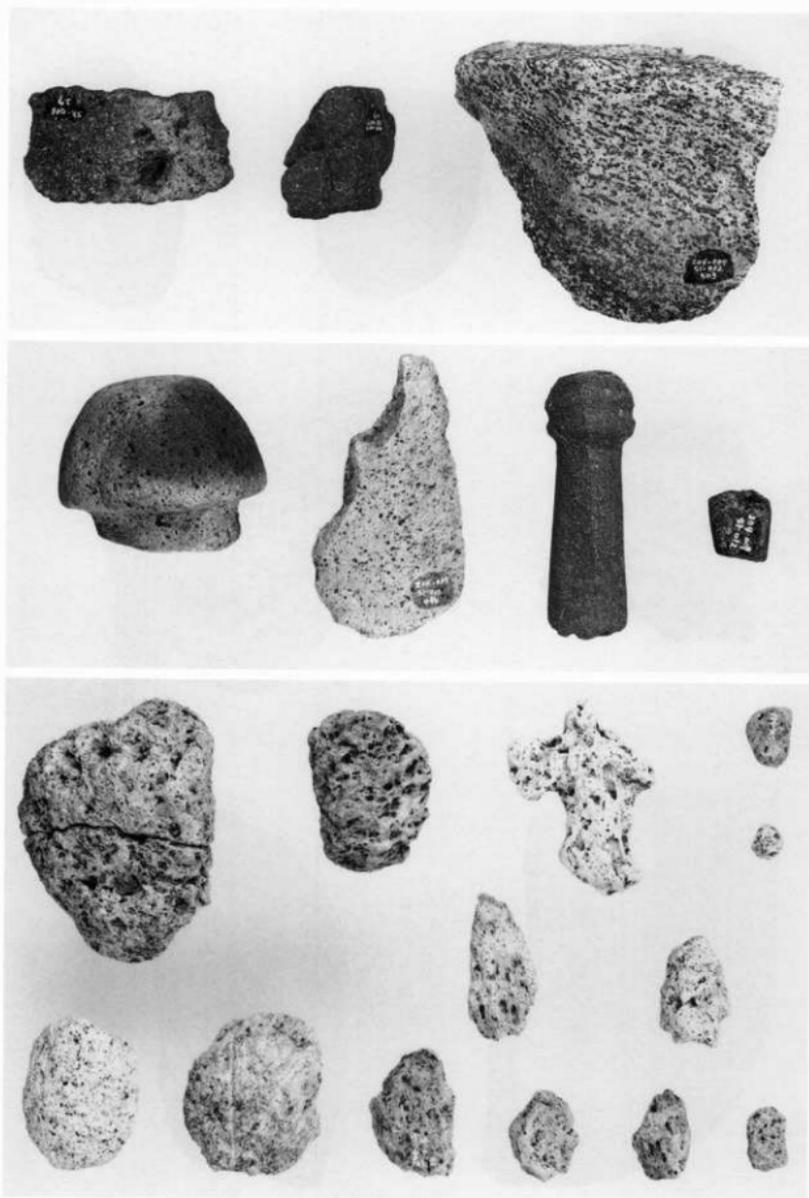
土製円盤、石鏃・その他の石器・石斧



縄文時代石製品（1）



縄文時代石製品 (2)



縄文時代石製品 (3)

## 報告書抄録

ふりがな	ふなばししんやまひがしいせき							
書名	船橋市新山東遺跡							
副書名	前原団地建替事業関連埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第400集							
編著者名	高橋博文							
編集機関	財団法人千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地2 TEL 043(422)8811							
発行年月日	西暦2001年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
所収遺跡名	所在地							
新山東遺跡	千葉県船橋市前原西	204	009	35度 41分 51秒	140度 1分 24秒	19980701～ 19990531	23,000	団地建替事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
新山東遺跡	包蔵地  集落跡	旧石器  縄文	石器集中地点3か所  竪穴住居跡 16軒 土坑 53基 陥穴 9基 炉穴 12基 ピット群	ナイフ形石器、尖頭器 石刃、石核、剥片  縄文土器（中期）、土製品（土器片鏟、土製円盤）石製品（石鏃、石斧、磨石、敲石、石皿、石棒、軽石）	石器製作跡が発見された。  縄文中期の大規模集落であることが判明した。			

千葉県文化財センター調査報告第400集

## 船橋市新山東遺跡

—前原団地建替事業関連埋蔵文化財調査報告書—

---

平成13年3月31日発行

編 集	財団法人 千葉県文化財センター
発 行	都市基盤整備公団 千葉地域支社 千葉県美浜区中瀬1-3
	財団法人 千葉県文化財センター 四街道市鹿渡809-2
印 刷	株式会社 正文社 千葉市中央区都町1-10-6

---